

349
37



始



11-182

出エ

347-37

オソツル

録悔懺



譯庵戲川石

篇前

大正
2. 3. 12
購求

此の譯書を父母に獻ぐ

7.19

序

ジャン・ジャック・ルッソは近代思想の一大源泉である。政治、道徳、文藝、其他現代文明の各方面に深大なる感化を興へて、今なほ其餘響を曳いてゐることは、隠れもない事實であつて、東洋諸國の覺醒についても、この天才の思想が否定すべからざる動機を供給したことは、後世の史家が必らず注意する所であらう。而してかれ一生の述作いづれも皆世界の人心に影響してゐるが、就中、この「懺悔録」は天下の一大奇書、近世文學の名著であつて、「新エロイズ」よりも「民約論」よりも、「エミール」よりも、永く百代に愛讀せらる可き文字である。時恰もルッソオ生誕二百年に際し、

石川君が佛蘭西の原文より、寸毫の省畧も無く、この名著を國語に翻譯して出版されたことは、明治文壇の一大事業であるといふも過言では無い。

ルッソオの性格と閱歷と事業とは、この「懺悔録」中に餘蘊無く述べ盡されてゐて、そこに非凡の人格が躍如たる自叙傳の面白味が充分ある。然しもしそれだけなら、聖アウグスチヌスやベシズウト・チエリニの告白を讀んで、かういふ珍らしい性質の人が、藝術家の中にあるのか、又は信仰の經驗とはかうしたものとのかといふ、大部分は智識上の興味を受けるのと大差は無いが、ルッソオの場合は、それ以上に更に大きい深い痛切な興味を感じるので面白いのである。全體この「懺悔録」が文藝として不朽の生命を有つてゐるのは、何も百世の師表たるべき精神界の規

範を教へてある爲でもなく、萬人の據つて以て行を正す可き手本を示してゐる爲でもない、否、寧ろ清濁美醜雜然とした一生の腹藏のない告白を、著者が力強く述べ立てた爲だ。情熱の焔はあらゆる汚濁を焚き盡して、讀者の眼に映り、胸に響くものは、ただ一道の靈光である。智識よりも、行爲よりも奥深く潜んでゐる生命の叫は、一大長篇の抒情詩ともいふべき此書を貫いてゐて、萬人の心に共鳴を生じる。近代人はこの書の裡に、世と共に新らしくなつてゐる「自我」の影を見出すであらう。煩惱も執着も妄念も我意も、力強く美しい情熱の煉金術を経て、正義となり同情となり理想となり愛となる不可思議の變化を、ルッソオの一生について會得しない者は、まだ其真相を穿つたとは言はれない。

ルッソオを指して情の人といふのは素より當つてゐる。然し寧ろ創作の人といふ方がなほ適當であらう。新らしい感じ、新らしい道を拓いて進む創作力は、強く、執ねく、禁め難く、行く所まで行き盡さねば止まらない、恰も水火の如き自然力の風がある。此創作力が性格の奥に潜んでゐて、殆ど二重人格ともいふ可き彼の性質を刺戟し、或時は壯烈なる智力の活動を促して、理智の白光を前人の究め盡さなかつた所までも及ぼし、又或時はこれが反動として、何物も抑へ難い感情の波に全人格を没して了ふ。此時創作力は情熱の熔爐中に在つて、沸騰し、泡起するのと暫らく、忽にしてまた清新の思想を發射する。生長にはいつも刺戟が要る、生みの苦みが伴ふ。ルッソオの創作は常に反抗の産物であつた。冷然たる理智の論理を進めて、分析し解説し

て行く尋常の法とは異がつて、常に實際又は虚構の論敵を眼前に控へ、或は宥め或は壓して、終に之を心服せしめねばやめない。生きた人間を前に廻して置いての對話である、勸誘である、説教である。例へば「エミール」は絶えず二個人格の對立を思はしめ、「サヂャ」牧師の信仰宣言は熱烈なる法話の一種、「民約論」は壯烈なる新政の布告である。ルッソオは更に明らさまな直接の手段を執つて、書を論敵に送り、之を納得せしめなければ、説破し粉砕しようとして来た。ダランベエル其他に送つた幾多の書翰がそれである。而して「懺悔録」に至つては、一見して素より獨語の體裁を具へてはゐるが、實は著者のめぐりに、眼に見えぬ無數の瑕あり、罪あり、弱みあり、愛し且つ惱める人間の群集があることを忘れてはならぬ。「懺悔録」はまた一種の解嘲として書き始め

られた、而も「理を述べ證を擧げて世間の誤解を晴らさうとする辯護ではない、眞を眞とし自分を在の儘に現はすと稱して、無數同胞の群をして、わがこの汚辱に悲の叫を揚げしめ、わがこの窮苦にその顔を赧らめしめよと、捨身になつた所に非常な強みが生じてゐる。」「懺悔録」は、はじめ一書肆の勸に従つて、モチエに居た時書き始めたのだが、もし後半生の迫害が無かつたら、恐らく完結しなかつたかも知れない。いつもルッソオは障礙に會つて、更に反撥力を加へる。物平ならざれば鳴るとは、特にこの天才に當嵌まるやうだ。

屈しては伸び、伸びては屈し、更にルッソオの創作力が一大飛躍を試みる時、情は常に理に先きだつて進む。又明晰なる談理の間にあつても、生氣のややもすれば衰へようとする時、必らず

情性の活動が加はつて、彼の思想を指導して行く。故にルッソオの述作は悉く皆一種の小説である、と評する者があるのも無理ではない。なるほど「エミール」は教育の小説、民約論は理想國の小説、懺悔録はかれが一生に關する小説であらう。然し、かれの一生そのものが、かれの思想と同じく既に始めから小説である以上、これは自然の事である。而して、この小説の如き述作は、語を換へて言はば、また一種の音曲であつて、新らしい感じ、新しい思想が、單に記るされ、語られるばかりでなく、實は始めから朗らかに、はた染々と歌はれてゐる。ルッソオの作品は一の交響體樂である。彼によつて、近代の思索には音樂の情緒が入つて來た。オペラ・コミックで演じたルッソオの作曲はいふに足らないが、それよりも深みのある大音樂は、自から彼の思想に行

き互つてゐて、理智の光覺束なく、言語の道が斷つ所にまで、近代人の情緒を誘ひ行くのである。

情緒を搖る者は、すべてを動す者である。規範は廢り、形式は壞れ、理智終に惑ふ時、新らしい生命の勇を鼓して人の躍進する所以のものは、情性の誘致あるが爲である。近代の人は皆靜に安んぜずして動に生きる。唯生きるのでは眞に生きたのではない、動くのが生きるのであるとは、現代の智者が自から曉り得た所だが、かかる思想と氣分とを夙に創作し得た者は實にルッソオである。理智を過重せず、情性の價值と權威とを認められた點が、かれの最も偉なる所だ。「懺悔録」が永く幾代に互つて價值を存するだらうと思ふのは、如何にもルッソオが人格の奥に潛む創作力が強烈であつて、近代人の重んずる生命の冒險を試みて

ゐるからである。現代の大抒情詩人エミール・ゼルハアレンの作「錯誤」といふのに、沙山陰に古るくからあつて、月無き磯を、暴風の沖を照らしてゐた燈明臺の火が消えたことを詠んである。其時心ある者は、頼杖ついて沙山の隅に坐しながら、夢の迷宮に手さぐりしてゐる。稍強い者は、日常の業に勤しんで、空しき夢に耽らず、忠々しくも他所より火種を求め來つて、新らしい光を作らうと苦心する。而も最も偉大なる者は、心に堅く誓ふやう、今は前後を顧みる時で無い、この渴したる心を抱いて、何はともあれ前進しよう、力と命とは實に眞と偽とのあなたにあるからと。ルッソオの創作力とはこの力と命とのことである。

序

石川君の此「懺悔録」譯本は、友人上田敏君の序を得て足れりと云つて好い。上田君は慣用の婉曲文字で、此書の來歴、性質、効果を遺憾なく、痒い所に手の届くやうに説いてゐる。それから此書を譯するに、石川君がどれ丈適してゐるか、と云ふことも、大抵上田君が讀書家に對して紹介してゐる。私は唯懺悔録と自己との關係を一言附け加へる丈に留めて置きたい。それは私が一度此書を譯することを企てたことがあるからである。また森田文藏君が存命してゐた時であつた。森田君が主宰して「譯府」と云ふ翻譯ばかりを載せる雑誌を發行しようとした。それ

に私も何かどつしりした重みのあるものを譯して出さうと云つて、雑誌の初號に載せる原稿を作つて、森田君にわたして置いた。それが此書の初の幾面かであつた。私の計畫も全譯の積りであつた。併し譯府は生れないうちに滅びてしまつて、私の原稿は空しく返されてしまつた。その後寺山啓介君が「城南評論」といふ雑誌に、私の譯稿を出すことにしたので、私は跡を書き續いて行かうと思つた。併し私が外の事業に阻碍せられてはかばかしくも書かず、きれぎれに出してゐるうちに、城南評論も潰れた。それで私の譯本は斷簡になつてしまつた。その頃から今日までに鈔譯本が出たり、摘譯が雑誌に載せられたりしたが、皆取り立てて言ふべき程のものではない。要するに懺悔録の國語譯は石川君の此本が唯一の完本である。私の言はうと

思つた事はこれで盡きてゐる。私は此本が世間に出て多く眞摯なる讀者を誘ふことを願ふものである。俗論が或はこれを危険な書だとするかも知れない。併しルッソの書が危険なら、カントの書も危険であらう。さうなると新しい文藝も新しい哲學も一切排斥しなくてはならない。私はそんな俗論を憚つてゐることは出来ない。

明治四十五年六月

森 林 太 郎

譯者例言

此の譯に用ひた原書は善本と謂はれる。

Nouvelle bibliothèque classique des éditions Jonast: Les Confessions, 3 vol. E. Flammarion.
である。そして左の三書とも校合した。

Les Confessions, 1 vol. Garnier Frères.

Les Confessions, suivies des Réveries du promeneur solitaire, 1 vol. Garnier Frères.

Les meilleurs auteurs classiques français & étrangers: Les Confessions, 2 vol. E. Flammarion.

この外に英譯本で Sisley's と William Glaisher's をも参照した。日本に行はれてゐる「懺悔録」の多くは、此の英譯本の第二のものであるらしい。更に念のため、獨譯本 Denhardt の *Bekentnisse* をも見た。佛文原本が四種、獨譯一種、これにて不安の念を拂ふことが出来た。併し、やはり原書だと思つたのは、英譯本のパラフレイズと倒錯のはげしいのや、獨譯本のさくり／＼と端的に行つて了ふのなどは、どちらとも原文の手法とは大きな距離があり、情調などもしんみりと移つて居ないや

うな氣がされたからであつた。

この翻譯の稿を二度改めるまでに、五年の時日が斷續の間に費えた。長くかかつたから良いとも言はぬが、譯者には種々な思ひ出を残した期間であつた。本書を讀む上に注意すべき箇條を二三擧げて置く。

一。「懺悔録」の成り立、時代の背景、本文以外の主人公の言動、事業、殊に「懺悔録」以後の晩年に係るもの、其の他種々な關係人物と事項、それらは皆本文の中で、譯者云の下に注解した。

二。伏字が二三箇所あつた。目障りになるから削つて置いた。但しそれは極めて僅少な部分で、全譯といふ名に累する程のものでは決してなかつた。

三。毎紙面の上端の數字は年代。其の括弧の中のは主人公の算へ齡。

四。音譯の假字には、初め一度だけ原字を添へる。

五。固有名は大抵その國々の原音であらはず。

六。卷頭挿入の地圖五面には、書中に出る地名を大抵網羅した。

一九一二年五月

譯者

目次にルツソオ略年譜

ジッネエツに生る.....一七二二年六月二十八日

父ジッネエツを逃亡す——小父セチベルナルに寄る——ジッネエツに近
きボッセエの宣教師ランベルシエに投ず.....一七二二年

再び小父セチに寄る——公證人マッスロンの書生となる.....一七二四年

彫刻師デッコモンモンの徒弟となる.....一七二五年

ジッネエツを去る——ワレンス夫人に知らる——トリノにて加特カト力リキ教
に改宗す——ヴェルチェルリイ夫人、グウツァン伯爵の僕僮となる.....一七二八年

.....一七二八年

教をゲムム師に受く——アヌシイなるワレンス夫人に復歸す——教
界に投ぜむとして成らず.....一七二九年

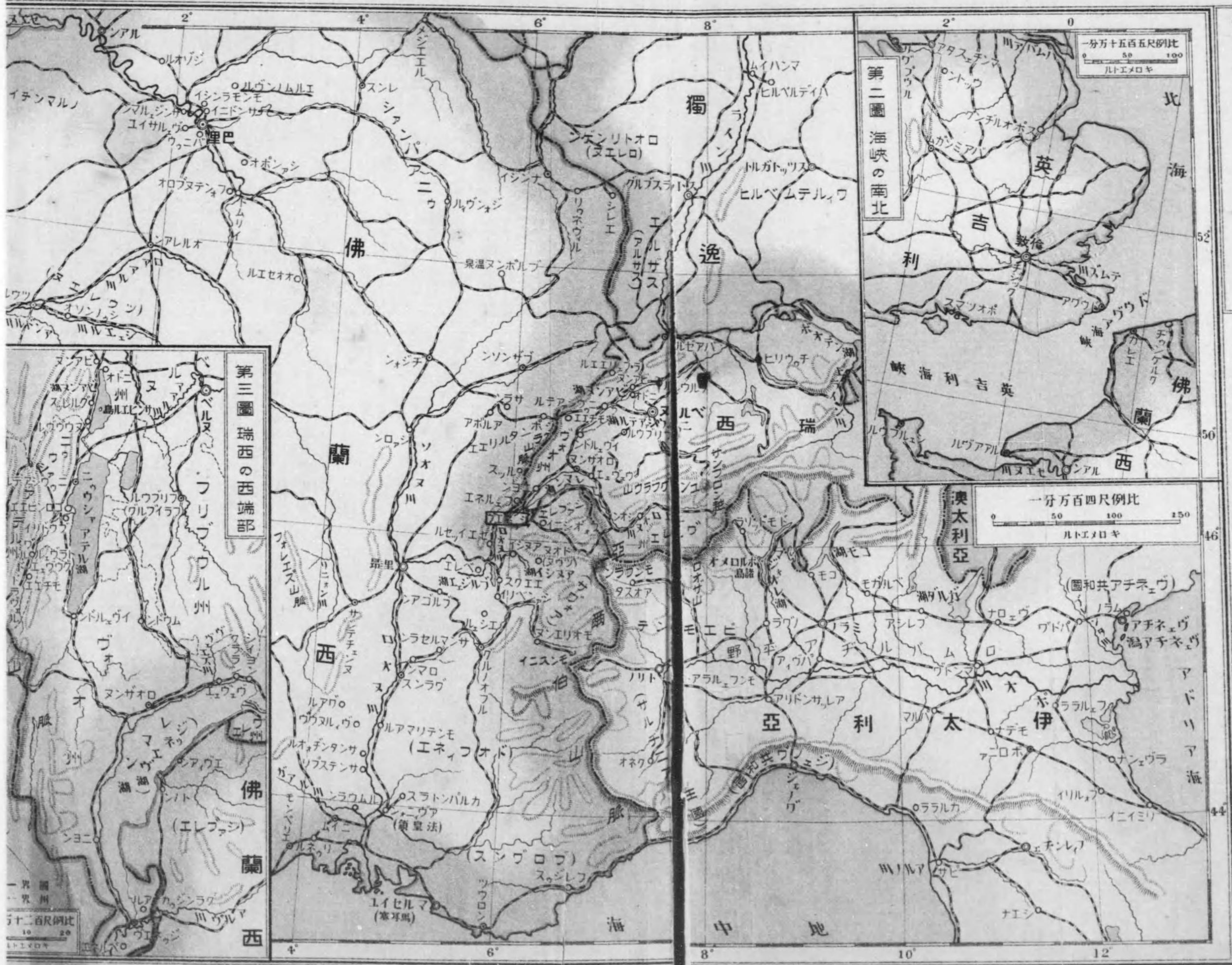
音楽をル・メエトルに學ぶ——ル・メエトルに隨ひて里昂に入る——ア
 ヌシイにて音楽を授く——二人の少女と會す……………一七三〇年 19
 瑞西佛蘭西等に漂泊す……………一七三一年 21
 シャンペリイなるワレンス夫人に復歸す——ワレンス夫人の愛人とな
 る——測量技手となる——音楽教師に復す……………一七三二年 21
 健康を回復せむとてレ・シャルメットに移り住む……………一七三六年 25
 醫治を求めむとてモンペリエに行く……………一七三七年 26
 ワレンス夫人に復歸す……………一七三八年 27
 里昂にてマブリイの家庭教師となる……………一七四〇年 24
 シャンペリイに歸る——ワレンス夫人と訣別す——新案の樂譜記法案
 を携へて巴里に出づ……………一七四一年 30
 巴里アカデミーにて記譜法を發表す——收税請負人ヂッパンに知らる
 ………………一七四二年 31
 大使モンテエグの書記官となりヴェネチアに赴任す……………一七四三年 32

巴里に歸る——後に妻となりシテレエズと相知る——歌劇「粹詩神」を
 演ず——父歿す——フランキウの助手となる——グリム、チドロオ
 等と交る……………一七四五年 34
 グンサンヌの獄舎にデドロオを問ふ——助手を罷む——樂譜醫寫を
 業とす……………一七四九年 38
 デジョンアカデミーの懸賞論文に當選す……………一七五〇年 39
 ジョネエツに旅行す——加爾維教に復宗す——市民權を獲得す……………一七五四年 43
 ………………一七五四年 43
 モンモランシイに接したる仙居にてエビネエ夫人の好意に浴す——
 ウドトオ夫人に戀慕す……………一七五六年 45
 仙居を去る——エビネエ夫人、グリム、及びデドロオと隙を構ふ……………一七五七年 46
 ………………一七五七年 46
 モンモランシイなるリクサンブウル公爵の別荘に入る……………一七五九年 48
 議會の逮捕狀を發するに遇ふ——モンモランシイを出づ——瑞西に

遁る——「エミール」ジッネエツに焚かる——ペルヌを逐はる——普魯士
 領ニウシアアテルのモチエエに隠る——キイス卿と親む：一七六二年
 ジッネエツの市民権を抛棄す……………：一七六三年
 モチエエを逐はれてサンビエエル島中に潛む——島を出でてストラ
 スブルグに走る——巴里に向ふ——デイザッド・ヒウムに伴はれて英
 吉利に渡る……………：一七六五年
 スタッフオドシアアのウットンにてダヴェンボオトに寄る——精神異常の
 徴候見ゆ……………：一七六六年
 英吉利を遣つ——改名してコンチ公のトリイの別荘に住む……………：
 ………………：一七六七年
 佛蘭西國內に流寓す——ブルゴアンに宿す……………：一七六八年
 モンカンに止る……………：一七六九年
 巴里に定著す……………：一七七〇年
 グルックと相會す……………：一七七四年

ジラルダン侯爵の保護の下にエルムノンヴァルに移る……一七七八年
 エルムノンヴァルに歿す……………：一七七八年七月二日

64

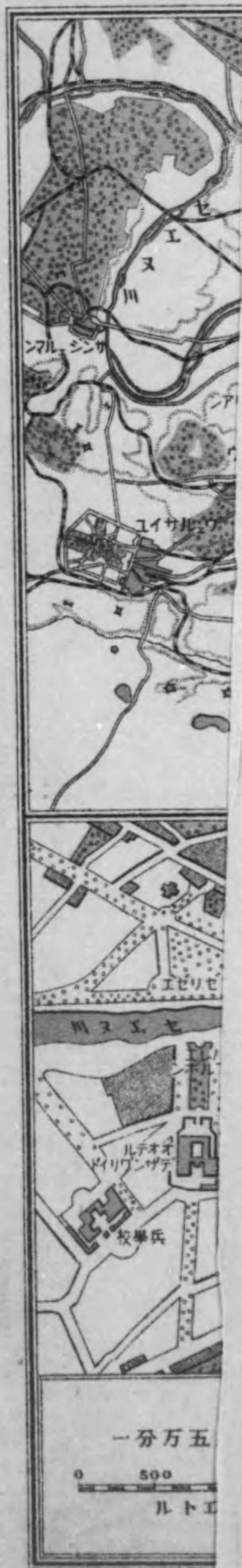


第一圖 ルッソ才放浪の舞臺

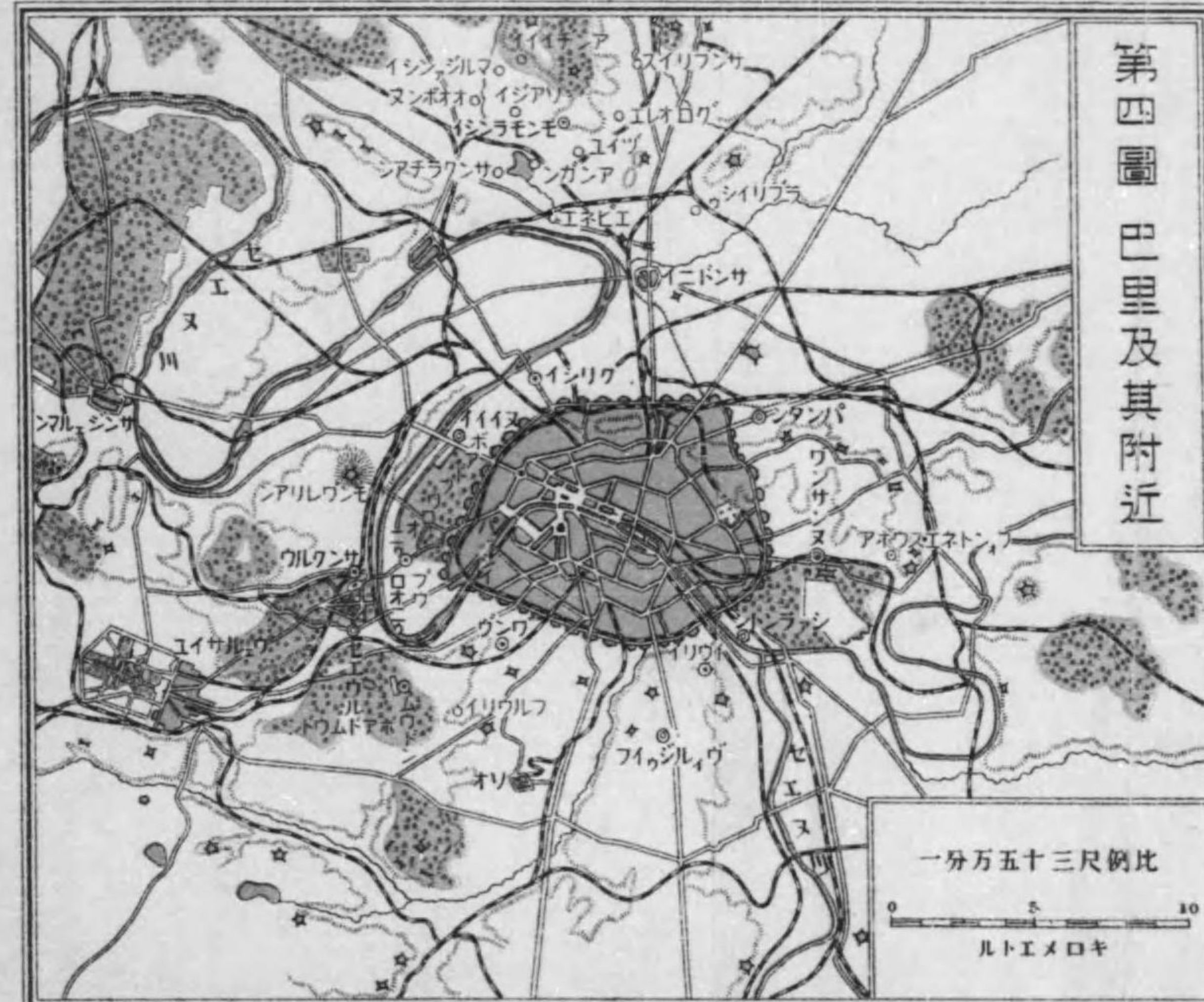
の境域は現時
の制に従ふ

當時の境域に就きては
本文中の譯者注参照

譯者製圖



第四圖 巴里及其附近



第五圖 第十八世紀の巴里



懺
悔
錄

1712(1)-1719(8)

一七一—二一—一七一九。

私は一種の試みを思ひ立つた。これは先例のないことでもあり、又その摹似まにをして見ようといふ者もあるまいと思ふ。私はわが同胞に見せたいものがある。自然の眞まことをその儘ままの人間一人——がすなはちそれで、しかもその人間は私自身わたしである。



第一卷

第一卷

自分だけだと思ふが、私は自分の心が解る。そして人間といふものを研究して見た。私の知つてゐる人達と私とは、まるで物が違ふ。多分世の人のすべてと私とが別な物なのであらうといふ氣持もする。私の方が物が良いとは言ひ得られないにしても、少くも一人だけ異色があるとは言へる。私を造つた鑄型を自然がうち破つたのが、果して賢い爲方であつたか、奈何かといふことは、この本を読み終つてからでないに分らぬ。

最後の審判の鐘の鳴りはたたく時、私はこの本を手にして大審判者の前に進み出て、聲高に慫慂述べて立てる。——私のした事考へたこと、また私の身に在つたことは皆こゝにあります。よいこともよくないことも、孰らもみな眞率な心から言ひました。少しの悪も切り棄てず、少しの善も附け足しはしませんでした。たまたま何か無關係な文飾を用ひなければならぬやうな事があつたら、それは單に記憶の缺損に基く隙間を塞げるために過ぎません。眞たるべきものをこそ眞とは認めましたが、然うてないものを眞とすることは斷じてありませんでした。私は自分をありの儘にあらはしました。蔑むべく、卑むべきものであつたら、そのとほり

に書き、善良で寛容で崇高なものであつたら、尙且そのとほりに書きました。永劫の神よ。汝の親ら觀らるゝそのとほりに、私は自分の内秘を暴露しました。願はくは私の周圍にわが同胞の無数の羣を集めて、私の懺悔を聴き取らしめ給はむことを。彼等をして私の汚辱について悲哀の叫びを揚げしめ給へ。私の窮苦について彼等の顔を赧らめしめ給へ。願はくは彼等の心のくが、汝の帝座の下に、皆同様の誠實さをもつて、一人々々に銘々の心を露さしめ給へ。然うした後には誰一人でも、自分はその男よりは遙かに立派なものだつたといふことを言ひ得る者のあるか否かを試し見給はむことを。

一七一二年、私はジュネエヴ Genève で市民イザック・ルッソオ Isaac Rousseau とおなじくシウザンヌ・ベルナル Susanne Bernard との間に生れた譯者云。巴里 Paris の一書店の子にデヂエエル・ルッソオ Didier Rousseau といふ者があつて、第十六世紀の初からジュネエヴに移住した。ルッソオの家の系圖はそれから後が明かに辿られる。

1712(1)-1719(8)

デヂエエの次にはジャン・ジャンとダヴィッド・Davidと二代續いて、イザック(一六八〇—一七四五)即ちルッソの父に至つた。ジャン・ネエツは今は瑞西の聯邦の内にあるが當時は聯邦の外に立つて一個の自治體を組織した。そして實權は附近一帶の地方を領有するサヴォア(Savoie)に在つたと言つてよい。元來瑞西はハプスブルグ・Habsburg家の所領であつたが、その虐政に苦められてから次第に獨立自由の民たる特色を發揮し來り、謂はゆる三州同盟の反抗から、始まつて、遂に一六四八年のウエストファリア・Westphalia條約で、十三州の聯邦が成り立つた。だからルッソ在世の間の瑞西の中には、ジャン・ネエツは加はらない。此の十三州に更に他の九州が一八一五年までの間に加盟して、それだ始めて今日在る如き二十二州の聯邦國が完成したのである。前の十三州中で本書の中に名の出るのは、チューリヒ・Zürich、ベルン・Bern、フリブウール・Fribourg、ソルウル・Soleureの諸州。後の九州の中では、ヴァンド・Vaud、ジネネ・Généve、ヴァリス・Valais、ニウシャテル・Neuchâtelの諸州である。繰り返して置くが、後の諸州が瑞西といふ聯邦組織に加入したのは、ルッソの死後二三十年目のことであつた。何分にも貧しい資産を、しかも十五人の子供に分

1712(1)-1719(8)

配したのであるから、父の所得分と言つたら、有るか無いか減じられて、一家の口を濡して行くには、唯手に覺えた時計職に手寄るより外途がなかつた。でも父の時計細工はそれは巧いものであつた。母はベルナルといふ宣教師の女で、家は富裕であつた。それに慧敏な美貌の人でもあつた。父が此の女を手に入れたに就いては、随分と苦んだ歴史がある。二人の戀は殆んど彼等の生涯と俱に始まつた。既う八九歳の頃から、二人は手を引き合つて、タムをラ・トレンイエ・La Trolleの瀟の漫歩きに送つた。十歳の時分には早や離れられぬ仲になつて了つた。日毎の馴睦びから形づくられた感情は、同感の力て結び附けられた。性來柔しきと敏感を持つた彼等は、互ひに對手の心の中に、自分と同じ性質を見出し得る時期を待ち構へた。寧ろこの時期が彼等を待つたと言つてよい。そして打ち開いた對手の心の中へ、一方の心を緊乎と嵌め込んだ。反逆的な運命は、唯彼等の情を喰らばかりてあつた。若き戀人は、その戀ひ妻を獲ることが出來ない爲に、憂愁に身の肉を剝がれて行つた。彼女は勸めて氣晴らしの旅をさせた。その旅行は無効に終つた。そして以前よりも尙堪へぬ戀しさに歸つて來た。彼は再び憐んだもの、信

愛した者を見出した。この試練の後は、彼は全き生を愛のために獻げ盡した。彼等はそれを誓つた。すると天はその宣誓に福を賜うた。

母の兄弟のガブリエル・ベルナル Gabriel Bernard は、父の姉妹の一人と戀に陥ちた。が女の方は、自分の兄弟も那の姉妹と一緒に出来ない事なら否だと言つて刎ね附けた。戀はすべてに解決を與へた。で二組の結婚が同じ日に成り立つた。慙うして私の小父は私の小母の夫であり、その子供は二重に私の甥姪でもあつた。一年の終りには雙方に一人の子供が生れた。でもその後夫婦はなほ餘儀なく別居しなければならなかつた。

小父のベルナルは技師をした。ウウジエヌ Eugene 公に隨つて帝國と何牙利亞へ勤務に行つた。彼はベルグラアド Belgrade の役に名を揚げた。父は私に取つて唯一人の兄が生きたと直君士坦丁堡から召されて、宮廷の御時計師になつた。その留守中、母の艶な姿と、その氣質才能にすくなからぬ男が迷はされた(譯者云。母の父、ベルナルは宣教師であつたから、女は境遇に不相應な程教育を受けた。繪畫、音樂、文藝に一通りは心得もあり、即興詩なども口吟んだ。佛蘭西から來

任したラクロジウール La Closerie 公使などは最も激しい熱情を獻げた人で、その後三十年も経つてこの人が母の事を話すのを聞いたが、さも感涙に禁えぬと言つた風を見せたのから考へても、尋常な溺り方てなかつた事が窺はれる。母はそれを拒むには、十二分の貞操を持つた。彼女は夫を愛するにやさしかつた。夫に歸國の事を迫つて行つた。夫は一切を投げ棄てて歸つて來た。私の身は此の歸國から得た可傷しい果實であつた。十月の後に虚弱な病身な私といふものが生れた。私は母の生を犠牲にして退けた。そして私が生れ落ちたといふその事自身が後の不幸の第一歩であつた譯者云。母がベルナル夫人を訪ねて行つたその先でルッソを生み落した。そして産後てすぐ死んだのである。

この損失に奈何して父が堪へることが出來たか、それは知らないが、決してこれに就いて慰安されなかつたことは明かである。彼女を父から奪つた者は私だといふことは忘れられないにもかかはらず、私の顔を眺めるのは彼女を眺めるやうなものであるといふ事を思つたらしい。私があやされる度ごとに彼の嘆息にも、また癡癡的な抱擁にも、必と苦い哀惜の情が混じてゐることを感じないことはな

かつた。でもその爲に愛はますます濃くなるばかりであつた。父が「ジャン・ジャック・Jean-Jacques! お母さんの話をしようぢやないか。」

斯ういふと私は、

「えい。二人でもつて泣きませう。」

唯これだけの言葉で父はもう涙を絞つた。

「あゝもう一度甦つて欲しいなあ。俺を慰めてくれるよ。何だか大事な物を持つて行かれたやうで寂しくて爲様がない。お前が若し俺一人の子だつたら這處に可愛がることはあるまいに。」

慙う聲を露ませた。配偶者を失ってから四十年の後に、父は第二の妻の腕に擁がれて死んだが、その折さへ唇には先妻の名を呼び続け、胸の奥には彼女の幻影を浮べつゝ息を引き取つた。

思ういふ人達が私の生の設計者であつた。天が彼等に授けたすべての贈り物

のうちで唯一つ敏感な情性——それだけが彼等から私に傳はつて來た。しかし其の物は彼等の幸運の資にはなつたけれど、私の生を幸薄きものにしてつた。私の生れた時は殆んど半死人のやうで、逆も助からない者に思はれてゐた。生れるとすぐ尿閉といふ病の萌しがあつて、年と共に嵩じて行つたが、今では時々緩和される事があつても其の時はまた別な、尙一層劇しい疾患に苦んでゐる時である。父の姉妹の一人に、愛嬌があつて氣の利いた未婚の人があつた譯者云。名をゴンヌリウツ Gonnet 夫人と言つた。私はこの人の厚い介抱で人間になられたのだ。私が此の文章を書いてゐる時には彼女は尙だ生きてゐる。齡は八十いくつかになるのであらう。自分より年下のしかも酒喰ひの亭主の世話をしてゐる。親愛なる小母よ。私を此の世の人にして下さつた事に就いては何も言ひますまい。が私の生の初に貴女から受けた厚い世話の返報を、貴女の生の終に臨んで爲てあげられないといふ事を、此の上なく心外に思ひます。この小母の外にもう一人ジャンクリエヌ Jaqueline と云ふものがある。これも尙丈夫に生き存へてゐる。誕生の時に眼を開けてくれた其の人達の手は、臨終の時にまた眼を閉ぢて呉れる

のであらう。

私は物を考へる前にまづこれを感じる。これは人間の通性であらう。が私は他よりも一倍強くこれを實驗した。五つ六つの頃までは何をしてゐたか知らない。奈何して讀書を覺えたのか。唯記憶に残つてゐるのは、最初の讀書とその影響とである。それ以後の事なら、自分で時日が繋ぎ合される程、判然とした意識を持つてゐる。母は若干の小説を残して行つた。父と私は夕飯の後に必とそれを讀む習はしになつた。初はたゞ面白い本でも讀めば、幾らか讀書力が練れるだらうぐらゐにしか考へてゐなかつたのが、應て興味が強くなり、湧いて來て、それからそれと替りばんこに讀み續けて、そればかりで毎夜を過ぐす程になつた。私達は一冊の本が終に來るまで決して讀み止すといふことが出來なかつた。時とする、父は曉方に燕を聞いて極り惡さうに、

「さあもう寢よう。お父さんはお前よりはよつ程赤ん坊だな。」
といふやうなことを言つた。

這麼亂暴な方法で幾らも經たぬ中に、私は讀み方、聽き方などが大層巧くなつた。

1719(8)-1723(12)

そればかりでなく、齡には相應はぬ精緻な感情を學ぶことが出來た。事々物々の知識は些とも無いのに、あらゆる感情のみは既に發達してゐた。何物も理解し得ないのに、すべてを直感した。然う言つた複雑な情緒を速りに經驗して行つたが、その爲に後日の理智は決して晦されるやうな事はなかつた。けれどもその情緒は一種特有な性質に變じて、奇矯な浪漫的な思想を帯びた人生を私に吹き込んだ。經驗や反省で此の風を改めようとしたが、效はなかつた。

一七一九—一七二三。——小説類は一七一九年の夏で終つた。次の冬は別な物を讀んだ。母の書架も大方獵り悉したので、手元にあつた母の父の書物に手寄つた。幸ひにも善い本が大分あつた。それは外では容易に得られぬやうなものであつた。その書庫は宣教師で、しかも當時の風として博識の人、趣味の人、精神の人なる祖父の手で、蒐められたものであつたからだ。ル・シ・ウウル Le Sieur の「教會と帝國の歴史 Histoire de l'Église et de l'Empire」
M. H. Bossuet の「世界史論 Discours sur l'His-

1719(8)-1723(12)

toire universelle, プルウタルコス Ploutarchos の英雄傳 Les Hommes illustres, ナニ Nani の「メ
ネチア史 Histoire de Venise, オウイヂウス Ovidius の「メタモルフォセス Metamorpho-
ses, ラブリイイニエル La Bruyère の諸著, フォントネル Fontenelle の「モンニヤ Les Mondes,
と「死者の對話 Dialogues des morts, モリエール Molière の若干部が父の室に移された。
毎日父が爲事の間に私はそれらを讀み聽かせた。それが私の齡には似合はず、面
白くてならなかつた。中にもプルウタルコスは殊に翫讀したもので、それから得
た興味のために、小説の嗜好が少し減じた。て程なくオロンダアト Orondate やア
ルタメエヌ Artamène や、ジュバより、アゲシラオス Agésilaos, プルッス Brutus, アリ
ステイデス Aristides などを擇ぶやうになつた。この楽しい讀書と父との對話と
は、到頭羈轡と從屬とに我慢の出來ぬこの自由な共和的な精神、不可屈な驕慢な性
格を形づくつて了つた。そして私は始終この精神この性格を發揮するに不適當
な境遇にばかり居て、生涯を悶蹙して過した。羅馬や雅典のことにのみ氣を取ら
れて、そらの偉人たちと俱に生き、自身は共和國の公民と生れ、祖國の愛を最強の情
とする父の子となつた私は、それらを見做つて心が燃えた。私自身は希臘人か羅

1719(8)-1723(12)

馬人であるかのやうに思ひ做された。自分の讀む史傳中の人物その者であるか
のやうな氣がした。感激に富んだ或る不撓な勇敢な事蹟を誦するときは、私
の眼は耀いて聲は張つた。或る日スケウオラ Scævola の冒險譚を述べた時のこと
に、其の豪傑の身振をすると言つて、爐の上へ自分の片手を差し伸べたなどは、大き
に他を驚かせた譯者云。スケウオラは羅馬の一英雄。エトルリア Etruria のクル
シウム Cusium 王ラルス・ポルセナ Lars Porcena が、紀元前五〇九年に羅馬を攻めた時、
彼は匕首を藏して、密かに敵陣に忍び入り、ポルセナを刺さうとして誤つてその從
者を殺した。彼は其の場て縛されて王の面前で拷問を受けた。其の時スケウオ
ラは、祭壇上に燃え熾つてゐる神火の中へ右手を突き入れたために、王は不屈の氣
象を愛でて、事なく彼を宥した。

私に一人の兄があつた。齡は七つ上であつた。彼は父の職を學んだ。私が皆
から大變に可愛がられたために、兄はなほざりにされた。これは決して正當な事
でない。兄の教育はこの放慢の影響を受けた。未だ眞の放蕩者たる齡に達せぬ
前から、既に彼は放逸の道を行つた。彼は別の師匠の處に預けられたが、其處をも

丁度父の家から逃げたやうに飛び出した。私は滅多に兄と顔を合したことがないから、殆んど兄を知らぬと言つても差支ない。だが私は彼を大切にすることは忘れなかつた。彼もまた其の放逸な心にも出来るだけは私を愛した。或る時父が腹を立つて、酷く兄を折檻したことがあつた。私はあわてて二人の間へ割つて這入つて、緊り父に縋り附いた。慙うして身をもつて兄を掩つたので、兄が受ける筈の毆打を私が引き受けた。でも私が静と此の位置を崩さずにあつたために、私の叫びと涙とで武器を失つたのか、それとも兄よりも私を虐めてはならぬと思つたか、父も遂に我を折つて彼を宥すことにした。終に兄はひどく自暴を起して何處へか亡げて姿を隠した。その後獨逸の方に居るとか聞いたが、唯の一度手紙も寄越さなかつた。それからの消息は全く分らぬ。私が獨息子の子やうになつてゐたのは、這麼譯からであつた。

この憐むべき少年は疎略に取扱はれたが、弟たる私は然うてなかつた。幼時の周囲の人達は偶像も及ばぬ熱心を傾けて、帝王の子も知らないやうな愛を私に著せた。それほど皆から大事がられた。皆は私を可憐な者に取扱つたが、些とも氣

隨者にはしなかつた。そこに世の普通でない點があつた。て私が親の家を離れる時まで、一度として往來へ出て餘所の子供と一緒に飛び廻るといふことを許されなかつた。夢幻的な氣質、それを制止する者もなかつたが、またそれを満足させてもくれなかつた。慙ういふ夢幻的な氣質を天稟に歸する者もあるが、實は教育の結果である。私にも年齢相應の過ちは澤山あつた。饒舌家で鑿發して時々は虚言者でもあつた。果物や、ボンボンや、臺所の物などを竊んだ。しかし他人に迷惑を掛けたり、損害を加へたり、罪無い動物を虐めたりして快を貪らうとはしなかつた。唯一度クロオコといふ隣の家の内儀が、説教を聴きに行つた留守中に、この鍋の中へ小便をし込んで置いた事があつたのを覚えてゐる。熱く考へて見れば人の良い媼さんだが、それでも那麽話しやはなかつたから、今でも憶ひ出して可笑しくなる。以上は幼時の悪戯に關した簡單ながら眞實の話である。

眼の前に見える物は優しみの模範ばかり、周囲に繞る者は世に稀な善い人達ばかり、然う言つた中に居る私が、奈何して悪性者になられよう。父、小母、乳母、親戚、友達、近所の人々、私を取り巻いてゐる人達は決して私の言ひなりにはならなかつた

1719(8)-1723(12)

けれど、いづれも深切であつた。私も同様に彼等を愛した。私は誰からも欲望を唆られたことがない。またそれを拒まれたこともない。それゆゑ自分には欲望といふものがあるかないかも氣附かずゐた。或る主人に事へる迄は、物を擇り好みする事を知らなかつた。父に従つて讀み且書き、ジャクタイヌに伴れられて散歩に出る時の外は、始終小母と一緒にゐて、その傍で立つたり居たり、縁飾するのを見せてもらつたり、歌を唄つて聽かせてもらふだけで満足した。小母の快活、その溫柔その心持よい姿は甚だ強い感銘を残した。その風采や眼ざしや態度まで、其の儘眼にちらつく。私はその情愛の籠つた穩かな忠言を忘れない。甚だ著物を著て、甚だ髪飾をしてゐたかといふことも私には言へる。あの黒い髪が當時の流行を趁うて兩方の顛顛の上に、二つの巻髪となつて垂れさがつてゐたのなども忘れられぬ。

進歩は遅かつたが、音樂に對する興味——といふよりは寧ろ欲は、彼女から得來つたものだといふことが言へる。彼女は殺情歌や歌謠を驚くほど多く知つてゐた。其の聲はごく優しくして絲のやうであつた。この異常な女性の澄み切つた心

1719(8)-1723(12)

靈は、彼女と彼女を取り卷く人達の妄念と哀愁とを拭ひ去つた。彼女の唱歌が如何に私を魅したかといふことは、それらの歌曲の多くが記憶の中に踏み止まつて、彼女を失つた今日といへども、それを幼年以來表面は忘れてゐながら、老の進むに連れて抑へ難い一種の魅力をもつて憶ひ出される事さへあるのを見ても知れる。悲哀と窮苦に殘害されたこの老いくづれた偏屈者の私が、時をり皺唄れた顛へ聲で、其の頃の小唄を呻いて見れば、不意に子供を見るやうに聲を立てて泣き出す事さへあると言つたとて、容易に信ずることは出來ない。その小唄に一つ記えてゐるのがある。歌詞の後半は奈何憶ひ出さうとしても出て來ない。押韻だけはそれとも奈何か斯うか分つてゐる。次に掲げるのがその前半と、後半に就いて憶ひ浮べ得られるだけとてある。

Tircois, je n'ose

Écouter ton chalmesau

Sous l'ormeau :

Car on en cause

第一卷

Déjà dans notre hameau.

.....

..... un berger

..... s'engager

..... sans danger;

Et toujours l'épine est sous la rose.

譯者云。本文の填詞の缺けた所には、次の句が這入るべきのである。

Un coeur s'expose

A trop s'engager

Avec un berger.

假に全文を譯せば、

わたしは可厭ぢやナルシイさん、

小楡が下て

も前の笛を聴くことは。

ても村中でこの頃は、

とかくの噂をするものを。

羊飼ふ子と深間になれば、

際どい目にも遣ふ心。

薔薇の葉うらの刺可怕ら。

私は此の歌を取つて、何處に自分を顛はせるやうな魅力が潜んでゐるのかと考へて見た。しかし、それは到底説明の出来ぬ一種の氣まぐれからである。唯私は滂沱たる涙に遮られる事なしに、この曲を唱ひ終ることが出来ない。歌詞の缺けた部分を誰か今でも知る人はあるまいか。然ら考へて幾度私は巴里の方へ手紙を出さうと思つたか知れぬ。だけれど、この歌の回想から湧き出る感興も、若しそれが可憐しいわが小母のシッゾン Suson 譯者云。ゴンスリッ、ウ夫人の初の名の外の人達までが、尙且その頃唱つた歌だと知れたならば、恐らく半は消え失せることであらうと信じられる。

私がライフの門出の際に受けた感觸は、恁ういふことであつた。驕慢で柔軟を

兼ねた感情、怯懦と豪放とを併せた性格が、恚うして私に形づくられ且現れた。この感情、性格は、常に卑弱と勇烈との中間、薄志と敢爲との中間に、那箇著かずに漂つて、此の私をば根柢まですつかり矛盾な人間にして、了つた。それゆゑ禁慾と歡樂、放縱と謹慎、それが那箇も私とは離れてゐた。

1719(8)-1723(12)

この教育の徑路も端なく不意な出來事に阻められた。此事件の結果は私の生涯に影響するものであつた。父は佛蘭西派遣の陸軍大尉で、議員達を親類に持つたゴオチエ Gaugier という人と喧嘩をした。ゴオチエは卑劣な、破廉恥な人物で、自分の鼻から血が出たのを父が往來て劍を振り廻したのだと言つて、復讐の告訴をした。監獄へ護送されようとした父は、法律の規定どほり、原告も一緒に押送されることを固く主張したが、希望は達しなかつた。父は名譽も自由も踏み潰されさうな土地に忍んでゐるよりは、寧ろジッネエツを立ち退いて、本國から脱籍して半生を送つた方が優してあると考へた。

1719(8)-1723(12)

其の折私はジッネエツ要塞に勤務する小父のベルナルの後見の下に唯一人留つた。小父の姉嬢は亡つたが、私と同じ齡の男の子が一人あつた。私とその子とは一緒にポッセエ Bossay (譯者云。ジッネエツに程近い村の名)の宣教師で、ランベッシ Lambertier という人の宅へ塾生として預けられた。此處で羅旬語と、教育といふ名目だけは立派な、色々な下らぬ事まで教はつた。

片田舎の二年間で、私の羅馬病は幾らか癒つた。私は復た幼兒の狀態に戻つた。ジッネエツでは邪魔が少なかつたから、一圖に本が讀めた。そこに私の唯一の享樂があつた。ところがポッセエでは學科の方が苦しいので、反つてそれを緩める爲に遊戯を好むやうになつた。曠野は私に取つて無上の新し味を持つた。幾ら遊んで遊び抜いても疲れる事を知らぬ位であつた。この曠野から得た感味は、永久に失せまいと思はれた。それほどウイグッドな印象が來た。此處で送つた幸福なそれらの日の追懷は、その在舎の日、その清興さては私を道しるべした人をまて、何時も私に哀惜せしめる。ランベルシエは理解のすぐれた人で、私達への教育は抜け目なくしてゐて、それで極端に課業を強ひるやうな事はなかつた。教育法

1719(8)-1723(12)

の良かった證據は束縛さうな私ですら、刻苦した當時の事を想ひ出して見ても、些ども不快な氣も起らず、それ程博く物は教はらなかつたにしても、學ぶ事を太甚しい努力を費さずに收得して、しかも悉く腦裏に印することが出来たのでも解る。純朴な田園生活は、計り知らぬ財産を私に與へた。其は私の心の眼を引き開けて、友情を見せたことである。其の時までの私は、高潮した情操、しかも夢を見るやうな情操の外を知らなかつた。が今憚うして平和な状態で共同の生活を續けて行くといふことは、私を従弟のベルナルに結び附けた。少時の中に私は嘗て兄に對して抱いた打ち消すことの出来ないそれよりも、一層濃かな愛情を獻げた。彼は背の高い、ひどく瘦せて、ひどく華奢な、身體が虚弱なだけ精神まで弱々しげな少年であつた。宅では私の保護者の息子として偏愛されたのをも、那樣に鼻に掛ける風はなかつた。私達の課業と娯樂と趣味とは同じ方向へ行つた。兩方とも獨息子で、互ひに一人の友が欲しかつた。二人を引き離すことは、二人を落膽させるやうなものであつた。かと言つて、互ひに慕ひ合つてゐるといふことをうち明かす機もなかつた。それでゐて、その結び付きは強かつた。片時も別々

1719(8)-1723(12)

に居ることが出来なかつたのみでなく、何時かは離れて了はなければならぬ時があるといふことすら、想像になかつた。自由を奪はれる恐れさへなくば、随分と他の深切や同情に甘へたがる方の氣質を二人は持つてゐたから、何事につけても兩方の心はびつたり合つた。監督する人達の蔭で、彼が然らういふ人達の前では何かしら私より優越れた所を見せることがあつても、二人ぎりの時には私の方にも何か豪い所が現れた。それで平均が保れて行つた。勉強してゐて彼が迷つく場合には私が勵ましてやつた。私が問題をしてよふと、彼の分まで助けてやつた。娯樂の時には盛んな私の興味がいつも先棒になつて働いた。結局二人の性質は一致した。それを結び合せる友情は、眞率であつた。ジョネエツからボッセエへ、五年に跨けて絶えず密接してゐる間に、喧嘩もたび／＼始まつたが、それが爲に二人を引き離す必要もなく、喧嘩も四半時間と續いたこともなければ、一度として意執がましい事のあつた例もない。這麼注解は随分子供じみて聞えるかも知れぬが、それは兒童の間にあつた事にしては、恐らくごく稀らしい話ではあるまいか。

ホッセエでの生活の状態それは如何にも私に相應しいものであつた。これがもう少し續かうものなら、私の性格が全然固まるところであつた。温かな愛に満ちた平和な感情が其の基礎になつた。私ほどの人間で、私ぐらゐの天性虚榮心の度合の低い者は決してあるまい。奈何かすると急に驕慢な考に囚はれることはあつても、すぐ復たものとぐずぐずに歸つた。己に近づくとすべての人に愛された。——これが私の一番強い欲望であつた。私は溫柔しかつた。従弟も然うであり、監督の人達もその通りであつた。滿二年の間に私は狂暴な感情の連累にもならず、犠牲にもならず済んだ。すべての物は、自然から得た心の傾向に培うた。人々が私なり、私の爲る事を喜んでくれる程嬉しく思つたことはない。寺院で宗義問答をして、答に行き詰まるやうなことがあつても別に困りはしなかつたが、唯氣になるのは、ランベルシエ嬢がその爲に顔のおもてに不安と苦痛の色を見せることであつた。こればかりは心配に心配をした。人前で失敗をやる事も幸いには幸いけれど、それはまた是以上だ。何故なら、他が讃めてくれようといふこと、それは構はないが、羞恥といふことについては、激しい感動を受ける。——然ういふ私

の性質なので、ランベルシエ嬢に叱られるといふ豫想よりも、彼女に苦勞させはせぬかといふ懸念の方が一倍辛さを強めたからで。

彼女も兄のランベルシエ氏ほどの事はなかつたが、己むを得ない場合には随分嚴格といふことを忘れる人でなかつた。が、正當な理由でもなければ、滅多にそれを持ち出さなかつたから却つてそれが心苦しくて、その嚴格にも怨を抱いたことはなかつた。私の術なく思ふのは、罰を受けることでなくて、向うの人に不快を與へることであつた。不満足の色を眺める苦しさは、自分に體罰を受ける段の事ではなかつた。私自身を十分に説明することは困難であるが、併しそれを試みなければならぬ。若し人があつて、その用ふる教育方法が曖昧であつたり、或は不用意であつたりする爲に、豫期と異なつた結果を生むことにもつとよく氣が附いたなら、少年に對する方案も改まることであらう。世に有り勝ちな有害な例に、大教訓が藏れてゐる。それを私が話さぬ譯に行かない。

ランベルシエ嬢は母の情愛をもつて私達を眺めた。と、一方でまた母の權威を帯びて、私達に不都合の所爲があると兒童相當の罰も加へた。かなり長い間、彼女

1719(8)-1723(12)

はそれを威嚇しつけた。がこの懲らしめの威嚇は、私に取つては新しいものであつた。それが可怕かつた。しかしそれを受けた後は、豫期したよりも軽いものと知つて、彼女を怖れもしなかつた。「のみならず、不思議にもこの懲罰が、それを加へる人に對する懷愛しさの念を強めた。この懷愛しさの念が、ごく純なものとなかつたら、——それに天性の柔和が加はらなかつたら、罪を犯し、罰を蒙ることが止まないとところであつた。何爲なら、苦痛の間は固より、羞恥を感ずる間ですら、その同じ人の手でもう一度懲罰を受けるのが、可怕いよりも嬉しいやうな、一種の官能の慾が混じてゐるらしかつたからである。嬉しいといふ中には、疑ひもなく、女性に對する或る早熟な本能が動いてゐたのである。同じ罰でも彼女の兄から受けるときには嬉しくも何ともなかつたので、見てもそれは解る。しかし此の兄の氣質から見ると、この代理も、別段怖れる程のものでなかつた。若し私がこの處分に觸れないやうに自制したことがあるとすれば、それは偏へにランベルシエ嬢の不快を買ふことを恐れてであつた。思ふに感情の加はつた慈愛は、常に私の上に王國の如く廣がつたからである。心の規矩、それを私が持つやうになつたのも、全くその

1719(8)-1723(12)

の力に依つたのであつた。

私はこの事件を怖れるといふでもなく遠ざけた。それが起つたことについては私に過失はなかつた。無論意あつてもなかつた。そして良心の安全を失はずにそれから利益を取つた。がこの二回目は取りも直さず最後となつた。その譯はランベルシエ嬢がこの懲戒も目的を達しなかつたと知つて、もうそれを抛棄つたと言ひ切つた。非常に疲らされて了つた。斯うも言つた。その時まで私達は彼女の部屋に寝た。冬など彼女と一つベッドにさへ寝た。二日目からはもう別の部屋に寝させられた。有り難くもないに、是からはもう大供の扱ひを彼女から受けることになつた。

「三十歳になる女から八歳の時に受けたこの兒童の懲罰が、私の後半生の嗜好、欲望情緒、むしろ私の全體をば、——而も當然に期待せられるものとは全く別な意味で——限定するやうにならうといふことは、誰しも意外とすることであらう。いんな官能に點火されると同時に、私の欲望は經驗の範圍に居坐わつてゐて、無暗に外を齎るやうなことがなかつた。殆ど生れ落ちるから官能の欲に燃える血を

1719(8)-1723(12)

包んでゐながら、ごく冷かな鈍い氣質の發達する年頃まで、私はあらゆる汚穢から純潔に身を保つことが出来た。何と的もなしに、長いこと悶えた私は、狂人の眼で美しい女達を凝視した。空想の動くまゝに、間斷なくその人達を記憶にも浮べて見た。が、それは唯ランベルシエ嬢を幾人も心に描いて見たに過ぎなかつた。

年頃になつた後ですら、斯うした妙な偏向がいつまでも續いて墮落、狂愚に蔽んだ時といへども、潔白な態度は不思議に私に残つてゐた。純真な、モDESTな教育法、私の受けたのがまさしくそれであつた。三人の小母さんは、圖抜けて聰明な人達であつたばかりでなく、其の後の婦人達からは、忽ち見られた謹慎といふことを知つた。父は歡樂の人であつた。けれど舊風の嗜みから、最も愛する女の傍ても、處女が聞いて顔を赧くするやうな冗談は口に出さなかつた。私の家庭ほど、――私の前ほど子供の教育に深い注意の拂はれた處はなかつた。ランベルシエ氏の宅でも、此の問題については、尙且同様の注意が拂はれてゐることを見出した。正直一圖な或る下女が、私達の前に猥褻があつたことをちよつと言ひ知らせたばかりに、すぐ家を放逐されたことがあつた。私は青年期に入るまで異性の結合と

1719(8)-1723(12)

いふことについては、何等の明白な觀念を持たなかつた。のみならず、然うした曖昧な觀念は、私には可哀しい不愉快な像とばかり見えた。謂はゆる賣女といふものに向つて、一種拭ひ消すことの出来ない恐怖を感じた。私は輕蔑なしに、否、恐怖なしに、荒淫の人を眺める譯に行かなかつた。

恚ういふ教育上の偏見——然え易い氣質の最初の發作を運くさせるためには、正當なこの偏見は、前に言つた通り、官能欲の萌しかけた初に受けた牽掣の力でますます力強くなつた。感ずる物のみに空想を逞しくして、むずがゆいやうな血の沸騰するにもかゝはらず、私は自分の欲望を唯自分に知られただけの範圍に止めて置いた。厭惡の情を誘ひ出すやうな、何時の間にか邪道へ引き入れようとするやうな、那樣樂欲には手出しもしなかつた。愚かな幻想、愛の激情、突飛な振舞——それにはしばしば引き込まれたが、その時には唯空想的に異性の援助を借りた。そして自分の熱望したものより外に、それが役立つものといふことを夢にも思ひ寄らなかつた。

熱烈な、放縱な、ごく早熟な性情を抱きながらも、ランベルシエ嬢から無意識に致

1719(8)-1723(12)

はつた外、感覺の快樂といふものを求めもせず、氣附く事さへなしに青春期を經過したのは、然ういふ譯からであつた。唯そればかりでない年經つまゝに成人となつてからも、身の破滅を招いた筈のものが反つて私を保全したといふのもやはりそれからであつた。以前子供の時分の情癖は消え失せるどころか、感覺に激發された欲望から離れることが出来なかつた。それほど他の情癖と結び附いた。そしてこの愚かさは性來の臆病と合體して、婦人の傍では思ひ切つて物も言はず、爲ることも碌にえせぬといふやうなことが普通になつて、とても婦人から歡樂を求めるとは出来さうもなかつた。好きな女を眼の前に見ながら、沈黙を守つて過ぎた。思ひを打ち明かすことの出来ない私は、唯纒かにさういふ意味を包んだやうな報告だけで心遣りにした。或る嚴格な婦人の足元に身を伏して、その命を奉じたり、その許を乞うたりするのが一番快い樂みてあつた。激しい空想に血が燃え立てば燃え立つだけ、それだけ私は沈衰した戀人のやうな姿を見せた。言ふまでもなく斯う言つた戀の爲方は進度も遅々としてゐるかほりに對手にされた女たちの徳操に對しても危険は至つて少ない。だから私に汚行はごく稀であ

1719(8)-1723(12)

つたけれど、自分流儀で——言ひ換へれば、架空的に頭の中で歡樂を趁ふことだけは忘れなかつた。然う言つた理由で、臆病な氣質と傳奇的な精神とが一緒に私の感覺に結び附いて、それで、純潔な感情と清淨な志操とを全くさせた。さもなかつたらこの同じ性向は、必と幾らかの無恥を伴つて見るに忍びない野性に私を没せしめたに違ひない。

私は自分の懺悔の黑暗な、そして不潔な迷宮へと指して、まづ最も難儀な一歩を進めた。眞に告白する値あるものは、何も犯罪の類とばかりは限つてゐない。莫迦氣たこと、極りの悪い事、それにも告白の價打は確かにある。もう私の覺悟はいよゝ／＼固まつた。一旦言はうと決心した事は、何者も引き止めることが出来ない。私はしば／＼激情の奴隸になることがあつて、殊に自分の好きな女と遇つた時に著しく顯はれた。其の時は眼のはたらき、耳のはたらきは勿論、一切の感覺を失つて、全身には強い痙攣ばかりが残つた。然ういふことは幾度もあつたが、その時ですら、私はその親しい人の間で有體に打ち明けて哀を乞はうと決心することが出来なかつた。それ位であるから、この懺悔といふことの困難極まる譯はすぐ察し

られるかと思ふ。幼児期に然ういふことのあつたのは唯一度ぎり、同年輩の子供に關してであつた。それも尙且彼女が其の端を發いたのであつた。

感情的な私の生活の初の頃の事を考へて見ると、中には一見兩立しがたいやうな氣質が互ひに協力して、一樣な單素な結果を生じたものもある。また同じもの様に見えてゐながら境遇次第でその間に何の親縁もなかつたと思はれるやうな結合を作つたのもあつた。例へば、私の血管の中に放縱と柔弱の分子を注ぎ込んだその泉源と、最も活動的な氣力を養つたその泉源とが、同一のものであるといふことは、ちよつと信じがたいではないか。この話頭を轉ずる前に、その異なつた結果の著しい一例を話して見よう。

ある時私は唯一人、臺所の次の間で日課を勉強してゐた。と、下女がランベルン嬢の櫛を乾すのだと言つて、火の傍に置いて行つた。それを今度取りに来た時に、一枚の櫛の齒が折れて了つてゐるのに氣が附いた。その罪は誰に持つて行くべきであらう。私の外にはこの室に這入つた者はない。私は嫌疑を受けたから決して櫛には手を懸けないと答へた。主人も命嬢も一緒になつて私を説諭した。

1719(8)-1723(12)

1719(8)-1723(12)

迫りつ脅しつした。私は頑固に辯じ通した。斯う大膽な嘘を言ひ張るのは今までにないことだ。然うは思はれてゐながら確かに私の爲業と信じられてゐたので、奈何言ひ解いても對手には通じなかつた。事件は容易ならぬことと認められた。不正、虚言、執拗、いづれも課罰を値するものと極まつた。今度ばかりはランベルン嬢の手一つでは埒が明かぬ。私の小父のベルナルは、その爲に手紙で喚び寄せられた。哀むべき従弟もまた別に輕からぬ不都合を働いたといふ塵で、同じ罰の數に加へられた。可怖しい罰であつた譯者云。烈しい毆打を受けたことが別の書物に出てゐる。若し彼等が害惡その物から救治の道を見出して、永く私の邪欲を根絶しする氣であつたとすれば、是以上の方法はなかつたかも知れない。又私は長いこと、邪欲に累はされるやうなこともなかつた。

彼等が待ち望んだやうに、私に罪を自白させることが出来なかつた。いろんな脅し文句をならべて様々と私を窘めたけれども、私は氣を挫かなかつた。無實の罪に服すくらゐなら、死んでも遺憾はない。然う心に堅く誓つた。鬼の強情然ういふより外に、此の子供の一徹を形容する言葉はない。これに對しては暴力を用

ひる外なかつた。惨酷な拷問が済んだ迹の私はぎざ／＼に肉を引き裂かれたやうなものであつた。けれど勝利者には成れた。

この出来事があつてから今日までに彼は五十年は経つた。その折の罪でもう一度罰を受ける憂もない。「なに！私は神の御前で決して私とその櫛に手を觸れたの、それを碎いたのなどは愚かな事傍へ近寄りもしなかつたことを廣言する。それでは奈何してその様な損害が生じたか。それは訊いて貰ひたくない。實際私は何も知らないのだ。何爲といふことも理解出来ないのだ。唯私がそれについて全く無關係であつたことだけを知つてゐる。

不慮は至つて臆病で柔順であるのに、感情の方では熱烈な、傲岸な、不可屈な人物があると想像して見給へ。して、平生は正義の聲に導かれ、安和、公平の間に人と爲つて、少しも不義不當の觀念がなく、それであつて丁度自分の敬愛してゐた人達から生れて始めて非常に可怖しい責苦を受けた一人の子供があると想像し給へ。その子供の思想界に甚だ感亂が起るであらうか。奈何いふ感情の變調が来るであらうか。彼の胸に、彼の脳に、また彼の小さい知的、徳的、自我の裡に甚だ動搖が始ま

るであらうか。この間の消息は、無理にも一つ讀者諸君に探つてもらひたく思ふ。何爲なら、この事情は餘り複雑で、當時の私の心の中に起伏した微細な波瀾を逐一に分解して見ることは、とても私に出来ないからである。

其の時分には未だ眞箇に理性が發達してゐなかつた。他の眼に映じた事ぐらゐで奈何して罪を得なければならぬのか。それを思ひやることが出来なかつた。他人の位置に己を置き換へて見ることも出来なかつた。唯自己の位置に閉ぢ籠つて、無實の罪に對する懲罰の可怖しさを身に占めて感ずるばかりであつた。肉の苦惱は如何に劇烈であらうとそれに弱る私でない。たゞ／＼私は憎恨と絶望に、いと責めてつらさを覺えた。従弟もまた私と同じ工合で、知らずに犯した過失をば、故意でしたものゝやうに罰せられたので、私同様憤慨して、同じ心の状態に居た。私達二人は同じ寢床の中で、込み上げて来る口惜しさの亂れ心に、ひと抱き合つてしばらくは息も出なかつた。若い二つの胸は、鎮まりかゝつて来るまで互ひの忿怒を洩らすことが出来なかつた。二人は勃然床の上に起き直つて、幾度となく聲に力のかぎりを籠めて

斯う叫んだ譯者云。羅句語、肉刑の執行者の義。畜生！人殺し！などの意の感動詞に用ひる。

斯う書いて来てさへ脈搏の昂まりが感じられる。私が千萬年生き存へようと、此の時の事は永へに残つて行くであらう。此の暴行と不正義に對する私の最初の感情は、心魂の中に深く刻み附けられて、何かそれに關聯した事柄に出會すと、すぐその感情が喚び覺されるのであつた。そしてこの感情はもともと私一個人に關したものであつたのに、何時しかそれが自分の利害には縁の無い事にまで推し移つて行つた。非道な行爲とさへ言へば、それが甚廢工合に甚廢場合に起つたものといふ見境もなく、恰もその行爲の結果が直接自分の上に落ちて來るものであるかのやうに、胸がわく／＼と煮えた。昔の暴君の殘虐史を讀んだり、無慙な僧官の奸弊な罪惡史を讀んだりする度に、縦し我が命は幾つ失つても、義侠的にその現場へさらはれて、わが手にその醜類を刺し殺して、了ひたく思つた。鶏や牛や犬などが、外の弱い動物を苦めてゐるのを見ては、彼等が自らを強者と信じてゐ

るのが面憎くて、時々大汗になつてそれを追つ駆け廻したり、石塊を投附けてやつたりした。斯うした振舞は私の天性でもあらうとは思ふが、それにしては始めて受けた那の非道な處分の追憶が、深く長く又強く私の心に作用したためにも由ると見なければならぬ。

幼年の穩かな生活は、この時で終を告げる。この瞬間から後は、ごく純な幸福を樂むことがなくなつた。今日から回顧して見ても、幼時の樂しさの思ひ出は、此處まで來ると礫りと消えて了ふやうに思ふ。

幾月かの間は尙ボ、セエに滞留した。地上の樂園に於ける人類の始祖さういつた有様に私達は見えただけの、既うそれだけの享樂がない。それは表面同じ境遇にゐたけれど、事實その状態はがらりと變つて了つた。愛情も、尊信も、既うその保護者達に吾々を結び附けることが出來なかつた。最早彼等をば、曾ては自分等の胸の祕密を讀んだ聖なる者に思へなくなつた。私達は過ちをしても餘り恥ぢぬやうになつた。そのかはりに誹謗を忌むことは一倍強くなつた。物を匿すことや、意地張ることや、嘘吐くことも覺えた。この年輩に伴ふあらゆる惡徳は、仇氣

1719(8)-1723(12)

なさを傷け遊嬉の無邪氣に泥を著けた。村の景象までが前方胸に沁み入つたやうな、しとやかな純真な魅力を失つて荒れすさんだ幽暗なものとしか見えなかつた。恰も面帛でその美を掩ひ隠してゐるかの心地がした。自分等の受持の園を耕して草花などを栽ゑ育てることも罷めて了つた。地の上を掻き捜して私達の播いた種子から芽生の出たのを見附けては嬉しさの叫び聲を立てたこともあつたに、それも何時しか廢んだ。私達はこのやうな生活に興味を持たなくなつた。人々も私達を面白く思はなくなつた。小父は復た私達を郷里へ引き取つた。二人はランベルシエ氏と令嬢に別れを告げた。人々は最早互ひに飽き飽かれて、斯うして立つて行くことに少しも心を残す風がなかつた。

ボッセエを見棄ててから殆ど三十年は経つた。その間に當時の愉快な留學の日を何につけても思ひ出る機会がなかつた。しかし中年も過ぎ、おひく老境に傾いて來ると、その同じ追憶が他の追憶の消え失せると共に復び新らしくなつて

1719(8)-1723(12)

その折の行跡を記憶に彫り附ける。と、その美と力とは、日ごとに高まるばかりである。別の言葉で言ふと、最早程なく世を辭すべき自分と知りつゝ、もう一度生涯の發端から出直して見たいと望む者のやうである。當時の出来事は甚だに微細なものでも、唯それが單に那の時の出来事であつたといふ點だけで私を喜ばせる。私はその場所人物時間のすべての状態を思ひ出す。室で働く下女、窓から飛び込む燕、讀書に耽る私の手の甲に止る蠅、それから皆眼に見えるやう。その室の調度一切も然う。右手にランベルシエ氏の書齋、それに代々の法皇達の印畫、晴雨計、園の窪地に立つ家の窓からは、無暗に蔓つた薔薇が薄暗く蔽ひ冠さつた餘りの葉を窓の内まで匂ひ込ませてゐる。慙ういふ話が讀者に何の興味があらう。それは然うだらうが私は大いに話したい。この至幸な時代のいゝるんな逸話、それを憶ひ出すと今でもぞくぞくする程嬉しいのに、残らず話して了へないといふのは残念で堪らぬ。五つ六つでもよいから是非然うしたいと思ふのだが、……爲方がないから示談をするとして、——五つは見限つて一箇條だけ活すことにする。その代り樂みを永くするために、精一ぱい引き延して話させて貰はう。

諸君を面白がらせようと思へば、ランベルシエ嬢の末路に關する物語を擇ぶとよかつたかも知れぬ。嬢は不慮の過ちで牧場の下へ翻筋斗うつて轉げ落ちた。と丁度其處へサルヂニア Sardinia 王が通り掛つたので、まるで王の面前へ御覽に入れた形になつた。しかしそれよりも私に取つて面白いのは、築山の胡桃樹の話である。あの翻筋斗の場では、私は唯の看客になつただけの事だが、築山の場では其處へ私自身が俳優になつて出てゐたからである。そしてこの話は滑稽と言へば滑稽だが、これがために私に取つて實の母以上に大切な婦人を吃驚させたから、夢にも笑ひ事とは思へない。

築山の胡桃樹の大史譚を讀む好事家に、一片の注意がして置きたい。諸君はそれから愕くべき悲劇を學ぶであらうから、出來るならそれがために打ち顛へることのないやうに用心し給へ。

庭の開き戸を出ると左手に築山があつた。午すぎなどによく皆て此處へ來て寝ころんだりした。樹蔭の些ともない處であつた。蔭が欲しい。然う言つてランベルシエ氏は胡桃樹を一本植ゑさせることにした。嚴肅な樹裁式があつた。

1719(8)-1723(12)

二人の舎生はその際の教父に立つた。皆が土を冠せてゐる間、私達は祝の歌を唱ひながらちつと片手に樹を支へ持つた。根の周圍には水を灌る盆地が掘られた。毎日二人が熱心に灌水を眺めてゐる中につく／＼思つた。——山の上に樹を植ゑ附けるのは、城頭に軍旗を樹てるよりもつと立派な爲事だ。この名譽を誰にも分配せず、二人限りで握る手段はあるまいか。

て私達は嫩い柳の壓條を切つて來た。同じ山の上で、かの尊大な胡桃樹の植わつてゐる處から、八九尺も距たつた處にそれを挿した。その周圍にはまた盆地を拵へることを忘れなかつた。困つた問題は奈何して此處へ水を引いて來るかといふことであつた。水の手は餘程遠い。其處まで行つて取つて來ることは禁められた。しかし柳には水がなくてならぬ。二三日はとも斯くもして水を灌ることは出來た。その所爲でよい鹽梅に發芽もする、いくらかの嫩葉も出た。私達は時間毎に行つて長を測つて見た。まだ深く根は這入らないが聽て蔭は繁るであらう。斯う思つて勇み上つた。

この事に掛かりさりになつて了つて、外の爲事も勉強も那裏除けてあつた。斯

1719(8)-1723(12)

1719(S)-1723(12)

うして夢中になつてゐる譯は誰にも解らないから、私達は前よりも傍近く引き寄せられた。と、柳の水が丁度断れて、二人ははつとなつた。もうこの上は折角の樹も枯れて了ふばかりだ。斯う思ひつゝ見殺しにする外はなかつた。「必要は勞作の母である。斯うなると必要は私達に一つの創意を授けた。それは樹の生命を取り留めて私達を魅らせるやうなものであつた。胡桃樹の方へ漙つた水の幾分を、柳の根方まで窃然引いて來るために、地下に溝を造る、然ういふ企てであつた。熱心に取り掛つたがなか／＼思つたやうに行かなかつた。地面の傾斜の工合で水がうまく流れ出さない。土が崩れて溝を塞いだ。溝の口は芥や泥で一ぱいになつた。散々である。でも私たちは落膽しない。「執拗な勞作は一切に打ち勝つ Labor omnia vincit improbus (譯者云。ウエルギリウス Vergilius の詩の句から轉じて俗諺になつてゐる)」。奈何しても水の流れ出るやうにと、ます／＼地面と自分達の方の盆地を掘り下げた。箱の板を壊して細く切り裂いて、その中の幾枚かは順次に平らに列べ、その上へ兩側からまた細板を寄せ掛けると、丁度小溝に三角形の水管が出来た。細い木の枝を何本も溝の口に挿し込むと格子か穿孔板のやうなものが

1719(S)-1723(12)

出来て、水路を杜がぬやうに泥や石を堰き止めた。水道の上には舊のやうに土と土を掩つ冠せて置いた。一切が出来上つて了つた日には、樂みやら心配やらで灌水の時間をびく／＼して待ち受けた。待つ間の久しさは幾世紀の思ひであつた。ランベルシエ氏も例のとほり手傳ひに來た。この間二人は彼の背後にゐて、自分達の樹を立ち圍つてゐたから、甘々と彼の眼に觸れるのが助かつた。

第一の手桶から胡桃樹に水を灌けたと見る間もなく、その水がちよろ／＼と自分達の盆地の方へ流れて來るのが見えた。それが眼に這入るともう警戒の心は弛んで了つた。歡喜の叫び聲がどつと揚つた。ランベルシエ氏は願つた。それが最後であつた。彼は胡桃樹を植ゑた地質が甚麼で、水が奈何吸收されるかを見るのを樂みにしてゐた。ところが向うにも盆地が一つ出来てゐて、その方へ水が半分奪られて行くと見るや、今度は彼が叫び立つた。熱く調べて見ると例の惡作劇が見附かつた。すぐ鶴嘴を持って來させて一撃與れたと思ふと、水管の用材が二つ三つばら／＼と飛んだ。

「水道だ！ 水道だ！」

彼は一生懸命に慟う嗚鳴つて此處と思ふ處を片端から用捨なく掘り返した。その度毎に私達の胸はぎくりぎくりし通してあつた。瞬く間に細板から溝から盆地から柳も何も滅茶苦茶に壊され潰された。この虐げの間にも私達には一言も物を言はなかつた。

「水道だ！ 水道だ！ 水道だ！」

唯これだけは絶えず彼の口を洩れた言葉の端であつた。

稚い技師等はその上にも酷い目に遭はされたであらうか。然ら思ふ人があつたらそれは誤つてゐる。この事はそれだけで済んだ。ランベルシエ氏は一言の譴責も加へなかつた。可厭な顔も見せなかつた。もうその事は暖にも出さなかつた。しばらくすると妹の傍で遠くまで聞える程の高笑ひさへした。それよりも驚くのは始め一時は悲哀に堪へられなかつた私達が何時の間にかけろりとした顔をした事である。私達はやがてまた別の樹を一本植ゑた。最初の時の事が幾度も思ひ出されて「水道だ！ 水道だ！」と嗚鳴つた彼の口眞似を妙に力を入れて互ひに繰り返した。時偶私はアリスチイデスやブルツスなどを氣取つて

て見る事が今までもないではなかつたが虚榮心の盛んに息をし出したのはこの折であつた。自分達の手で水道が造られたといふこと、大木の向うを張つて一本の壓條を挿したといふこと其處に自分の最高の名譽があつた。十歳の私は三十歳のケエザル Casati よりも豪い。那樣者が動いてゐた。

胡桃樹の事件それに伴うた歴史それから来た強い印象は時々憶ひ返された。一七五四年にジョネエツへ行つた時にも、ボッセエを訪ねて幼時の遊び場所を見舞ひ、ことに一世紀の三分の一も年を経た那の親愛な胡桃樹と再會することを最も楽しい目的の一つにしてゐた。けれど私には絶えず邪魔が伴ひ纏つて、滅多に自分の身體になる折がなかつたので、つひその機会が見出されなかつた。然らういふ機会がもう一度來るとは奈何しても望めない。それにも拘らず、尙私はそれを捉へたい希望を繋いでゐる。萬一にも私が何時かその懐愛しい土地に歸ることが出來て、親愛な胡桃樹が依然永存してゐるのを見出したなら、その時は私の涙でしつかり灌水してやりたさ。

1719(8)-1723(12)

ジッネエツへ歸つて二三年間は伯父の家で世話になつた。その間に身の振り方を極めることになつた。伯父は息子に技師に爲し上げる積りて、圖案とエックリイデスToukidesの幾何を仕込んだ。私も一緒に稽古した。なか／＼面白い。圖案が餘計面白い。しかし私をば時計師か、代證人か、宣教師かにしようといふ相談であつた。自分では宣教師になりたいと思つた。説教をして聞かせる那が何とも言へぬ愉快な事に思へたからであつた。が母の財産から這入つて來る些とばかりの收入を、兄弟二人で配けて了ふと、逆も私の修學の資金になりさうもなかつた。齡も齡とて強ひて自分の希望を貫かうといふ氣もなく、唯靜と小父の家で何の所在なしに、割合貴い宿料を拂つて、文句も言はずに日を送つた。

小父も父と同じい歡樂の人であつた。しかしいろいろの義務の爲めに自己を制へるといふ事を知らなかつたところは父と異つた。だから私達のことには殆ど構はない方であつた。小母はまた信神凝りて、私達の教育などに注意するよりは、詩篇でも唱つてゐようといふ女であつた。誰も私達に構つてゐる人はなかつ

1719(8)-1723(12)

たが、それでも餘り氣儘はしなかつた。皆は互ひに睦んで満足し合つた。この年頃相應の惡戯ばかりに耽るといふこともなく、ぶら／＼してゐるからと言つて放逸な癖にも染まらずに濟んだ。ぶら／＼してゐるといふのからして、恐らく正しい言ひ方であるまいと思ふ。いふ意は斯うした生活の中に、少しも疲れの色がなかつたからである。殊に幸ひといろ／＼の遊戯がいづれも室内でするものばかりで、街に出て遊びたいといふ念慮は露ほども浮ばなかつた。鳥籠、唐人笛、腰鼓、家鐵砲、弓、さう言つたやうなものを拵へた。祖父さんの摹似をして時計を拵へると言つては、いろんな道具を壊したりした。拙い繪を紙に塗りくつて、輪廓を取る陰影を附ける、着色する、さういふことをして繪具を費ひ散らすのなどが殊に面白かつた。丁度そのころジッネエツへ伊太利亞からガムバ・コルタ Gamba Cortis といふ香具師が來た。一遍觀に行つて來ると、二度行かうともしないで、すぐ彼の使つた傀儡に似せて自分達のそれを造つた。香具師がその傀儡で俄みたやうな事を演つたので、私達も俄の筋書を書いた。そして經驗もなしに咄嗟伊太利亞俄の假聲を使つて、チャームに富んだこの狂言を演じた。憫むべき一家の人達は、それに

眼と耳を貸すだけの好意を忍んでくれた。とある日小父のベルナルが家族を寄せて結構な説教集を読み聞かせるのを聴いて俄はもう打ち忘れて、自分達も早速説教の考案に取りかゝつた。

斯うした小話ばかり面白くもないが、それが私達の教育がどれ程正當であつたかといふことを説明してゐる。まだ芽生の時期であり、思ふまゝに時間が使用出来るのであつたのに、私達はそれを妄りな事に使ふ氣は少しもなかつた。遊び友達の入用がなかつた。友達の出来る機會すら不注意に過ぎた。二人で散歩に出たときに子供が多勢遊んでゐても、別に可羨しくも思はず、況して仲間に入れて欲しいなどと思つたこともない。二人一緒にゐさへすれば、それで甚麽平凡な事にも盛んな興味が涌いた。それほど私達二人の胸に友情が満ち溢れてゐた。

二人が始終離れない。そこに人達は目を著けた。従弟の圖抜けて背高なものと、私の矮身が妙なコントラストを見せた。彼の頗長い姿勢、皿の中の馬鈴薯のやうに萎びた顔、ぐにやぐにやした容態、力の抜け切つたやうな歩きつき、それを他の子供達が見て莫迦にした。此の地方の片言で彼に、バルナ、ブレダンナ Barna-Bredanna と

1719(8)-1723(12)

1719(8)-1723(12)

いふ綽號を附けた。て外へ出る度に、多勢が四方から口々に此の名を呼んで囁し立てた。言はれる當人は平氣であるけれど、私の方は氣が短い。癪に障つてたまらない。喧嘩を買つてやらう！それは對手の小較童等の望む所であつた。打撲つてやつた。自分も撲り返された。可哀さうな従弟は一生懸命に加勢した。が、脆弱な彼は、一つ撲られたらもう地面へ取りついた。それが復私を狂ひ猛らせた。然し對手は私よりもバルナ、ブレダンナの方を狙つた。然ういふことから私達は、皆が學校に行つた時間の外は、侮辱を避けるために、滅多に街へ出る事が出来なくなつた。

これで私といふものは、既う他の難儀を救ふ男一匹になつた。これで一人の貴婦人さへ有てたら、言ひ分のない健兒になるのであつた。その婦人がすぐ二人まで出来た。ヴォオ州の小都會ニヨン Nyon は父の居る所であつた。そこへ私は始終父を訪ねた。父が土地の人達に大事にされたので、その子の私までがらやぼや

された。誰がその中で一番私に實情があるかといふ事が、父を訪ねて行く時の問題であつた。中にもヴェルソン Valson 夫人といふのが限らない愛を注いだ。未だそれで足りない氣で、その娘までが、到頭私を自分の情人にしてつた。齡なら十一の小僧が、二十二歳にもなる令嬢の情人になつたと言つて、奈何いふ種類の情人かといふことを説明する必要もあるまい。が、すべて斯うした媚婦たちは、私見たやうな小さい人形を表へ飾つて置いて、裏ではもつと大きな奴を操つたり、或は斯ういふ人形を可愛がる處を見せつけて、外の男どもの氣を懲るやうなことは、十分手に入つたものである。しかし、その娘と自分との不釣合といふことに氣附かぬ私は、この事を真面目に解つて了つた。私は自分を忘れて了つた。胸の中も頭の中も空虚にして彼女にうち込んだ。有頂天に情を燃して狂亂してゐる有様を傍て見てゐたら、かなり滑稽な芝居であつたらう。

私は二種の異なつた現實的な愛情を経験した。二つとも生氣強く、そして那箇も柔しい友情とも違つたものであつたが、その間に共通の點といふやうなものも殆ど缺けてゐた。私の生涯の全部は、斯うした相異の著しい二種の愛情の間に彷徨

徨うたと言つてよい。しかも二種ともを同時に味つたことが時々ある。この時のも現にそれで、ヴェルソン嬢への溺り方が猛烈で、誰でも彼女に近寄るのを黙つて見てゐられぬ程、公開で、獨占的であつたにもかゝはらず、別にまた一人年若なゴトン Gotton といふ娘と、たびたび密會をした。それは手輕でも生氣は強かつた。がその時には彼女は學校の先生か何ぞのやうな振舞をした。唯それだけの密會に過ぎなかつた。それだけの事が自分に取つては言ひ知れぬ歡びであつた。子供氣ながらに、秘密の樂みといふことが味はれた。ヴェルソン嬢が自身の本物の情人を匿して置いて私を弄んだ復仇を、これにて私がしてゐた。然し惜しいことに秘密は見露された。別の言葉で言ふと、私よりも學校の先生の方が、餘計に不都合と見られたのである。間もなく二人の仲は引き裂かれた。

小さいゴトンは不思議な女であつた。美人でもない彼女に、忘れられぬやうな委があつた。この私の老翁にすら、尙折々それが思ひ出される。その眼は年輩や背恰好や舉止に相應はぬものであつた。傲慢な、小生意氣な風采が、彼女の氣位の高いに釣り合つた。それが私達二人の間の先入見になつた。尙それより不思議

なのは直截と小心が入れ交つて、見分けが附かなかつたことである。自分の方からは通りに熱い愛情を私に注いでゐながら、私の方から然うすることを許さなかつた。彼女は全く子供のやうになつて私を取り扱つた。彼女は既う子供ではなくなつたのか。それとも彼女が陥りかけてゐる危険の瀬戸際を、冗談にして了ふために、自分からが子供の氣になつて了つてゐるのか。それを私が考へさせられた。

私は二女のおの／＼から強く牽き附けられてゐた。て那箇か一人と遇つてゐる時には、もう他の一人の事はまるで心に無かつた。それである二女から得た影響に、何の類似の點もなかつた。ヴェルソン嬢とは生涯離れる氣も起らずに日を送ることが出来たかも知れぬ。が、私のそれに對する歡喜は平穩であつた。激情とまでは行かなかつた。人の多勢ある場所でも、平氣に彼女と親むことが多かつた。冗談でも、世辭でも、嫉妬までも、皆私の心を咬り動かした。澤山ある筈の競争者を皆刎ね附けて、彼女が故らに私を選び出したといふことについては、勝利者の誇りを感じた。可憐しい心地になることがあつても、其の心地が可好であつた。

喝采激動詭笑、それは皆私を熱せしめ、元氣附けるものであつた。激動充奮、それが私にあつた。人中で愛の爲に吾を忘れる私。差し向ひては壓迫を感じて冷かになり、懶い状態にもなり兼ねない私。それが彼女に對しては優しみの情を失はなかつた。彼女が病氣と見ると、自分も同じ苦みを覺えた。彼女の健康を回復するために、自分の健康を棄て、もといふ氣になつた。こゝで注意しなくてはならぬ事は、その健康が私に缺けてゐるといふ事を知つたのは、後に物を知るやうになつてからであつた。彼女が居ないと私はすぐ考へさせられる。何となく物足らぬ。眼の前にあれば、感覺にてなく、すぐ胸に沁み入るやうな柔かな撫愛が感じられる。私は罪もなく彼女と昵んだ。彼女の容した事だけにしか、私の空想は傾いて行かなかつた。それなのに、私に對する親み、それを他の人達にも見せてゐると思つた時の苦しさは、言ひ様もなかつた。弟の積りて彼女を愛してゐる中に、戀人の持前である嫉妬の味を悉皆覺えてしまつた。

ゴトン嬢に對しては、この情が更に／＼激しかつた。若し他の人達にも私同様優しくしてゐるとても想へたら、忽ち猛り狂ふ土耳其格 Finicia 人、乃至は虎のやうな

形相に變じたところであつた。それは跪いて受けねばならぬ程の恩恵であつたからだ。ヴェルソン嬢に接すれば、大きな喜悅はあるけれど、感覺が動搖するといふやうな事はなかつた。それがゴトン嬢だとちよつとも顔を合せると、もう何も眼には這入らない。すべての感覺が一齊に動搖し始めた。ヴェルソン嬢とは心を許し合つてゐるでもなくて親しかつた。反對に、ゴトン嬢とは親密の頂上にありながら、その前では焦れて氣の揉めること夥だしい。此の女と永く一緒に居るやうな事があつたら、私は痙攣を起して死んで了つたかも知れぬ。不快を買ふことは、二女に對して同じやうに恐れた。併し一方に向つては歡心を求める態度を取り、片方に對しては恭順を失はぬやうにとした。世の中の何物も、決して我がヴェルソン嬢に不快の感と與へぬやうにと祈つた。と同時に、若しゴトン嬢が餓の中に身を投ぜよと命ずるやうな事があつたら、私は立ちどころにそれに違つたであらう。

ゴトン嬢との戀、むしろ密會は、しばらくして中絶えた。彼女にも私にも、それが反つて幸福であつた。ヴェルソン嬢との關係には、それ程の危険はなかつたが、幾ら

か長く續いた揚句に、尙且同じやうな結末に落ちついた。戀物語は何と言つても、浪漫的で、喝采が喚び出せるやうなものでなくて、面白くない。ヴェルソン嬢との附合は、それが幾らか力弱かつただけ、それだけ心が残つた。この女とは涙無しに別れることが出来なかつた。彼女を見棄てた途の私の心の空虚を想像することは容易でない。彼女の事ではなくては口に出して言ふことがなかつた。その事ではなくては考へることが出来なかつた。眞摯な鋭い悔恨が残つた。が、このエロイ、クナ悔恨の底には、唯彼女のみでなく、その時には氣附かなかつたが、彼女を中心にしたいろ／＼の娛樂といふものが、少からぬ領分を占めてゐたことと信じられる。別離の悲哀を慰める爲に、岩を裂く程のバテチックな手紙を書いては互ひに取り交した。勝利は私に落ちた。彼女は情に堪へぬ儘に、わざ／＼私に會ひにジョネエまで出て來た。今度は頭の中ががんとした。二日間逗留してゐる中に、私は酔ひ痴れた如くになつた。彼女が發つて行くといふ時、私はその跡を追つて、我が身を水に投げ込んで了ひたかつた。私の泣き叫ぶ聲は、永く／＼空に反響した。一週間にボンボンと手套を送つてくれた。が、それと同時に、彼女が或る男と結

婚したといふこと、今度の旅行も全くは婚禮の衣裳を買ひ調へるためであつたといふことを知らせて來なかつたら、其の贈り物は甚だにやさしく見えたかも知れない處であつた。私の忿激は大抵推察が出来るだらう。其の話を聞いてからは嚇となつて、この不實な女に二度と顔は合はずまい。それが此の女に對する極刑だ。と、然らう心に堅く銘した。併し彼女は其の爲に死にもしなかつた。それから二十年ばかり経つて私が父に會ひに行つて、二人で湖水に遊んだ時、私達の舟から少し離れたところに、やはり端艇に乗つてゐる婦人を見附けたので、私が父に誰ですと訊くと、父は笑を見せながら、

「何だ、自分で思ひ出せないのか。あれは昔の戀人だ。クリスタン Orsini 夫人と言つて元のヴェルソンの娘のことさ。」

今まで忘れてゐた名前を偶と聞かされて吃驚したが、戀て私は船頭に吩咐けて舟の方向を換へるやうにした。今復讐すれば好い機會ではあつたが、今更四十女を捉へて、二十年も昔の争闘に花を咲かせるのも、再び見まいと決めた心の盟を破る道理と思つて、その儘自分と胸を撫つてゐた。

一七二三—一七二八。—身の定まりが未だ立たぬ内に、兒童期の貴重な時間がこんな詰らぬ事にかゝつてずん／＼経つて行つた。長いこと私の自然の傾向を考へた末に、到頭それとは反對な相談を極めて、市の公證人でマッスロン Messeron といふ人の宅に預けられ、其處で小父の謂ふ「ちり／＼と金の溜まる道」を教はることになつた。憊ういふ言ひ草は限りなき不快を與へるものであつた。卑しい方法で金を絞る。然らういふ希望は高い處にある私の氣質には少しも向かなかつた。この職業は倦怠いやうに勤まりにくいやうに思へた。精勵と忍従とは到頭私を疲らせた。日に／＼擴がる一種の恐怖を持たずに役場へ出たといふことがなかつた。一方ではマッスロン氏がまた私に不服で、こちらを見下げ果てたやうな振舞を見せた。魯鈍だ、莫迦だ。然らういつた口小言の歌み間がなかつた。小父のベルナルが私といふ兒は物が解る、物が解ると請け合つて置きながら、事實はこの通り何も知らぬ小僧であつたといふことや、慟巧な子を一人預けると約束したと

思つたら、這處驢馬見たやうな者を寄越して、と那樣事を日がな一日がみく宛て附けて見せた。遂に可恥しい無能といふ名を背負はされて、役場から送り還された。其處の書記達からは、目立屋でもするより爲方のない奴だ、といふやうな罵詈雑言を浴せられた。

私の天分はこれで見極めが附いたから、今度は弟子奉公に住み込むことになつた。それは併し時計屋へでなくて、彫刻師の處へであつた。公證人の處で受けた屈辱の影響で、可怖しく卑下する者となつた私は、何の不平も言はずにそれに従つた。主人はデッコモン Ducommun と言つて齡の若い、粗野な荒々しい人であつた。この人の蔭で幾らも經たない内に悉皆私に備はつた輝やかしい幼年の光を曇らし、愛らしくいき／＼してゐた私の性質を鈍くして了つた。幾遇はもとより精神までも、全く生え抜きの徒弟らしくして了つた。羅旬癡考古癡、歴史すべて其等は長いこと忘れられた。古へ羅馬人といふやうなものが存在したといふ事實さへ憶ひ出さなかつた。父に會ひに行つた時でも、彼は最早坊ちやんらしい可愛らしさを、私に見出すことが出来なかつた。貴婦人達に對しても、既う私は昔の都雅

なジャン・ジャックではなかつた。ランベルシエ氏も其の妹君も、曾て彼等の教へ子であつた時の面影を私に認め得ないだらうとも思つた。彼等と顔を合すのも今更極りがわるくて、到頭それなり彼等と別れて了つた。可怕しくさもしい嗜慾と、ごく下卑た悪戯とは、いつとなしに今までの仇氣ない娛樂に取つて替つた。從來の教育が正しかつたにも拘らず、著しい墮落のボンビリチイが私にあつたものと見なければならぬ。何爲なら此處まで墮ちて來るのが至つて速かて、些しの苦痛もなかつたからだ。あれ程有望なケエザルが、斯う早くラリドン Lavidon になる道理がなかつたからだ(譯者云。ラリドンは L'Education と題するラ・フォンテエヌ La Fontaine の寓話の中の墮落した犬の名。Oh! combien de Césars deviendront Lavidons! 即ち嘔幾許のケエザル達が墮落してラリドンになることよ)といふ句は、懶惰放縱な人に適用される。

する爲事は不愉快なものでなかつた。圖案には興味があつた。彫刻用の鑿を弄つたりするのも、なか／＼樂みになつた。時計側の彫刻をすることは、左程骨の折れる爲事でもなかつたから、これを卒業して了はうといふ氣になつた。主人の

1723(12)-1728(17)

亂暴と虐待とに悩まされるやうな事さへなかつたら、一廉私はこれて爲上げたかも知れぬ處であつた。よく私は時間を竊んで、同じ爲事は爲事でも、それを自分の可好な事をするのに使つた。種々のメダルのやうなものを彫刻して、自分や仲間て吊下げて、帶動者といつた風をして見たりした。この内證の爲事が主人に見附かつて、酷い打擲を受けた。メダルに共和國の徽章が附けてある處を見ると、貨幣でも贋造する氣があつたのだらう。然う言つては私を困らせた。辯解するまでもなく、贋造貨幣の事などは思ひも及ばないことであつた。正眞の貨幣さへ欲しく思はなかつた。三スウ錢(約計六錢)を鑄造する位なら、羅馬のアアス錢(約二十五錢)を拵へる方が、這箇の勝手がよかつたからである。

主人の壓制は所好な爲事をも辛い辛抱と思はせ、嘔吐きの怠惰者の泥棒のと、丁度私の忌み嫌つてる惡徳ばかりを私に誣ひなければ置かなかつた。子としての依頼と、奴隸としての屈從との差異は、この時の身の上につつた變動を思ひ廻して見る時程、明かに教へられることがなかつた。天性小心な羞恥深い私は、破廉恥といふことほど可厭なものではなかつた。併し私は至當な自由を悦んだ。が、それは

1723(12)-1728(17)

消え失せた。父の家では大膽で通し、ランペルシエ氏の家では自由に過ごし、小父の家では用心深かつた。今この主人の處へ來てからは、到頭臆病になつて了つた。この後の私は、一個の失はれた兒童であつた。今迄の有様で見ると、自分より上にゐる人達とはすべて平等で、娛樂といへば必と自分が關係し、旨い物で自分の口に這入らぬといふものがなく、愜はぬ願といふものもなく、心に思つた事で口に出して言へないといふものもなかつた——然うした身分であつた私が、迂闊に口を利くこともならず、飯ももつと喰ひたい處で止めなければならず、用がなければ室にもゐられず、樂みは他人ばかりのもの、不自由は自分ばかりのもの、と相場が極り、主人始め仲間の者等が、勝手氣儘な振舞をしてゐる光景は、縛り附けられたやうな自分の身の上を一倍うら悲しく思はせ、理非の分つた喧嘩をしても、黙つてゐなければならず、何も彼も自分から奪り上げられてゐるばかりに、何を見ても羨望の對象にならぬものがなくなつたやうな——那樣家の中にある私の、成り行く末を如何他が推察するであらう。快活さ、應揚さ、機轉の利いた挨拶振り——今まではそれがあつた爲に、稀に過失があつても、旨く罰が逃れられたものであつたが、それも

既う昔の話だ。ある夜父と一緒にゐた時、何か悪戯をしたために、夕飯を喰はないで寝て了へと叱られたことがあつた。纒と情ない麴包の一切を掴んだまゝ、臺所を通つて行くと、鐵串に刺した焼肉の旨い匂が、ぶんと鼻を唆つた。皆は爐邊にゐた。その人達に一々お時宜をして行かなければならなかつた。それを一巡済まして眼角で偷視すると、こんがりとした焼肉が乗つてゐるので、他の人達と同様に、それにも挨拶をしない譯に行かなかつた。で、私は哀れつばい調子で、

「焼肉さん。お寝み！」

無邪氣に斯う言つたのが、巧いことを言つたといふ風に人々に釋られて、その場で皆と一緒に夕飯を喰べさせて貰ふことが出来た。私は今これを憶ひ出して笑はずにゐられない。慙うした頼才は、今度の主人の家でも、依然同様の僥倖に有り付き得る筈のものであつた。併し既う斯うなつては、那樣智慧は活かない。縦し活いても、それを發表する勇氣はなくなつた。

然う言つた原因から、私は黙つてゐて物を可羨しが、癖が附き、人の眼を忍ぶやうになり、羣から離れたものになり、心にもない事を言ふやうになり、終には盗み心

まで起すやうになつた。是迄に思ひも及ばなかつたこの癖が染み込んで了つてからは、一生痊る日が來なかつた。羨望と無力——その結果は大抵慙うした事になる。小僧とか、徒弟とか、さういふ徒輩が狡猾くなるのも、皆これから来る。が、その徒弟の方は、他日獨立が出來て、何事も心に任せるやうになつて來ると、那樣恥づべき傾向は自づとなくなるものだ。然ういふ境遇にも立てなかつた私は、到頭眞面な者になれずに了つた。

純な感情も導き方が拙いと、兒童は皆歪んだ道を行くやうになる。私は始終不自由を堪へた。そして誘惑は盛んに來た。それでも一年ぐらゐの經つまでは、盗み心は起らなかつた。食物をちよろまかさうといふ氣にもならなかつた。初めて物盗みをやつたのは、他人の機嫌取りにした事であつた。が、それからだん／＼門が開けて、あまり感心出來ぬ結果を喚び出すやうになつた。

主人の家に「ヴェラア Veria」といふ雇職工があつた。その男の家の畑に見事な石刀柄が出來た。金に不自由してゐるヴェラアはこの初物の石刀柄を母に匿して盗み取り、それを賣つた金で旨い飯でも喰はうと企んだ。けれど自分で手を出す

のが可厭だし、餘り器用な方でもなかつたので、私を手先に使ふことにした。彼は其が爲に、いろ／＼豫備の追従を言つて來た。那樣野心がある事を知らないから私は浮とその追従に乗せられた。と彼は今偶と慙ういふ算段が浮んだが、と私に話し出した。反對して見たがとて背かない。愛に對して抵抗の出來ないのが私の性分だから、この時も負かされた。て、毎朝私は畑へ出掛けて行つて、中でも良ささうなのばかり取つて來た。それをモラル Molard へ持つて行くと、盗んで來た物だと知つた婦人が、廉く買ひ上げようと思つて、必と然うだらう、と公開に言ひ出した。びく／＼しながら、向うが呉れただけの錢を受取つて、ヴェラアの處へ持つて行つてやつた。とその金は忽ち朝飯に早替りして、ヴェラアは一人の仲間の者として配けて喰つた。喰はせてやつたのは私だけれど、自分は幾らか殘物でも貰へば澤山と思つてゐるから、彼等の飲んで居る酒にすら手は著けなかつた。

慙ういふ事が四五日續いた。が泥棒の泥棒をしてやらう、ヴェラアから石刀箱の儲けの上前を頂戴しよう、などは夢にも思ひ附かなかつた。律義一遍にこの惡戯を勤めた。たゞ／＼吩咐けた人の機嫌を損ねないやうに、とする外に何の目

的もなかつた。でも若しこの事が見露されたとしたら、奈何なるだらう。那の卑劣な男は必と俺は知らないと言ひ張るに違ひない。それが雇職工と言へば、つまり客分だ。その言ひ草は誰にても信用されるに引き替へて、私は奉公人の分際で他に罪を捺り附けたといふ廉で、二重の罪を背負はなければならぬ。甚麼酷い目に遭はされたかも知れなかつた。罪有る強者が罪無き弱者を踏み臺にして、自ら免れるといふことは、何時の場合でも多く斯うしたものだらう。

盗みするのは想つた程怖いものでないといふ事を、這處ことから覚えて了つた。欲しい物は何でも取つて自分のものにする事が出来る。然ういふ事を、この経験で知るやうになつた。私は一概に粗食ばかり宛行はれはしなかつた。節制といふことも、それを主人の贅澤と比べて見た時でない以上は、別に辛いものと思はなかつた。子供の欲しがりさうな物を喰つてゐながら、その子供を食卓から遠ざける習慣は、彼等を詐欺者にも貪食者にもするものと見える。間もなく私は那樣人間に變つて了つた。不斷はそれ旨く通つたが、見附かつた時には大狼狽にまごつた。

憶ひ出して慄然とするが併し随分可笑しい話がある。欲しくて／＼ゐられなかつた林檎を私が盗みに行つた話である。その林檎は貯藏室の下積みになつてゐて、そこへ高い處に附けた格子の隙間から臺所の光線が射し込んで行つた。或る日たつた一人家に居た時に、私は麴包の煉盤の上へ乗つかつて、このヘスペリイデス Hesperides の園にある貴い果實を、手の届かない處から可好しさに眺め／＼してゐた譯者云。ヘスペリイデスはアトラス Atlas 神の三女の名。其の園に黄金の林檎が實るのを、百頭の龍に番をさせて置いたところ、ヘラクレス Herakles が來て奪ひ取つたと云ふ話。私は鐵串を探し出して來て、中へ入れて見たが短か過ぎる。もう一本また小さい串を補して見た。主人は銃獵が可好て、其の串は獵つて來た小禽を刺すのに使つたものである。幾度か突つて見て見たが、思ふやうに行かない。纒と一つだけ引つ懸つたので、ほく／＼しながら窺つと手前へ引き上げた。林檎が已う格子に觸りさうになつたから、手を出して掴まうとした。何んて残念な事だらう。餘りそれが大き過ぎて格子が通らない。これを引き出すのに、良い思案と思つたが、第一この儘で串を支へるやうな物が要る。それから林檎

を割る長い庖刀と、それを受ける板か何かがなくてはならぬ。苦心を重ねた結果、甘々と割るところまで漕ぎ附けた。今度はそれを引き出すまでである。ところがそれが二片に離れたと思つたら、二片とも貯藏室へ轉がり落ちた。同情ある讀者にこの時の苦みが察して貰ひたい。

でも勇氣は喪はなかつたものゝ、もう時間が大分経つたので、見附かつては大變だから、幸福な未遂犯を翌日まで延ばすことにした。貯藏室には不謹慎な證據物が、二片までちやんと残つてゐる事には氣附かず、何喰はぬ顔で爲事場に戻つた。翌日好い機を見附けて、また前の續きを始めた。今度は脚榻を持つて來て、それへ乗つて串を差し延べた。狙ひを定めて今しも突つ刺さうとすると……禍なるかな！龍は眠つてゐなかつた。不意に貯藏室の扉が開いて、ぬつと出た主人が、腕組して凝然と私を見詰めてゐる。

「やい！ しつかりしろ……」
其の可怕しさ。今把つこのペンが落ちさうになる。

酷な待遇がだん／＼嵩じて來ると、もう遠箇の神經も鈍つて行つた。それも皆

盗みする報復には違ひないが、さういふ事なら自分も盗みを續ける権利があらう。眼を後方へ向けて罰を注意するかはりに、それを前へ向けて復讐をと注意した。詐欺者として戦はう。それが私に許されてゐた。盗むことと撲たれることは伴つてゐるものだ。言はば交換的に出來てゐるのだから、私の方で自分の本分さへ果したら、向うは向うてよいやうにするであらう。斯う私は心を極めて、前よりもつと落ちつき拂つて盗みに取り掛つた。斯う自分で言つた。

「終には奈何なるだらう。撲たれるか知ら？ 可いさ、どうせ撲たれるつもりでして居るんだもの。」

私は大食はせぬが喰ふことが好きだ。感覺的である。但しその慾は深くない。いろ／＼の嗜好でその慾が紛らされた。心が閑てゐる時の外は、滅多に口について注意することはなかつた。その心が閑てゐる時と言つても、生涯に然う多くなかつたから、旨い物が喰つて見ないと思ふやうな事も自然稀であつた。だから私は何時までも食物ばかり盗んでゐないで、何んでも構はない、欲しく思つた物は片端から手を懸けることになつた。それで私が眞物の盗人にならなかつたのは、唯

金に對してはごく冷淡であつたからだ。

工場の中に祕密室が一つあつた。錠前で鎖め切つてあつた。それを私が窃と開閉する方法を見附けた。其處へ主人の上等の道具や、上等の圖案製版や、その外私の欲しがりさうなもので私に見せまいとしたやうな品物を、竊然引き込んだ。この盗みには無邪氣があるばかりであつた。現にそれを主人の爲事に使つたのを見ても解る。併し然ういふ物が自分の所有に歸したと思ふことが嬉しかつた。技術までを、その産物と一緒に我が物にしたやうな氣がした。主人は別にまた金や銀の小片、寶石、貴重品、貨幣などの這入つた函を澤山持つてゐた。衣兜の中には四スウか五スウ(約計十錢)の端錢すら滅多に持つてゐない私だが、それでも那樣金函などに手を觸れることは勿論、一度だつてそれを羨望の眼で眺めたこともなかつたやうに記えてゐる。つまり斯うした種類の物は、喜びよりも怖れをもつて見た。金を盗むのは可怕しい事だといふ考は、大部分教育の資であると思ふ。然ういふ畏怖の情の中には、恥辱、牢獄、刑罰、刑具などの念が潜んでゐて、金が欲しいと思つた瞬間に、忽ち私を顛へさせたものに違ひない。私のした事は、不都合と言つて

も自分には眞の冗談としか思へなかつたし、實際また何等の悪意が働いたのでなかつた。で此の事は、主人から唯一遍の叱責を受ける位で済む筈のもので、それも私が初めから覺悟してゐる事であつた。

併し、一度でも自分で制へなければならぬ程の羨望を感じたこともなく、心に争鬪を起す程の事を思つたこともなかつた。たつた一枚の圖引用紙、一番私を誘惑する物と言へば、大抵斯ういふ物であつた。金さへあれば那樣紙の一聯でも買へるのに、其の金は欲しいと思はない。斯うした風變りな處は、全く私の性格の普通と異なつた處から來た。此の特質こそは、何かに附けて私の行爲を支配したものであるから、少し説明して置く必要がある。

激しい情熱がいろ／＼私にある。一旦それが活動し始めると、何物もその奔放を遮ることが出來ない。その時の私は、既う自制も分別も、恐怖も禮節も、まるで分らないやうな人である。シニクで、厚顔で、兇暴で、大膽である。私を制御する羞恥もなければ、脅喝する危惧もない。これぞと思ふ唯一つの目的物を外にしては、宇宙も私に取つては屑でない。併しそれはすべて一瞬間より長く續かない。次の

瞬間には、私はもう虚無の状態に陥つて了ふ。静寂の中に置かれた時の私は、無感覺、または羞恥其の物にも等しい。一切の事物に胸をどきつかせ、心を痛める。蠅が一匹飛んでも可憐い。一語を發するにも、身體を搖るにも、言ひやうもない億劫さを感じず。いつそ世の中の人の眼から、自分といふものを掻き消して了ひたいと思ふ程、他人が可怖しく、他人が可恥しくて堪らぬ。爲事をせねばならぬと思ふと機械的にしか身體が動かない。話をせねばならぬと思ふと、口は申譯ばかりにしか動かない。他に顔を見られると、狼狽して了ふ。興に乗じた時なら口の利けぬ事もない。尋常の座談の場合には、何も口へ出て來ない。まるで出て來ない。この場合自分も何か話さなければならぬと思ふと、然う思つただけでもう實に譬へ様もなく術なし。

尙附け加へて置きたいのは、私の主要な嗜好のいづれもは、決して金で買ふことの出來るやうなものではないといふ事である。淡い享樂を求めてないと欲しくない。金はそのすべてを腐蝕させる。例へば私は會食が可好だ。可好だが併し、壓迫を感じながら上流社會の人達の中へ這入つて行くのは、苦しいし、無頼の客と小料理

屋で一緒になるのも煩い。友達一人ぐらゐるとて會食するのでないと可厭だ。それには理由がある。孤獨といふとは到底私には望めない事柄である。何爲といへば自分たつた一人て居たところて、其の時は「想像」といふ奴が外の事を考へ出して来るから、詰り喰ふ方へ心が行かない。燃え熾る血潮は、女だけで満足するかも知れないが、鼓動する感情はそれよりも尙戀を要求する。金で買はれるやうな女は私の前では魅力のない者になつて了ふ。何の爲に金を出すのだといふ疑さへ起つて来る。其の他の嗜好でも皆斯ういふ譯で、利害に關係のないものでなければ、さつぱり私に面白味がない。だから私の嗜慾は、普通人のと異なつて、誰にもその味の解らぬやうなものである。

金といふものは、他人が思ふ程に有難いものと思へなかつた。大して便利な物とも思へなかつた。金は其の儘では何の益にも立たない。形を變へてないと、其の味は出て来ない。物を買ひ取らなければならぬ。値切つたり、騙されたり、高い金を拂ひながら莫迦を見ることがも少くない。寧ろ品の良い現物の方が有りがたいと思ふ。金で持つてゐるのは、品の悪い現物を握つてゐるやうなものだ。新

らしい鶏卵のつもりで買つて見ると腐つてゐる。良い果物だと思ふと青つたれた奴に撞著る。若い女を買つて見れば摺れ枯らした。美しい酒が飲みたいが何處へ行つて買はう。酒屋か。其處へ行けば毒を盛るかも知れない。奈何しても正眞の上物が欲しいとする。その心配やら面倒やら。それ友人だ、照會だ、コンミッショナだ、手紙だ、出掛けたことの、歸つたことの、待つたことのと騒ぎの末が、尙且失敗に終ることも稀しくない。金を使ふばかりに、何て苦勞の多いことだらう。美しい酒は廢めても、この苦痛には替へられないではないか。

徒弟で居た頃でも、それから後でも、口に合ふやうな物を買ひに出掛けたことは、幾度あつたか知れない。蒸菓子屋の店先へ立ち寄つて、女が幾人も店搦て番をしてゐるのを見ると、それが皆此の小さな貪食家を笑つたり、嘲弄したりするものと思ひてゐた。また水菓子屋の前を通りすがりに、水の垂るやうな梨子を流石に視て行くと、その匂が身に沁みるやうに思ふ。けれど傍て二三人の若者が疑と此方を眺めてゐたり、見知り越の誰かが店先にゐたり、家の女中かと思はれるやうな娘が向うから來ると、近眼の私はいろ／＼の間違つた考を起す。たゞ道を通る人々

がみんな自分の相識のやうな気がして、何處へ行つても何かしら邪魔が這入つて急に元気が消る。買ふのが極りが悪いと思ふ程買ひたい氣が増つて来る。衣兜にはちやんと金が這入つてゐながら、何も買はずに、欲しい／＼て莫迦のやうになつたまゝ家へ歸つた。

自身にしる、他に頼んでにしる、金を使ふことに關聯して、始終私は甚麼迷惑や羞恥や嫌悪や、不便利や不愉快やを味はつたか。それを一々述べ立てたら、無趣味極まることになつて了はねばならぬ。話がだん／＼進んで行くに連れて、私の性質が讀者に解つて來れば、然ういふ事はあつた感ぜられるやうになる。

それが解れば、誰でもすぐ私の謂はゆる矛盾な性質の一つも解るであらう。それは、これ程金錢を卑んだ私が、殆ど鄙吝なくらゐる欲深い心を持つてゐたことである。金の無い時には、那樣ものが何の益に立つと思つて、欲しがらる氣はさらになかつたが、幾らか持つてゐる時には、何時までもちつと握り締めてゐた。——といふのは自分の氣に入るやうに使ふ途を知らなかつたからで、併し、よい鹽梅に自分の氣に入つた場合さへあれば、早速金を蒔き散らすから、何時の間にか財布を拂いて

ゐた。然うは言ふものの、守銭奴の摹似をして、見得に金を使つて見るだけだぞと思ひ給ふな。まるでそれとは反對で、私は人の見ない處で、自分の享樂だけに金を使ふのである。他に見せびらかすかはりに、なるだけ隠してやる。金を持つてゐるといふ其の事、既に可恥しい氣になるのみでない。それを用立てるといふことが更に氣に咎める。それ程金といふ物が私の性に合はないものだと思つてゐる。

若し私に樂に暮しの出来る収入があつたら、決して金が欲しいといふ心にはならなかつたらう。収入の有りたけ使ひ切つて、これを蓄へるなどとは思ひも掛けなかつたらう。ところが他任せの私の身の上では、不安の絶え間といふものがない。私は自由を崇び、束縛、苦痛、屈從を惡む。財布の中に金が續いてゐる中は、私の獨立が保障されてゐる譯であるから、何よりも可厭な金儲の苦痛から救はれてゐる。そして獨立の保障を失つてはならぬと思ふ處から、つひ金が手放しともなくなるのである。所有する金は自主の資格である。欲求する金は奴隸のそれである。だから私は自分の金は握り込んでゐて、其の外は羨望せぬのである。

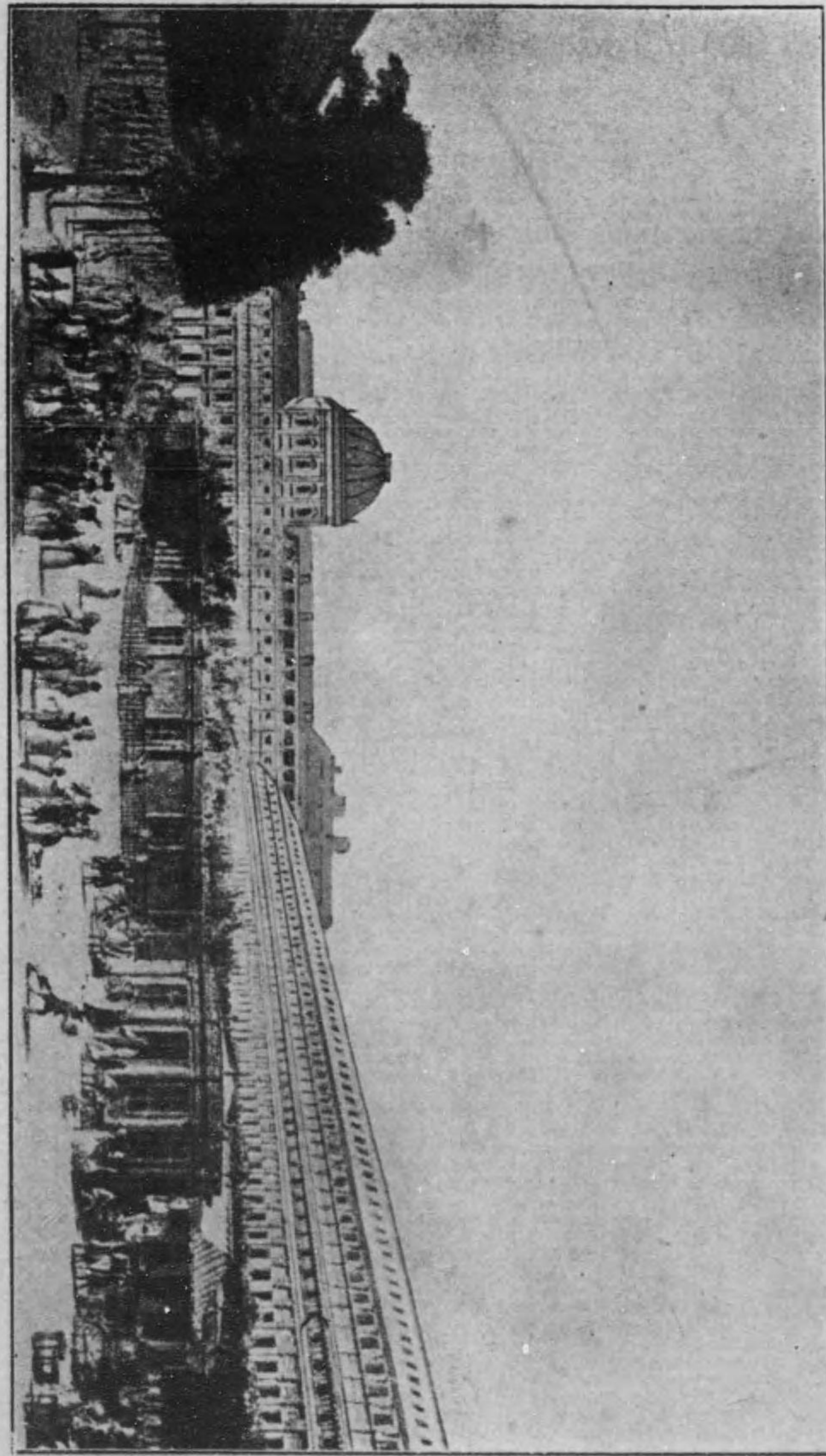
1723(12)-1728(17)

金に無貪著なのはつまり怠惰から来た。金を儲ける楽しみは儲ける爲に忍ぶ苦痛に比べて引き合はない。金を浪費することもやはり怠惰から来た。面白く金の使へるやうな時に出會すと、思ふさま楽しみがしたくもなるものだ。私は金に目は暮れないが、それよりも品物が欲しい。それは金と欲しい物との間には、常に一つの空隙が介まつてゐるけれど、物とそれから来る快感との間には、那樣ものが介まつてゐないからである。物を見ればすぐ私は誘惑されるけれど、單にその物を求める方便に過ぎない金だけを見たとして、全く無神経同様である。だから私のは小盗人といふのであらう。今でも奈何かすると其の癖が出るが、些細な物が欲しいと思ふと、他に呉れと言つて頼んでゐるよりは、黙つて盗つて了つた方が、手取早くて可い。と言つて、金なら生涯に一リアアル hard (約二釐五毛)でも他から盗んではなほえない。唯一度だけ十五年ばかり前に、或る人の金をセリイダル litro スウ(約計三圓)奪つた事がある。これは一つ話す價値のある事と思ふ。何爲なら、此の事件には厚顔と無智が一緒に混じてゐて、私より外の人にも關係があつたといふ事を、自分では信じられなかつたからである。

1723(12)-1728(17)

それは巴里での事であつた。私はフランキ・イユ Francueil 氏と連れて、五時頃にパレ・ロアヤル Palais-Royal を散歩した(譯者云。フランキ・イユのことは第七卷一七四二年以下の條に詳しく出る)。彼は懐中時計を出して見て、私に「オペラへ還入つて見ようてはありませんか」と言ふ。私も望むところだから、二人で行く事にした。彼は士間の切符を二枚買つて、一枚は私に與れて、もう一枚を持つて突と先に行つた。私は迹から跟いて行つた。と、扉口が人で大混雑してゐた。中を見込むと皆立つたまゝである。この羣集の中で必と私は迷子になるか、少くもフランキ・イユ氏に然う思はせたいに違ひない。私は中から出て来て、小切符を受け取り、それから自分だけの切符代を返して貰つて出た。木戸口まで来た時には、既う看客が席に着いて了つてゐたことも、フランキ・イユ氏が私の居ない事に氣附いたことも思はなかつた。

この時の舉動ほど、自分の持前と遠く離れた事はまたとない。それを此處に書き立てるのも、畢竟人には誰でも迂闊心を取り亂すといふ事があるものだから、行爲に依つて人を判定することの困難な譯を示さうと思ふからである。これは決

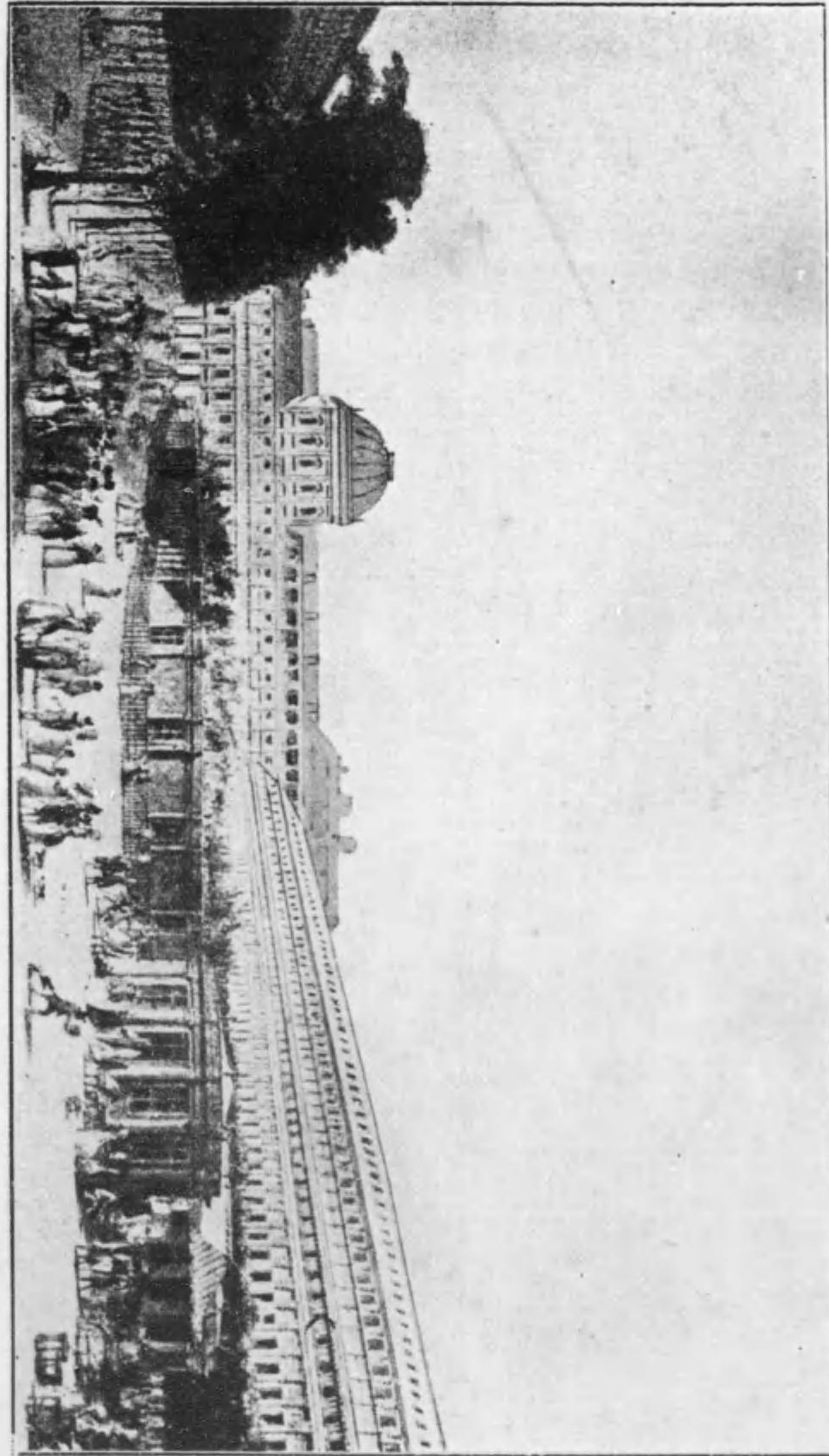


グランド・ロ・ホテル

1723(12)-1728(17)

して金その物を盗まうと思つてした事でない。金の役目が盗んで見たかつたのである。併し、いづれにしても竊盗には相違ない。いや普通の竊盗より、一倍恥づべき事かも知れぬ。

徒弟である頃に歩いたすべての行路——崇高な、英雄的な處から、醜陋な無頼漢風の點までを残らず辿つて見ようと思へば、こんな話はいくらでも出て来る。が、私はこの境遇に伴つたあらゆる類廢の空氣を吸つて見たけれど、孰れ一つとして興味を繋ぎ得るものがなかつた。仲間の人達の歡樂にも、私は疲れた。爲事の間にも太甚しい束縛が來て、氣を腐らせるやうにするから、何をしても面白くなくなつた。斯ういふことから、久しく忘れてゐた讀書の趣味が再び戻つて來た。その讀書がまた爲事の方を壓倒したので、それが新たな一種の罪を作るやうになつて、その爲にまた新たな爵を呼び出した。壓迫の反動で、此の趣味は欲望から激情へと進んで行つた。貸本屋で名を賣つたラトリビ、ウ・I・E・Hineは、甚麼種類の本でも持つて來て見せた。書物の善惡然ういふ區別は立てずに、片端から貪婪の眼をもつて讀み耽つた。爲事しながらでも、使ひに行く途中でも、便所の中でも構はず讀んだ。



ル・アキア・ロ・エ・レ・バ

第一卷

して金その物を盗まうと思つてした事でない。金の役目が盗んで見たかつたのである。併し、いづれにしても竊盗には相違ない。いや普通の竊盗より、一倍恥づべき事かも知れぬ。

1723(12)-1728(17)

徒弟でゐる頃に歩いたすべての行路——崇高な、英雄的な處から、醜陋な無頼漢風の點までを、残らず辿つて見ようと思へば、こんな話はいくらでも出て来る。が、私はこの境遇に伴つたあらゆる頽廢の空氣を吸つて見たけれど、孰れ一つとして興味を繋ぎ得るものがなかつた。仲間の人達の歡樂にも、私は疲れた。爲事の間にも太甚しい束縛が來て、氣を腐らせるやうにするから、何をして面白くなくなつた。斯ういふことから、久しく忘れてゐた讀書の趣味が再び戻つて來た。その讀書がまた爲事の方を壓倒したので、それが新たな一種の罪を作るやうになつて、その爲にまた新たな罰を呼び出した。壓迫の反動で、此の趣味は欲望から激情へと進んで行つた。貸本屋で名を賣つたラ・トリビウ・ウ・La Triviaは、甚麼種類の本でも持つて來て見せた。書物の善惡然ういふ區別は立てずに、片端から貪婪の眼をもつて讀み耽つた。爲事しながらでも、使ひに行く途中でも、便所の中でも構はず讀んだ。

時間などの事は考へても居なかつた。頭は全く此の方へ吸ひ寄せられて、外の事はてんで手に附かなかつた。主人は内々私を探偵しては、不意に飛び出して來て撲つたり本を取り上げたりした。どのくらの書物が壊されたり、焼き棄てられたり、窓から取つて投げられたりしたか。どのくらの缺本になつたまゝして、トリビウの處に残つてゐたか。彼女に拂ふだけの金がない時には、自分の襯衣や襟飾や、服まで皆渡した。日曜ごとに貰ふ三ヌウ(約計六錢)の祝儀も極まつて彼女の處へ持つて行つた。

すると金が入用になつて來たらうと思はれるかも知れない。如何にも然うだが、それは讀書がすべての活動を阻めて了つた時であつた。新たな興味に溺れた私に讀書の外の何物が注意を惹かうぞ。盗みする事も厭んで了つた。此處にも私の性質の、他と異なつた點の一つがある。或る習慣が極端まで行くと、ごく微細な事にも魂は奪はれ、氣が變り、それに心は抱き締められて、終には逆上るところまで行かねば已まない。其の時には既う外の事は、一切忘れて、たゞこの新奇な目的物ばかりに眼が暮れる。衣兜に入れて持つてゐる新らしい本を翻る時、胸は

わく／＼震へる。自分一人になつても、すぐ本を取り出すから主人の室の中を掻き捜すことも考へない。盗人の真似までしたといふやうな事は、自分で不思議に思ふ位であつた。費用の懸る樂みは更にして見る氣もなかつた。この現在の瞬間に執著する私の心の中には、然ういふ事で將來をも押し通さうといふ考も起らなかつた。トリビウは本を懸金で貸して呉れた。前金は廉かつた。私は本を衣兜に入れて了ひさへすれば、もう何事も思はなかつた。自然に這入る金は、皆この女の手に渡つた。催促を受けた時は、いつものやうに、自分が得意の手段に手寄せ外はなかつた。前から盗んで置くといふのは、手廻しの良過ぎた話だが、支拂をする爲に盗むのは、決して誘惑とも言へない。

喧嘩と毆打と濫讀と、その爲に私の氣質は暗い荒んだものになつて了つた。頭腦が頼れて來た。そして陰險な懸け離れた心の生活を續けた。でも私に、卑近な淺薄な書物を斥ける程高い趣味はなかつたけれど、幸ひにも淫猥な放肆な書物だけには逢着さずに済んだ。見通しの利くトリビウだから、然ういふ類の書物を貸すことを躊躇つたのかといふと、然うてない。那樣書物に限つて、値段を貴くする

爲に、何か斯う勿體を附けたやうな風をして見せるので、不快と恥辱を感じて、決然それを斥ける氣になつたのである。それに偶然がよい工合に私の内端な性質を扶けて行つたから、三十歳を越した後でなくては、那樣危険な書物に觸れたことがなかつた。甚麼書物かと言へば、誰でも面目を重んずる婦人なら、二人して讀むことも出來ないといふ點で困るやうな物であつた。

一年經たぬ間に、貧しいトリビウの書物庫を隅々まで漁り竭した。それから後は、太甚しい無聊の中に生きた。本が面白さに、腕白小僧のする惡戯も治つた。書物は十分吟味した譯でもなく、時には良くない物も交つてゐたけれど、それでも現在の境遇から得たよりも、遥と高尚な感情の方へ向ふことが出來た。手近にある物で、何一つ興味を惹くやうなものがなくなつた。誘惑されさうに見える物でも、何となく自分との距離が遠いやうな氣がして、もう自分の心を咬るやうな物が、一つも映じて來なくなつた。長らく動搖した感覺は、何か知ら一つの樂みを要求し始めて來た。私は、性の無い人のやうに、現實の享樂とは離れて居た。それでも青春に近づいて、感覺の鋭くなつた私は、時には以前の他愛もない事を考へて見たけ

れど、それ以上に求めるものもなかつた。

斯ういふ奇態な状態である間に空想は一回轉した。この爲に、發動し始めた感覺欲も鎮まつて、一身を全うすることが出来た。それは斯うであつた。讀書の間に興味を覺えた種々な境遇を取つて來て、様々と形を變へて見たり、修飾して見たりして、自分は空想中の人物になり濟まして、一番得意な位置に立つた氣であるやうになつた事である。斯うした小説的な妄想に囚はれて了つてからは、不滿な現實の境涯は、悉皆忘れるやうになつた。空想中の目的物に一身を任せて居れば、何よりも氣樂でよいから、自分の周圍の物は何も彼も面白くなつて來た。この後永く寂しい人に私になつたのも、元の起因は此處にある。かういふ傾向は、ちよつと見ると如何にも反社會的で、陰鬱だが、併し實際は非常に感傷的な、可憐な、柔軟な心から來たものである。畢竟自分に適するやうな境涯を、如實に見出すことが出来なかつたばかりに、已むを得ず小説の中から材料を吸收したのである。この傾向が、是から先奈何いふ奇態な現象を生み出すかが見物である。茲ては唯この傾向の定まつた原因を言ふだけにとめて置く。この傾向になつてからは、いろ

1723(12)-1728(17)

くの欲情は鎮まり返つた。いづれも壓へ附けられた。希望は盛んに湧き立させて置いて、それに手を出す段になると、懶くてならぬといつたやうな氣分に變へられて了つた。

1723(12)-1728(17)

その内に十六歳になつた。何物にも不安と不滿とが膠着した。自分までが愛憎の竭きた物になつた。今の境遇に興味がなく、今の年齢に快味がなく、標的もない欲望に釣り込まれ、涙の主もないに嗚咽いたり、物を見ずに溜息したり。終には我が周圍に氣に入つた物がないのを見て、自分で作り出した幻像ばかりを懷愛ひやうになつて了つた。

日曜日には説教が濟むと、仲間の人達は一緒に馳け歩かうと言つて連れ出しに來た。出来ることなら、私はその仲間から脱け出したかつたのである。併し一度仲間に這入つて了へば、一番熱心になつて、一番餘計に走つた。動かすのも容易でないか、はりに阻めることも難しい。それが私の性質の特色であつた。皆と郊外

を歩いてゐても、誰か注意してくれる者がなければ、歸ることを忘れて何處までも行つた。二度然ういふ事があつた。何時でも市の門は、歸つて來ない前に閉まつてゐた。翌日果して思つた通りの罰を受けた。そして二度目の時には、この次こそ必ともう冒険はすまいと決心した。それ程酷い罰が豫告された。斯の様に恐れてゐた其の三度目の鎖め出しに依然逢著した。

手廻しの效がなくなつたのは、憎んでも餘りあるミヌトオリ Mintoli といふ大尉の所爲であつた。斯の人は、いつも制規の時間より三十分も早く門を閉めた。友達二人と歸らうとすると、市から凡そ半リウツ Head 一リウツは約一里の處で歸市の合圖を聞き附けて、二倍の歩調で急いだ。と大鼓が聞えるから、また駈歩になつた。呼吸が窒つて全身が汗みどろになつた。心臓は跳るやうである。遠くから番兵の見張つてゐるのが分る。また必死に駈けた。切れかゝる氣息の下から叫んで見た。が遅かつた。哨舎から約二十歩の處まで來ると、第一の吊橋が釣り上げられた。私は那の可怕しかりさうな角堡を空高く打ち眺めて、この時を始めにして私に落ち冠さつた不祥な、不可抗な運命を語るのかと思つて、漫ろに身顛ひされた。

この悲哀に初めて嘗然となつて、斜面地に身を倒し、そして地面を齧んだ。二人の友は、自分達の不運を笑ひのめしながら、すぐに腹を極めた。私も量見は極めたが、それは他と異つてゐた。主人の家へはもう歸るまい。其の場ですぐ斯う心に誓つた。翌朝、開門の時間が來て、二人が市へ這入つて行く時、私は彼等と永訣の辭を交して、次手に一つの頼みを託けた。それは從弟のベルナルに、今度の自分の決心と、最後に一度或る所で會ひたいといふことを、密と知らせて貰ふことであつた。

弟子奉、公に這入つてからは、彼とは離れ／＼になつて、會ふ機が少かつた。よく日曜などに出遇つた事もあつたが、互ひに知らず／＼別々の道を行つたので、段々無沙汰がちになつた。然ういふ變遷は、多く彼の母親から來たのであらうと思ふ。彼は、山の手少年であつた。私は賤劣な徒弟で、サン・ジェルマン Saint-Gervais の小僧つ子に過ぎない譯者云。サン・ジェルマンは「下町」に當る。ジャン・ネエヴの市街は、日本の東京に似た處がある。私達二人は肉身の問柄であつても、おひ／＼似た點が滅れて行つた。度々私が會ひに行くのは、取りも直さず、向うの品位を墮すやうな

1723(12)-1728(17)

ものであつた。其にも拘らず互ひの繋りは、全く断れても了はなかつた。その上性質の善良な少年だつたから、母が何と言つても、折々依然私を訪ねて呉れた。私の決心を聞き知つて、従弟は駈け附けた。その決心を諷めさせよう、自分も分擔しようとするのでなく、些し許の贈り物を與れて、多少路銀の補足をしようといふのであつた。その中に劍が一本あつた。私はそれが自慢で、トリノ Torino に行く時でも、肌身放さずに居たが、すると其處で拔差ならぬ必要に迫られて、身を断られる思ひで、人手に渡して了つた。後になつて、此の場合の彼の素振を思ふと、奈何しても彼はその母の差金——奈何かすると父の差金までも、堅く守つてゐたと考へられる事がある。自分だけの量見なら、奈何しても私を引き留めるか、自分も一緒に行かうと出なければならぬ處であるのに、那樣事はなかつた。私の氣を轉じさせるかはりに、私の思ひ立を勵ました。そして、私の決心を動かぬものと見知つた時は、澤山涙も零さずに、匆々と立ち去つた。其の後二人は書信を取り交したこともなかつた。到頭顔を合すこともなかつた。私は此の損失を傷まずにゐられない。性質のすぐれて、良い少年で、私とは愛し合つて行けたのだ。

1723(12)-1728(17)

是から私は定められた運命のどん底へ落ち下つて行くのだが、まづ其の前に、若し私が那よりもつと善い主人に事へたのだつたら、奈何いふ運命が作られたであらうか。然ういふ事をちよつと想つて見たい。

平穩で地味な技術者の境遇——これ程よく自分の氣質に相應しい、幸福なものはなかつた筈である。例へば、ジッネエツの彫刻師如、言つた階級に居れば、申し分はなかつた。然うした境遇に居れば、安らかな生計を立てて行くに不足もなく、かと言つて僥倖といふやうな物とは、間隔があるから、後々まで非望を企ませるやうな事もあるまい。適度な餘暇に、適度な娛樂を求めてゐればよい。堅く自分の立ち場を守つて、その外へは足踏み出すことも要らぬ。斯うした境遇にも空想の餘地はある。それは種々な境遇を怪しい幻影にして見せる力のあるもの、我が好む儘に、それからそれへと憧れさせる力のあるものであるが、其の中の何處へ落ち著かねばならぬといふ義務もない。自分の居る境遇から、這入り難い西班牙 España

ない。是から後なさけない話ばかりで讀者を困らせるのかと思ふと……。

の城までは然う遠いこともなかつた譯者云。西班牙の城といふのは、世に有り得べからざる事の喩。美しい空想といふやうな意味になる。最も簡易な苦勞心配のごく少い自由な心地で居られる、然うした境遇が一番私に相應しいものであることが解る。その外には落ち著けるやうな所はない。わが宗教、わが祖國、わが家族、わが友——其の眞中に自分は擁せられて、趣味に適つた職業を取り、心まかせな社會に交つて、自分の氣質が要求する、平和な、温かな生涯を送ればよかつたのである。善良な信者、善良な市民、善良な家父、善良な友人、善良な職人、すべての物に對して善良な人として通つて行けたのである。自分の生涯を愛し、且尊ぶべきであつたのだ。蔭に隠れたやうな質素な生活、しかしまた滑かて軟かなライフを渡つて了つた後、骨肉の胸に安らかに抱かれて、永へに眠つたところであつた。幾らも經たない間に、世の中の人々からは忘れられて了つたらう。が、少くもその人達の記憶に残つてゐる間だけは、何とか言つて惜まれたところであつた。

これは假に想像して見た話だ。實際は、それとは似も附かぬやうなことに成つた。甚麽光景が現はれて來るだらう？ 自分の哀史を今から見通して了ひたく



第二卷

一七二八—一七三一。

餘り可怕しさに到頭逃亡といふことになつた。其の瞬間の悲しかつただけ、それだけ思ひ切つた時の心地は言ひやうもなく嬉しかつた。齡も行かないのに、自分の郷土、家族、保護者、依託を見棄て、弟子奉公の年季も明けないから生活の方法も心得ず、逆境に身を投じて抜け出す工夫も知らず、未だ軟弱な、無智な齡をして、墮落

第二卷

1728(17)-1731(20)

と絶望の淵に躍り込まうとし、身に背負ひ切れない程の重い桎梏を忍び、種々な悪徳と過誤と罨と屈従と死とを求め、宛所もなくふらふと漂流へて行かうとする——それが是からの行く先地でなければならぬ。それが私の達著す展望圖でなければならぬ。ところが實際と比べて、何といふ解釋の相違であらう。わが物になつたと思つた「獨立」の感情は、此の時の心の全幅に擴がつた。自由な、自主的な、私は、何事でも爲て出来ぬものがないことのやうに思つた。突進して大空に飛揚するといふやうなことを許り思つた。易々と廣漠な世界へ這入つて行つた。自分の偉勳で此の空間を満たさうとした。一歩々々に私は饗宴や、寶庫や、アヴンチュールや、自分の爲に働いてくれる友や、自分を慰めてくれる女を見出さうとした。自分一人で、此の世界一ぱいに振舞はうとした。が、それは世界の全部ではなかつた。その大半は無くても済む。そんなに廣くても用がない。たゞ、愉快で面倒のない社會が一つあれば澤山だつた。謙遜な私の心は、一つの狭い領域に私を繋いで置かうとした。併しその領域は、惚れ惚れするやうな處、そして立派に自分で支配の出来る處でなければならぬ。一構への別荘、それが私の大望の極度であ

1728(17)-1731(20)

つた。其の領主と夫人との寵臣となり、姫君の戀人となり、その兄弟の友となり、その隣人の擁護者となることが出来れば、それで私は満足だ。それ以上は何の必要もない。

斯うした謙遜な未來を頼みにして、數日の間、市の周圍を彷徨いた。宿は相識の農家で借りて廻つたが、皆は深切であつた。それは市に住む人達の、到底及ばぬやうなものであつた。待遇が懇ろであつた。宿を貸すにも、飯を喰はせるにも、心から機嫌よくして呉れた。乞食に物を與るといふ風では決して無く、少しも尊大といふ處は見えなかつた。

何處といふ標的もなく、駈け歩いた末に、ジッネエツから二リウウ(約計二里)離れた、サウアの國のコンフィニオン Confignon まで廻り着いた。此處の牧師にボンツェル Pont-verre といふ人があつた。共和國史で著名なこの名前は、少からず私を動した。「食匙の士たち」の子孫が奈何したかといふことは、私の好奇心を唆つた譯者云。「食匙の士たち」は les gentilshommes de la Guillier の譯で、サウア公の家臣等を指す。一五二七年、サウ州併合の際、彼等はジッネエツを食匙で喰つて了はうと誓つて、その記念に

一本づつ食匙を頸に懸けて居た。ジッネエツは三年間、彼等に惱まされた。サヴォア
 は今日、サヴォア縣と、オオト・サヴォア Haute-Savoie 縣とに分れて、ともに佛蘭西の管轄に
 なつてゐるが、元はサヴォア公國と稱つて、シチリア Sicilia 島までも含んだ。そのシ
 チリアは、一七二〇年、即ちルソオが九歳の時、西班牙領であつたサルデニア島と交
 換になつて、當時のサヴォア公ヴィットリオ・アマデオ Vittorio Amadeo は、同時にサルデニ
 ア王と稱することになつた。今の伊太利亞 Italia のトリノ・ノヴァラ Novara アレッサン
 ドリア Alessandria 及びクネオ Cuneo の四州を包括するピエモンテ Piemonte 地方は、即
 ち此のサルデニア王國の主要部を成すもので、トリノは王國の首府であつた。又、
 今日、サヴォア縣の首邑はシンベレイ Chambery で、オオト・サヴォア縣の首邑はアヌシ
 イ Anney である。是等の地方はいづれもルソオが漂浪の舞臺であるから、此の注
 も後文に至つて参照の必要が起る。私はボンヴェル氏に會ひに行つた。深切に待
 遇された。

彼の話はジッネエツの邪教の事から、聖母教會の威嚴といふ事へ移つて行つた。
 それから馳走が出た。それからずつと彼が議論を續けて行く間に、私はそれを論

破るに足る程の事も聴かずに終つた。唯斯う誰にでも待遇をよくする程の牧師
 たちは、郷里の宣教師たちにも劣らぬものと思つた。彼は立派な紳士でも、確かに
 私の方が餘計物を識つてゐた。けれども、那樣神學者を氣取るよりも、陪食者で濟
 ましてゐた方が、私には餘程面白かつた。それに旨いフランジイ Fendant 酒の力は、彼
 の方に強味を附けた。斯ういふ結構な宿主を言ひ負かしたところであらうか。あまり名譽
 でもあるまいと思つた。て私は言ひ負かされた。少くも面と向つては抵抗しな
 かつた。この際の私の態度が、果して虚偽といふべきものであらうか。那樣事は
 決してない。私には誠意の外なかつたことを斷言する。迎合——むしろ寛容は、
 必ずしも惡徳だと言へない。却つて多くの場合、殊に若い人々に取つては、一つの
 美德である。慈惠を施す人には、誰とて牽き附けられるものだ。讓歩するのはそ
 の人を欺くのでなくて、向うの心に傷を附けぬ爲である。善に對して惡を酬いな
 い爲である。私を迎へ入れて丁寧に待遇し、私を説得しようとしたボンヴェル氏に
 何の私意があらう。あつたとすれば、唯私の益を圖つただけだ。若い私の心に然
 う獨言を言つた。私はこの善人に向つて、感謝と尊敬の念を禁じ得なかつた。自

1728(17)-1731(20)

分の彼より優れてゐることは知つてゐながら、それを振り廻して彼から受けた待遇の返禮にしようとは思はなかつた。斯うした寛容の中に、偽善の意味は少しも混つてゐなかつた。信教を改めようといふ考もなかつた。然ういふ考を起す段にはなく、一種の恐怖に驅られて、長らくこの考から離れてゐたくらゐてある。ただ私は、其の考から自分に好意を寄せる人達の感情を損ねないやうにと望んだ。さういふ人達の好意を研究して見る積りであつた。そして自分が、實際よりも用意深くないことを見せて、彼等の希望が成就するもののやうに思はせる氣てゐた。その有様を譬へて言へば、ごく貞節な女が、媚態を他に見せながら、何物も犠牲にはせず、取り留めた約束などしないでゐて、たゞその當座の自分の目的を果すために、心にもないお座なりの甘口を言つて喜ばせる。それに近いものであらう。

道理心、敬虔の情、秩序心——それらは確かに私が莫迦を罷めて滅亡から拯はれること、再び家庭の人になつて浮き沈みの悲境から足が抜けるやうになることを要求した。有徳の人、有徳に近い人、然ういふものになれるのは、此の心からである。併し、ボンヴェル氏は善良な人ではあつたが、有徳の人とは言へなかつた。却つて

1728(17)-1731(20)

偶像に禮拜し、祈禱を事とする外に、何等の道義あることも知らぬやうな、一個の盲信的な僧侶に過ぎなかつた。ジッネエツの宣教師達を惡し様に誹る事の外、信仰の第一義については何等の潛思をも試みないやうな、一種の傳道者といふだけであつた。私を郷里に送り還すことは考へないで、却つて私の家出を喜ぶ風であつた。それは家へ歸りたくても、歸られぬやうな身分にして、了はうといふ量見があつたからだ。私を落魄の間に倒れしめるか、無頼漢に墮落させるか。二つに一つの賭となつた。併し、彼の方では、那樣ことは、那箇になつても構はなかつた。邪教から脱けて舊教に歸依する一人の信者、それだけが彼の眼に映つてゐた。私が黙つて彌撒に列なつてゐさへすれば、それが律義者だらうと破落戸だらうと、那樣ことは、貪著するのてなかつた。のみならず、斯う言つた考へ方をするのは、加特力教徒に特有なものであることは問ふまでもない。すべて、道徳よりも信仰を重く観る

正教の諸派では、いつも斯うである。
「神様が召しなされるから、お前はアヌシイへ行かないか。彼處には情深い夫人が一人居て、王様の恵みて、世の中の罪深い人達を拯はうとして御座るのだ。第一

其の夫人御自身が模範をお見せなすつたぢや。」

斯うボンツェル氏が私に勧めて置いて、今度新たに新教から改宗した、ワレンスワレン夫人の事に言ひ及んだ。此の夫人は扶助金として、サルヂニア王から年々二千フラン (Franco) (約計八百圓) づゝの給與を受けてゐた。ところが、折ふし細民等が信仰を賣らうとしかかつたので、僧達(そうた)が彼等(かれら)をこの夫人の處へ差し向けて、その金を恵ませるやうにしたのであつた。恵み深い然うした女の力に頼らねばならぬといふことは、酷く私の心を可恥(かぢ)がらせた。必要品でも貰ふなら有りがたいと思はぬではないが、他の慈善に纏るといふことは面白く思へなかつた。それに信心深い女といふやうなものは、私には何の意味もなかつた。けれどもボンツェル氏の勧めと言ひ、飢渴には責め立てられるやうだし、旅行の楽しさも思はれて、目的が一つの出来たやうな氣がし出したから、無理に決心してアヌシイへと發つた。

一日費れば行ける處を、ぶら／＼歩いて三日目に著いた。道の右左に、相應な別

1728(17)-1731(20)

1728(17)-1731(20)

莊が見えると、かねて、頭腦の中に横はつてゐるアヴンチウツルを試すのは此處だといふ考で、その傍へ近寄らぬ譯に行かなかつた。でも臆病な私は、中へ這入ることも、扉を敲いて見ることも出来なかつた。が偶と見上げて、此處らと思ふ窓の下に立ち寄つて唄を唱つて見た。長いこと喉の苦しさを忍んで唸つて見ても、誰も顔を出さない。友達に教はつた、いろんないい唄を、巧みに唱ひこなしたのだから、令夫人や令嬢達が、美しい聲と旨い文句に牽かされて、必と姿を見せるだらうと思つたのが徒になつた。勢(いきほ)からず私は消けた。

とう／＼アヌシイへ着いて、ワレンス夫人に會つた。生涯で此の時期が私の性格を固めた。それを軽く見て通ることは出来ない。この時私は十六歳の末に近かつた。可憐な少年とは言ひにくい、が小柄でも恰好の良い方であつた。可愛らしい足、柔軟かな脛、暢びりした姿、元氣ある顔、引き締つた口、附き、黒々とした眉毛に頭髪。眼は少なくて、陥ち込んでゐたが、その中には全身の血潮を燃し立てる火の力が輝いた。不幸にも私は、斯ういふ自分の姿容については何も知らなかつた。生涯それを思つて見た事すらなかつた。斯うした姿を持つてゐることに氣の附

1728(17)-1731(20)

いた時分は、既う夙くに手遅れになつて了つた時であつた。この年頃に有り勝ちな臆病の上に、天性情に脆い風があつて、始終他の機嫌を損ねはせぬかといふ心が失せなかつた。精神に幾らかの練磨はあつても、未だ世間見ずて儀式作法を知らない。知識が進むに従つて、此の缺點は補はれることと思ひの外、ますますその缺點が判然浮き上るやうに思はれて来て、臆病は更に、臆病になつた。

で、とても自分の姿容などで目を懸けて貰へる氣遣ひはないと知つたから、別に工夫をしたことがあつた。それは形容澤山な一篇の美文を作つて、書物に出てる熟語やら、職人仲間て使つた俗語やら、然ういふものを織り込んで、文才の有りたけを發揮し、それてワレンス夫人の氣に入られようとしたことであつた。これと一緒に、ボンヴェル氏の添手紙を封じ込んで、何となく胸の騒がれる目見得にと出掛けて行つた。

夫人は見えない。聞けば教會へ行つたといふ。其の日は一七二八年、復活祭前の日曜日であつた。私は彼女の跡を追つて行つた。偶とそのうしろ姿が見えたから、駈け寄つて言葉を掛けた。——その時の光景を憶ひ出さずにゐられない。

1728(17)-1731(20)

それ以來私は幾度となく、其の場所に涙を降り灑がせた。其の場所にあまた度接吻もした。斯ういふ思ひ出の深い場所を、黄金の高欄で取り廻はすことの出来なものが残念だ。此處を世界の聖地として、世の人の禮拜を集めたい。人間の聖なる遺跡を崇敬することを忘れない人達は、かならず跪いて近寄るべき處にして置きたい。

それは彼女の家の背後の細徑であつた。右手には細流がしよろ／＼と流れて、家と庭園の境を劃り、左の方には中庭の土塀があつて、その門を抜けると、聖フランシス Francis 教會への道が続いてゐる。門を潜らうとしかけたワレンス夫人は、呼ぶ聲を聞きつけて願つた。その顔を一目見た私は、奈何思つたであらう。感め面をした信心凝りの古媼さん、丁度あのボンヴェル氏の細君みたやうでもあらうかと、然う最初は想像してゐた。ところが遇つて見て、案外にも、實際に見た彼女は、慈愛に漲つた容貌、柔し味を湛へた美しい青い眼、眩しい許りの顔色、迷はせるやうな胸つきをした女であつた。此の年若な舊教歸依の婦人の素疾い視線には、何物も擒へられた。私も斯うした傳道者に鼓吹される宗教なら、樂園に人を導く事は疑



人夫スレワ

ワレンス夫人——ルイズ・エ・レオノール・ド・ワレンス Louise-Éléonore de Waraus は、
オ州のヴェヴェイ Verri 市 (レマン Léman 湖畔) の高貴な舊族、ラ・ツウル・ド・ビル La Tour de

1728(17)-1731(20)

第二卷

もなく思はれて、忽ち彼女に征服されて了つた。私が頭へる手で差し出した手紙を、彼女は微笑みながら受け取つて封を切つた。「ちよつとボンザル氏の添手紙に眼を呉れたまゝ、すぐ私の文に眼を移して、さら／＼と読み終つた。もう一度またそれを讀み返さうとする處へ、下男が来て、もう時間の迫つたことを知らせた。「まあ、震へさせるやうな調子で、歸も行かないのに一人て家を抜け出したんだつて？ ほんとうに不仕合な兒だこと。」
と言つて、返辭も待たずにまた斯う、
「私の處へ行つて待つといつて。そしてね誰かに然言つて御飯を喰へさせておもらひ。お勤行が済めばぢき歸つて、いろ／＼お話をしようからね。」
と附け加した。



人夫スレツ

フランス夫人——ルイズ・エレオノール・ドゥ・レンヌ Louise-Éléonore de Warens は、
オ州のヴェヴェイ Vevai 市 (レマン Léman 湖畔) の高貴な舊族、ラ・トゥール・ド・ビル La Tour de

1728(17)-1731(20)

第二卷

もなく思はれて、忽ち彼女に征服されて了つた。私が顛へる手で差し出した手紙を、彼女は微笑みながら受け取つて封を切つた。「ちよつとボンヴェル氏の添手紙に眼を呉れたまゝ、すぐ私の文に眼を移して、さらさらと読み終つた。もう一度またそれを讀み返さうとする處へ、下男が來て、もう時間の迫つたことを知らせた。

「まあ、震へさせるやうな調子で、齡も行かないのに一人て家を抜け出したんだつて? ほんとうに不仕合な兒だこと。」

と言つて、返辭も待たずにまた斯う、

「私の處へ行つて待つといで。そしてね、誰かに然言つて御飯を喰べさせておもらひ。お勤行が済めばちき歸つて、いろくお話をしようからね。」
と附け加した。

Pii家の令嬢であつた。ロオザンヌ Lausanneのヴィラルダン Villardin氏の誦男で、ロ
 ア Loy's家のワレンス Warensと云ふ人と、ごく若くて結婚した。が、子供が一人も生
 ず、結婚の首尾が面白くなかつたところ、幾らか家庭上の苦悶にも促されて、折から
 ヴィットリオアマデオ王がエヴァン Evianに居たのを幸ひ、夫人は湖水を南へ渡つて
 此の王の足下に身を投じた。彼女は斯うして夫をも家をも故郷をも棄てた。そ
 れは、丁度私と同じやうな輕擧な心から出たことだつたので、始終泣いて許り暮
 らした。王は熱心な舊教信者を氣取る人だつたから、彼女を手厚く保護して、ビエ
 モンテ一千五百リイヴル(約計六百圓)の扶助金を給することにした。この金は約
 しい王に取つては過分な額であつた。それに傍から、此の處置には野心でもあつ
 てのこと、思はれる憂があつたから、王は親兵一分隊を護衛に附けて、彼女をアヌ
 シイへ移した。此處でジッネエヴの名譽司教、ミシエル・ガブリエル・ド・ムルネエ Michel-
 Gabriel de Bernexの指導の下に、ヴィジタシオン Visitation教會の僧房で、新教を棄てる宣
 誓をした。

私が此處へ來たのは、それから六年目であつた。其の頃夫人は女盛りの二十八

1728(17)-1731(20)

歳であつた。此の「世紀」と同じ年の生れである。彼女にかす／＼の美しい處が残つてゐた。姿態よりも表情の方にそれが多く出て、最初の面影が歴々と窺はれた。可憐しい、温かな容態、しみ／＼とする眼差、天使のやうな微笑、私のやうな愛らしい口つき。灰色の頭髮に稀しい美しきがあるのと、無造作に顔のところて縮ねてあるから、なほ他を刺すやうに思はせた。軀は小作りで、背の高い割合には、胸の邊の肉が多過ぎるかと思はれる程だが、決して醜くはなかつた。頭、胸、手、腕などは、此の女のほど惚々するを見ようと言つて見られるものでなかつた。

彼女は難駁な教育を受けた。私と同じやうに、生れるとすぐ母親が歿つた。そして折につけて、出たら目な、いろんな教訓を受けた。家庭の女教師や父や、學校教員からは、僅かな知識を得ただけで、多くは戀人から學んだ。中にも「タヴァル(Tavel)」といふ男は、趣味も博く、智識も相應にあつて、彼女を愛したから、それから種々な修養が得られた。併し斯う種類の異なつた、いろんな知識は、いづれも互ひに相剋したやうなものであつた。そして互ひ／＼の間に、十分秩序を立てる事が出来なかつたから、種々な研究も、遂に彼女の天稟の長所を開發せず終つた。這麼譯て幾ら

1728(17)-1731(20)

か哲學や科學の理窟は心得てゐても、父が舊式の醫方や、鍊金術の趣味でも持つてゐれば、それもまた棄て、了ひ兼ねた。長命液、染色液、鎮痛藥、秘傳藥、さういふものを彼女は調劑した。然ういふ秘傳を知つてゐることが得意であつた。彼女の氣の弱いのを、香具師等がまたよい事にして、可厭に付き纏つて、身上を喰ひ耗らすやうな事をした。そして又、竈だ藥品だと言つてゐる間に、上流社會の花となり得べき彼女の明智をも、才藝をも、艶美をも、残らずぶつ壊すやうな事をした。

歪んだ教育の隙間を狙つて、詐欺師どもが彼女の靈智の光りを晦まさうとしたけれど、優れた感情ばかりは、静と試鍊に踏み堪へて、常も同じ調子を變へなかつた。可愛ゆくてやさしいその性格、薄倖者への同感、無盡の慈愛心、樂しげな打ち開いた、眞率な氣分は、決して失せなかつた。だん／＼齡が傾いて來てからも、窮乏、逆運、災禍の眞直中に立ちながら、美はしく澄み徹つた姿の精靈は、その榮えた時分の快活さを、臨終の日まで、失はせなかつた。

彼女には、何か知ら絶えず爲事を好む無限の活動力があつた。彼女の失敗もそこから來た。と言つて、普通の女子のやうに、隱密な企てを喜ぶ風でもなかつた。

立派に外に打つて出る。然ういふ事業であつた。つまり大きな爲事をする人であつた。彼女から見れば、ロングヴェイル Longueville 夫人などは、齷齪屋に過ぎなかつた。〔譯者云。ロングヴェイル夫人は大コンデ Conde 將軍の妹。路易第十四世王朝の初期に起つた内亂 La guerre de la Fronde に加はつて、主要な活動をした人。〕ロングヴェイル夫人とは違つて、彼女は國家を統治する人であつた。この二女の手腕は反對になつた。高い位置に居れば、ワレンス夫人に名譽を被せた筈の素質があいふ位置に止まつたが爲に、却つて破滅を招く因となつた。彼女は手近にある物を捉へては、何時も頭腦の中で做大に脚色をして見たり、目的物は始終廓大して眺めてゐた。其の結果、實力不相應な手段を採ることになつた。それが爲に、自分と組み合つて事を始めた手合は皆無難である。彼女だけが二進も三進も動けなくなるやうなことがあつた。事業熱は、これ程彼女に禍をしたけれど、僧院に這入つた彼女には、少くもその希望通り、後半生を其處に落ち著かせて置かなかつただけの利益は確にあつた。僧尼の單調で質素な生活、談話室内の下らない饒舌すべては、始終動搖してゐる心を誘ふことが出来なかつた。そしてこの心は、日ごと新しい爲事を

1728(17)-1731(20)

1728(17)-1731(20)

思ひ浮べては、それを成就するために、自由の身になることを願つてゐた。ベルネエ司教は、フランソア・ド・サル François de Sales と比べて、知識の方は見劣りがしたけれど、大分よく似た處のある人であつた。其の人に娘とまで呼ばれ、且いろくの點でシントアル Chantal 夫人に似たワレンス夫人であつたから、若しも修道院の蕭散な生活を彼女が喜みさへしたら、世界から隱遁したといふ事、一層類似の點が増したところであつた。〔譯者云。聖フランソアはジッネエツの司教。シントアル夫人と力を協せて、ヴィジタンオン教會を創めた。一五六七—一六二二。〕やさしい彼女が、高僧の下に立つ改宗女子らしい、雑多な宗教事業に身を委ねなかつたと言つて、それを敬虔の心が缺けてゐた爲とは言へない。改宗した理由が何であつたにしても、歸依した宗派に對しては誠實であつた。前の背教の失策は悔いたかも知れぬけれど、其處へもう一度戻らうといふ氣はなかつた。また單だ世間並の加特力教徒で終らうとするばかりでなかつた。非常に熱い信仰の下に生きた。私は彼女の心の奥底まで読み分けたと信じてゐるから言ふのだが、彼女が自分から信者といふことを大きな聲して言ひ徇らさなかつたのは、矯飾を嫌がつ

たからであつた。信仰を見得にする——然ういふ浮薄な心を持つ彼女ではなかつた。がしかし、今茲で餘り立ち入つて彼女の本心を探る時でない。外の處でまだ話す機があるだらう。

夫人との初めての面會、その一語、その一瞥に強く——牽き附けられて、その時に涌いた信頼の念が、一生私を欺かなかつたのを見て、心の交流といふ事を否定したがる人達は、何と言つて説明するであらう。その私の感じを戀愛であつたと假りにしよう。私達二人の關係史を讀んで行く人には、少くも然う釋られるかも知らぬが、しかし、熟く考へて見て欲しい。その情の萌した初發から、戀愛とは殊に縁遠い、心の平穩と沈靜と、確固とが、奈何して同時に伴つて來ることが出來たであらうか。愛すべき、練磨のある、驚嘆すべき婦人、是れまで一度でも相識になつた事のないやうな、貴い身分の婦人、其の人の心配したよりも以上の利害を懸けて、わが運命を任せたる婦人——然ういふ人に始めて顔を合して、前から彼女に氣に入られる事が判つてゐたやうに、奈何して然う心置なく暢々とした心地でゐられたらう。奈何して私は片時も壓迫、怯懦、束縛を感じなかつたか。羞恥家で、狼狽者で、世間知ら

1728(17)-1731(20)

1728(17)-1731(20)

ずの私が、奈何して初めから十年も前の舊馴染と話すやうな調子で、言葉まで馴々しく彼女に接することが出來たであらうか。この間に果して戀愛があつたと言はれるであらうか。無論或る欲望がなかつたとは言はぬが、併し不安もなければ嫉妬もなかつた。愛情があれば、その報酬を待ち焦がれるのは普通の事だが、生涯に唯一度でも那樣事を思つたことはなかつた。唯私は自分の方に愛があるか、奈何かと訊いて見る許りであつた。彼女も、私に好奇心を動かしたとも思はれなかつた。この艶美な婦人に對する感情の中には、何か尋常でないやうなものがあつた事は事實である。茲では分らぬが、段々話して行く中には、それが何者であつたかが知れると思ふ。

是から私は、奈何成らうといふのか。それが問題であつた。緩乎成行を話する積りて、食事の席へ招かれて行つた。食事の時に物が喰へなかつたといふやうなことは、前後に會てないことであつた。給仕の小間使ひも、此の位の齡で、這麼恰好をしてゐる者で、物が喰へたくないなどといふのは、初度だと言つてゐた。この話は、主婦たる人には、感情を悪くさせなかつたが、一緒に物を喰つてゐた一人して

六人前の碟を平げるといふ一人の肥満つた田舎者に取つては可なり痛かつた。私は歡喜が極まつたといふ風で物が咽へ通らなかつた。心の中は新たな感情で濕はされて、全身までそれが廻つて行つた。他に甚麽事があつてもその方を顧る餘裕はなかつた。

ワレンス夫人は私の小歴史を知りたがつた。それを話し出すに附けて、以前の主人の家で消え失せた熱情が復た燃え立つた。聰明な夫人は、私に感動させられる程、いよ／＼可哀さうで堪らなくなつて來た。やさしい同情は彼女の様子にも眼附にも身振りにも讀まれた。ジ、ネエツへ歸つて呉れ、とは有繋に彼女も得言はなかつた。加特力教徒といふ彼女の身の上から言へば、然ういう勸告は背信の罪となるべきであつた。そして彼女は、自分が嚴しく眼を附けられて、言ふ言葉にも束縛が伴いてゐるといふことを知らずに居なかつた。でも彼女が、私の父の憂さ目を思ひ遣つて、如何にも彼を憫むといふ風であつたのなぞから見ると、若しも私が父を慰めに故郷へ歸ると言ひ出したら、必とそれを喜んだに違ひない。ところが彼女自らは氣附かなかつたらうが、その優しい言葉を聴かされる私は、いよ／＼

1728(17)-1731(20)

1728(17)-1731(20)

彼女の本意から離れて行くやうになつた。那の情の籠つた人に迫るやうな言葉を聞けば聞くだけ、彼女を離れる氣が鈍つた。ジ、ネエツへ歸るのは、彼女との間に超え難い障を結へるやうなものだ。一旦歩いて出た道を、復た後戻りするやうなものだ。此の儘静と居た方が、どの位増したか知れぬ。私は斯う感じて、そのまゝ居坐ることにした。夫人は、幾ら言つて聴かしたところで、効ないことを知つても、この上はとて、唯憫みの眼で私に、

「何處でも神様の召しなされる處へ行くがい。お前が大きく成りの時には、必と私の事を憶ひ出すに違ひない。」

斯う言ひ諭した。これが預言となつて、殘酷に私の身の上に落ちて來ようとは、眞逆、彼女も氣附かなかつたらしい。

問題は依然残つてゐる。齡の行かぬに郷里を離れて、奈何してわが身を支へよう。徒弟の修業と言つても、途中までで廢したのだから、生活の道を覺えるまでには未だ其の先が遠かつた。縦しそれを覺えたところで、藝術には青盲なサツアアては、活計の立てられる道理がない。

1728(17)-1731(20)

例の他の分まで喰き込んで了つた田舎者が、しばらく顎を休ませてゐる間に、斯ういふ意見を出した。それを彼は天から授かつた託宣だ、などと言つてゐたけれど、熱く聴いて見れば、それは反對の方からの託宣であつた。それは、私にトリノへ行つて、新たな改宗者を教育する爲の修道院で、しばらく實際と精神と兩方面の生活を通つて、舊教會に入る準備を卒へ、それから慈恵厚い人々のなさけて、相當な位置を見出したら可からうといふのであつた。

「尤も旅費のことだが、これは夫人の方から、斯ういふ聖き事業といふことさへ申し出されたら、司教様もそれを出すのに否とも被仰るまい。それに男爵夫人も、随分慈善の方では知られてゐる方だから……」と言つて、復た碟の上へ伸しかゝりながら、「それやあ必とまた若干金かお恵みくださることは、大丈夫請合といふものよ。」

那樣慈恵は幾らあつても、私には煩いばかりであつた。胸が塞がるやうで、口が利けなかつた。夫人はその男ほども熱心に勧めなかつた。たゞ銘々分相應に善因を積めばよいといふこと、司教の方へ話して見ようといふことを答へただけ

1728(17)-1731(20)

であつた。それなのにこの人鬼めは、自分の思つた通りに夫人が話し込むまいといふことを心配し、それと一緒に今度の事で何か眼を著けてゐることがあつたから、ちやんと施主達の方へ先廻りして、よく私の身の上を話し聞かせ、そして人のよい司祭たちを甘々抱き込んで置いたので、この旅行について餘り進んでゐない夫人が、司教へその事を申し出た時は、もう何も彼も決定して了つてゐた時で、早速私の旅費にと宛てられた金を受け取つて來た。彼女はもう奈何することも出来なかつた。齡から言つても、私は既う斯ういふ女の傍に近づいてゐられないやうな年輩に迫つて來た。

この旅行は、自分の面倒を見て呉れた人達の力で極まつたのだから、素直に従はなければならなかつた。で、餘り駄々を捏ねずに、その言ふなりになつてゐた。トリノと言へば、大分ジッネエツへ行くとよりは、遠い處だが、今居る國(サルヂニア)の首府でもあるから、他の政府も宗教も異なつた市よりは、アヌシイとの關係が一層深からうと思つた。それにワレンヌ夫人の意見のまゝに出掛けるのだから、言はば何時までも夫人の保護の下に生きるのだ。隣に住んでゐるやうなものだ。然うも

思つて見たりした。斯うして長い旅をしようといふ考は折から勃然と動き初めた漂浪生活の念とびつたり出遇つた。自分程の年頃で険しい山道を越え、亞爾伯 Alps の峯々に登つて、友達の誰よりも高い處に立つといふことは、豪儀な事に思はれた。觀光の爲の遊歴、それならばジョネエツ人には制へがたい誘惑の一つである。私も同意といふことを告げた。田舎者は二日の中に妻と伴つて發つ筈であつた。私は二人に宜しく頼む旨を述べた。財布の金は夫人が増して呉れたのを夫婦が預かつた。未だその外に、内證で幾らかの貯金と、それにいろんな心得まで添へて、餞別に貰つた。發つたのは、復活祭前の水曜日であつた。

1728(17)-1731(20)

出發の翌日、私の父は、その友のリヴァルピエールと連れ立つて、私を追つ蒐けてアヌシイまで捜しに來た。この人も尙且家は時計屋で、感情の豊かな文才のある人で、詩などは本職のラモントより巧く、談話減りも丁度彼の敵手になれた譯者云。Antoine Houdart de La Motte. 巴里の詩人、批評家、寓話家。一六七二—一七三一。その上謹

直な人であつたが、柄に無い此の人の文藝趣味は、息子の中から嬉劇俳優を一人出しただけが行き止りになつた。

父とこの人は、ワレンス夫人の家に著いて、彼女と一緒に私の成行きを憫んだだけ終つた。私は徒歩だし、其の人達は騎馬なのだから、追つ掛けて來て引き留める氣さへあれば、奈何にでもなつたらうに、それをしなかつた。同じやうな事が小父のベルナルにもあつた。これはコンフィニオンまで尋ねて來ながら、私がアヌシイに居ると聞いたので、そのまゝ、ジョネエツへ引き返した。私の近親たちは、私の運星と腹を合せて行くところまで私を逐つ立てなければならなかつたものと見える。唯一人あつた兄も、同じやうな放慢から、遂に奈何成り果てたか、誰一人知る者もないまでに顧みられなかつた。

父は唯名譽の人といふのみでなく、嚴正の人でもあり、立派な道德を好む勇猛心をも蓄へてゐた。殊に私に對しては、善良な父といふことがよく現れた。可愛がり方も一通りてなかつた。が、それと同時に、自分の方の歡樂を愛することも忘れなかつた。父子離れくゝに暮らすやうになつてからは、種々な享樂が出來て、幾ら

1728(17)-1731(20)

1728(17)-1731(20)

か父としての情が薄められた。父はニヨンて二度目の妻を迎へた。その妻は既
 う新規に私の兄弟を生へる齡でもなかつたが若干骨肉があつて、其處で別の一家
 が出来た。別な出来事が起り、新しい心遣ひもあつたりする間に、今までのやう
 に私の事を思ひ出す暇もなかつたらしい。父は齡を取つたが、老後を安らかに過
 す程資産もなかつた。兄と私には、母の遺産が幾らかづゝあつたから、其の收入は
 私達の居ぬうちは父の物になる筈であつた。斯ういふ考は、直接父の心に浮んだ
 譯でもなく、またこの爲に親としての義務を忘れたといふのでもなかつたけれど、
 知らず／＼の裡には其の考が浮ばないにも限らぬから、もつと強く現はれなければ
 ならぬ筈の慈愛が、をり／＼弛みがちになつた。それだから、折角跡を跟けてア
 ヌシイまで來ながら、もう一足といふシンベリイへは踏み出さなかつたのだらう
 と思ふ。逃亡してから後も、度々父に遇ひには行つたが、何時も通り一遍に待遇す
 だけで強ひて引き留めるやうな事もしなかつた。これも大方那樣意味であつた
 のだらう。

愛情と美德の備はつたこの父に、斯ういふ振舞があつたといふことは、私にわが

1728(17)-1731(20)

身を反省させた。此の反省は、健全な心を私に持たせる上に、少からぬ功があつた。
 それから私は實際的の教訓を抽き出した。——吾儕の義務に反した利益を貪つて
 はならぬ。他の不幸から己が幸福を求めてはならぬ。斯ういふのであつた。此
 の考の根を止めて了はぬ以上、道徳を愛する情は、知らず／＼冷えて行つて精神だ
 けは正しくても、行爲は不正、不善に陥る。それは知れたことである。

この教訓は胸の奥底に深く刻み込まれた。後にはこれを一切の行の上に見し
 て見せた。それがそも／＼一般の人々から、殊には自分の知人の間から、狂氣か、白
 痴かと疑ぐられるやうになつた起因である。他は私を目ざして創始を好む人間
 だことの世間と異つた事をしたがる人間だことの——然ういふ風によく言ふ。
 けれど、何も世間並にと世間と異つたやうにと考へてしてゐるのではなかつ
 た。たゞ／＼よい事をするのが願ひなのだ。他人の利害に反するやうな利害の
 念を起して縦令知らずにもしる、其の人の不幸の間に窃と自分の欲を充たさうと
 する、然ういふ境遇を極力排除しただけである。

今から二年ばかり、前元帥卿譯者云。この人の事は第十二卷、一七六二年の條以

1728(17)-1731(20)

下に詳しく出るが遺言状の中へ、私の名前も書き入れようとしたので、力限り拒んだことがあつた。その時私は、何の必要があつて、他人の遺言状の厄介になつて、自分を吹聴する氣にならう、況して彼のやうな人には尙更頼めぬ、といふ意味を堅く言ひ通した。で、彼もその志は罷らした。そのかはり、終身年金を受け取つて欲しいといふから、それは私も辭らない。斯ういふ交換問題のために、何か私が勘定づくりに考たやうにでも思はれるか知らぬ。恐らく然うかも知れぬ。併し、私の恩人たり父たる卿よ。若し不幸にして私の方が跡に生き残るやうな事があつたら、何も彼も失つて了ふのですから、一物も手に入るものがないことは、よく承知してゐます。

惟ふに、是が偽らざる哲學——眞に人の心と密著した眞理である。私は毎日此の眞理に深い味のあることを心に銘じた。是を種々に言ひ換へて、後年の著作にも使つた。が凡俗な世間は、格別深く注意するらしくもなかつた。若しこの書物が出来上つて、次の著作に取りかかるまで命が續けば、*Emile*の後日として右の教訓を使つた、非常に面白い、刺撃のある例を引いて、いやでも讀者に考へさせ

1728(17)-1731(20)

るやうなものを書きたいと思つてゐる。それはさて置き、今旅人になつた私にしては、餘計なことを考へ過ぎたから、復た旅行の方をつゞけることにしよう。

想つたより旅行は面白かつた。例の田舎者も、見掛けによらない意地悪でもなかつた。中年の男で、濃い灰色の頭髪を辮髪にして肩に懸けた、ちよつと下士とて言ひさうな恰好。聲に底力があつて快活に話す。歩く事もよく歩き、喰ふことも一倍よく喰つて、何も知らぬ癖に何んにも手を出して見ると言つた風であつた。アヌシイで何かの製造業でも創めようとしたものらしく、ワレンヌ夫人の方々に異存はなかつた。今トリノへ出掛けるといふのも、全く彼地で理事者の賛成を求めて、其の結果旨い汁を吸はうといふ魂膽であつた。此の男は始終僧侶を味方に啗へ込むのが上手で、頻りとその中へ出入りをしては、其の學校で宗教上の用語を聞き習つて来て、一廉の説教者を氣取つてゐた。加旃に、舊約聖書の一句ぐらゐは、羅甸の原語で記してゐるのを、日に千度も繰り返し、するのて、那樣に澤山知

1728(17)-1731(20)

つてゐるのかと怪ませる程であつた。他の財布に金のあることを知つてゐる時には金に不自由しなかつた。でも詐欺師ではない。それだけ惻巧なだらう。彼が空元氣を附けて片言交りの説教を唸り出すときの調子と言つたら、隠者彼得 Petrus が劔を横へて、聖地恢復の擧を熱心籠めて主張するやうであつた。

この熱誠な案内者と、氣爽な妻に伴れられて面白可笑しく歩いた。煩い出来事もなかつた。身も心も斯う樂々としてゐた事は、前後にもない。船は若し、元氣はあり、何となく氣丈夫で、自分も他も可頼しく、心繫りな點は少しもない。ごく短い間だが、是は生涯での注意すべき時期である。漲るやうな活力は、肉體を擴張させ、一切の感覺を極度まで鋭くする。言ふべからざる生の享樂を感ずるとともに、自然のすべてからは、限りなき美が漂うて見える。楽しい不安の中にも一つの目的が立つたから、それが爲に不安が太甚しい不安でなくなり、妄想もどうやら片附きさうであつた。夫人の子か、弟子か、友か、戀人か、然う自分で自分を見た。嬉しさに堪へぬ那の物語、那の可愛いくと言つた所作、振那の有情しい心遣ひ、那の愛に満ちた、たましひを躍らせるやうな艶な目づかひ、然う言つたものが皆途中の妄想を

1728(17)-1731(20)

育んで、甘い夢を見せてくれた。運命の危懼、そんな物にこの夢は亂されなかつた。つくづく思へば、トリノへ私を送りつけるのも、畢竟彼地で身を立てられるやうにしてくれるのであらう。自分の事は、もう些とも心配するに及ばぬ、皆傍てよいやうにしてくれるのだ。て、私は重荷を卸したやうに、さも暢びりとして歩いた。若い欲、迷ふ望、可輝しい事業で、心が一ぱいになつた。

△眼に這入るかぎりの物は、皆近き將來の幸福を豫告する如くに見えた。家の中に這入れば、それから田舎風の宴會が心に浮んで来る。牧場を通つて行くと、さまゝな遊嬉を想ひ出す。川を眺めれば浴場、水を見れば魚樹木を見れば果物、その蔭には戀の隠れ家、山の頂には牛乳とクレム、——それからそれへ聯想が動く。心ゆく閑散平和純朴、行き方を定めぬ樂しさ。眼を掠める物は、一つとしてわが胸に歡喜の誘惑を持ち來さぬものはなかつた。實景が美はしくて、偉大で、變化に富んでゐるから、その誘惑も道理と思はせた。そこへ虛榮心も混つた。年若な身で伊太利亞に行くといふこと、廣々とした國を見て歩くといふこと、亞爾伯を越えてハンニバル Hannibal の跡を追ふといふこと、——それ等は皆齡には過ぎた譽れと

第二卷
思はれた。尙だそれに附け足して言へば、途中の休泊もなか／＼莫迦にはならなかつた。食慾の盛んな處へ喰ひ物がたつぷりと來た。實際私に餘計物を喰ふと言つて、文句を言ふがものはなかつた。て、サブランの食卓では、私の盛んな食慾も目に立ちしなかつた。

此の時の一週間程、何の心配もなしに旅行したことは、生涯に二度となかつたやうに思ふ。内儀の足に連れて歩くのだから、悠然と散歩でもしてゐるやうなものであつた。この記憶から、當時の種々な事が楽しくなる。殊に山中を歩くのが面白くなつた。けれど徒歩の旅をして、愉快で堪らなく思つたのは、若い時だけの事だ。總て種々な義務や重荷を持つ身になつてからは、紳士氣取りで馬車にも乗らねばならぬ。然うなつては、喰ひ入るやうな心配や苦悶までが、私と車に同乗する道理で、既うそれから、今迄の唯道中を歩くのが面白かつたに引きかへて、一時も早く行く先へ到着かうと熬る外に、何の望みもなくなつた。

會て巴里で、自分と趣味の同じい友を二人捜して、銘々が財布から五十ルイール（約計五百圓）づゝ、贖金し、期間は一年と極め、道連れには人足一人だけと限つて、皆徒

歩いて伊太利亞めぐりをしたいと思つたことがあつた。いろんな人間が同意して來た。けれど、それは表面釣られて來ただけで、内心には紛れもない、西班牙の城だと思ひ、見做して了つて、談の種にはするが、さて實行しようと言ひ出す者もなかつた。この計畫を熱心にデドロオ Diderot とグリム Grimm の二人に話して見た。二人も乗り氣になつて、大方話が纏りさうになつたといふ處で、模様が翻然と變つた。書物の上で旅行をしようといふのだ。グリムの案では、デドロオに不信の罪を犯させて、其の罰に、私を身がはりに立てて、宗教裁判所へ押し籠めたら、これほど面白い

ことはあるまいと言ふのであつた。
トリノへ着くのが餘り早過ぎて飽氣なかつたが、その代り大都會が觀られる嬉しさと、自分の位置が定まるといふ希望が湧き立つた。野心の火の手は、既う頭の上まで來た。最早昔の弟子奉公の時代よりは、復と高い所に居るもののやうに思つた。實は其よりも復と低い所に沈みつゝあることに氣附かなかつた。
話を進める前に斷つて置くが、面倒な面白くもない事まで、自然言ひ出して來ることがあるから、それを承知して欲しい。「懺悔録」を思ひ立つたのは、自身を眞裸に

1728(17)-1731(20)

して公衆に視せる積りなのだから、其處些事でも隠蔽したり、糊塗したりしてはならぬ。絶えずこの身を讀者の前に立たせて置かねばならぬ。讀者の方でも私の心の端々、私のライフの隅々まで、限なく追窮せねばならぬ。一瞬間でも眼を私の上から離して置きながら、此の文の中に些しの罅點や空隙を見つけ出して、そんな時に彼奴は何をしてたのだらう。などと言つて、包まらず話す氣が私になかつたやうに咎めることは御免を蒙る。人間の裏面の事については、十分に書き立てる積りだから、その上更に沈黙でまて補ふにも及ばぬ話だ。

置かな貯金もなくなつて來た。迂闊口を迂らしたばかりに、意外な儲をさせたやうなものであつた。ワレンス夫人が私の劍に著けてくれた銀の刺繡がしてあるリボンまで、内儀に捲き上げられて了つた。口惜しくて堪らなかつた。その劍さへ下手に出れば、尙且彼等の手に渡るところであつた。旅行中、夫婦は私のため、に随分金を使つた。ところが終には私を素裸に引き刺して了つた。トリノへ著いた時には、金も衣物も襦袢も皆なくなつて、此の先の運命は、全く自分一人の腕で作らなければならぬやうな境涯に置かれた。

1728(17)-1731(20)

紹介状を何通も持つて來て居たから、それを渡して廻つた。直と改宗者を教育する學林に案内された。此處で宗教教育を受けて、世渡りの道を覺えることになつた。其處へ這入つて行くと、鐵格子の嚴乎した扉があつて、通つて了ふと背後からがちやりと閉め切つた。初めて來て、這處光景を見せられたので、急に鬱ぎ込んでゐると誰だか別の室へ連れて行つた。室を見廻はすと、奥まつた處に木製の祭壇、その上には、磔刑の大塑像が立つてゐる。周圍にはまた、木製の椅子が四五脚並んでゐる。蠟燭も塗つたのかと見えたのは、使ひ舊した光澤であつた。これが集會の室であつた。其處に、自分の友達になる四五人の可怕さうな奴が、ごろ／＼してゐる。神の子にもならうといふやうな様子は更になく、惡魔に隨ふ弓卒かとも見えた。その中二人はスラヴニア Slavonia 人だつたが、自分達は亞弗利加猶太人 Jews of Manass だと言つてゐた。西班牙や伊太利亞を遍歴する、それが彼等の生涯で、何處でも利益のある處と見次第基督教に歸つて洗禮を受けるのだと告げた。ま

た別の鐵の扉が開いた。それは庭に臨んだ大露臺を二つに仕切る扉であつた。この口から、私の姉妹學友がぞろ／＼這入つて來た。彼等も私と同じ様に、洗禮に依つてではなく、嚴肅な背教の宣誓をして、基督に復活する人達であつた。素性を洗へば元は主の羊舎に惡しき臭を放つた磨れからの賣春婦か、さもなければ阿婆摺れの渡り女であつた。

斯ういふ姉妹達の中に、小綺麗な女が一人交つてゐた。これに私の興味は移つた。私と同一年ぐらゐの事によると一つ二つ向うの方が上かも知れぬ。婀娜々々しいその視線と私のが時々かち合つた。それから彼女と知己になつて見たいといふやうな希望が動き出した。けれど、彼女が此處へ這入つてから、既う三月も経ち、私が來てからでも二箇月にもなるのに、老女教師からはきびしい監督を受け、傳道師からは悔改めをさせようとして、必死と迫られてゐる際であつたから、近づいて行つて言葉を掛けるなどは、逆も出來ない事であつた。彼女は見かけに寄らぬ餘程な愚昧だつたと見えて、何時も教誨が長く續かなかつた。聖僧の力でも、到頭彼女に改心させることは出來なかつた。とかくする中、彼女は既うその半僧生活

1728(17)-1731(20)

に疲れて來た。信者であらうと無からうと、早く此處が出て了ひたいと言ふやうになつた。せめて未だ信者になる氣の抜け切らぬ中に、その申し出を許してやらないと、終には反抗を起して、奈何してもなるのが可厭だと拗ねたかも知れないところであつた。

私を迎へ入れる爲に、小い集會が催された。皆は簡単な教誨を聽かされた。私には神の恩恵に對へることを誓はせた。他の者等には、私と一緒に祈禱をするのと善い模範を見せて私を導びくことを勧めた。つゞいて處女達は、めい／＼の室に退つたから、私も今日の次第をゆる／＼と思ひ回す時間が得られた。

翌朝また集會で説教を聽かされた。この時始めて自分の踏んで行く道や、導かれて來た境涯やを思つて見た。

毎日私の彌増しに考へさせられることは、前にも言つた通り、子供の時分に、私ぐらゐの健全な教育を授けられた者はない、といふことであつた。世間並の習慣と異なる家で人と爲つた私は、聰明な模範を見做つてばかりゐた。父は歡樂の人であつたにしても、手堅い誠意があつた。宗教心も淺くなかつた。俗世間に向つては

1728(17)-1731(20)

1728(17)-1731(20)

通人だが、家庭の人としては立派な基督信者で、夙くから私にその感化を及ぼした。三人の小母は揃つて才徳の具はつた人達だったが、年嵩な二人は、殊に信神の念が篤かつた。三番目の小母は優しい情と鋭敏な心の作用を持つた女で、幾らか見得の氣味はあつたが信仰は他の二人よりも深かつたらしい。斯うした尊い家庭の中から、ランベルシエ氏の家に世話になりに行つた。これは教會の説教者で、心から信仰を思ふ人であつた。言ふだけの事は必と行て見せた。私の胸の中に見出した敬虔の心の芽生を、その兄妹して、軟かな、慧い訓で育て上げた。斯ういふ人達から、誠實に周到に、また正當に感化されて來た所爲で、説教を聴かされても疲れるといつたやうなことはなかつた。何時もそれが濟むと、胸は打たれたやうになつて、正しい道を歩みたいと思ひ入らぬ時はなかつた。小父の家では、宗教が稼業のやうになつてゐただけ、少し煩く思へた。主取りをするやうになつてからは、思想が變つたといふてはなかつたが、宗教の方の事は全く思つても見なかつたが、自分を腐爛させるやうな、若い友も見出さなかつたから、惡戯つ子にはなつたが、放肆な男にはならず済んだ。

1728(17)-1731(20)

て、私は少年には過ぎる程宗教心を持つた。いや、未だ／＼それが深かつた譯がある。今になつて思ふ事を匿して置くてもあるまい。私の兒童期は、實のところ兒童てはなくて、感情も思想も大人並であつた。常人の仲間入をしたのは大きくなつてからの事で、子供の時分には常人の圏外に立つてゐた。這處事を言ふと、如何にも非凡な人間らしく思ひ上がつてゐると言ふ謗が來るだらうが、併し、十分私を謗るのは可いが、甫か六歳位で、小説に吸ひ込まれて、面白がつて、終にはほろ／＼涙を翻す程夢中になるやうな子供が外にあつたら見せて貰ひたい。それが出たら、甘んじて其の謗りを受けて、自身の謬りであつた事を詫言よう。子供を信者に爲上げようと思つて、小さい時分から宗教のことを話すのは無駄な事だ、大人すらむづかしいのだから、況して子供が神を知るなどは間違ひにもない話だ。——と、斯う私が言ふとすれば、それは、一般から觀ての論であつて、決して私自身の経験ではない。私の経験は、逆も一般の場合には當て嵌めることが出來ぬ。ジャン・ジャン・クルソといふ者が外にあれば、六歳の頃に連れて來て、七歳になつたら宗教談を聴かして見給へ。大丈夫心配な事がないことは、請け合つて置

1728(17)-1731(20)

子供でも大人でも、生れた時からの宗教が一番感じが強い。人は奈何かすると、この宗教から脱することはあるが、それに或る物を付け加へることは滅多にない。即ちドグマチクな信仰は、教育の結果と見なければならぬ。斯ういふ一般の習慣から、家の宗派の方へ引き附けられた許りでない。外にもジャネエツの市の加特力教が可厭であつた譯がある。それは誰でも不快な偶像を拜まされること、僧侶が皆眞黒な衣を著てゐることであつた。この感じが深く沁み込んでゐたから、或る教會の中を覗いて見ても、法衣を著けた牧師に遇つても、勤行の鐘の音を聴いても、始終恐れ慄へないことはなかつた。それも程なく市中では感じなくなつたが、最初に経験したやうな田舎の法區などは、よくそれを思ひ出した。この印象と妙なコントラストになつた物がある。それは、ジャネエツ界限の牧師たちが、何爲か知らず市の子供を可愛がつた事である。臨終の聖餐の鈴を聴いて、魔を驚かす傍から、彌撒や晩拜の鐘につれて、朝飯や小晝餐や、鮮食牛酪や、水菓子や、煉乳、乾酪などが頭に浮んで來た。ボンザェル氏の家で、旨い晩餐を呼れたのなども、大變に關係が

1728(17)-1731(20)

あつた。斯ういふことから、最初可厭と思つたのがだん／＼様子が變つて行つた。はじめは、加特力教といふものは、面白く遊べて、旨い物の喰べられたる宗旨と言つた風にはかり考へてゐたけれど、何時とはなし、一つ此の宗教に纏つて見よう、などと思つたりするやうになつた。でも、それを職業にまてしようといふ考は、まだまだ餘程遠いことに思つてゐた。

ところが、今になつて見ると、退くに退かれぬ場合、よしない處へ頸を突つ込んだといふ恐怖が、犇々として來た。自分を取り捲いてゐる未來の新信徒達は、連も模範を見せて私を勵み立たせる柄でなかつた。神聖な事業が、愚劣な眞似としか見えなかつた。甚麼宗教が眞の宗教であるにしても、どの道元の自分の宗教を賣りに掛つてゐるのだ。代りに幾ら良いのを抽き當てたところで、天使を騙し、他の誘りを招くことは同じだ。私の若い心に斯う感じた。考へれば考へる程、自身が悪く思ひになるばかりであつた。そして、斯ういふ境遇を、我が手で作つたものとは思はず、ひたすら運命を嘆いた。次第に此の念が嵩じて來て、若し門口でも開いてゐたら、遁げ出しも爲兼ねなかつた。が、それは連も出來ない相談であり、

此の決心も長くは挫けずにゐなかつた。

それには種々な欲望があつて、その決心と戦つたからである。第一、ジッネエツへはもう決して歸らぬといふ頑固な考想歸るのが如何にも意氣地なく見えること山道を踏える困難、友もなく金もなく生れ故郷から遠く離れる心配——斯ういふものが一緒に紛糾つて、心の痛みは、すべて後悔の念で占められた。この先自分の爲ようとすることに理窟を附けようと思つて、今迄に爲た事を自分で譲める癖があつた。過去の過失を做大に見過ぎて、將來に起るものを、其から来る當然の結果であるやうに考へた。「何も悪いことはしないのだから、潔白なものだ。」と、然うは思はないで、這度罪人になつて悲しくてゐられぬ。未だこの先もこの罪を犯さなければならぬのだ。こんな風に考へた。

今日までの種々な希望や何かを舊の状態に復し繋がれてゐる鎖をばらりと断ち切つて、甚だ妨害をも物ともせず、に倣然とした態度で、わが先祖からの信教に踏み止まらうと思ふ、といふことを斷乎言ひ放つには、甚だに確乎した心があつても駄目だつた。然うした勇氣は私の齡では望めぬことであつた。又さういふ勇氣

1728(17)-1731(20)

1728(17)-1731(20)

から、幸福が得られたか、奈何かも、怪しいものであつた。その心を尙うち消すために、何かの準備は既に餘程進んで來てゐた。反抗すればする程、餘計にそれを押し潰すやうな手段が採られた。

世の中の人の多くは、機會の過ぎ去つた後になつて、はじめて、自己の意力の微弱であつたことを嗟く。私も尙且此の手で失敗つた。人間に過誤があるから、道徳に光が添はるのである。不斷人間が聰明を心掛けてゐたら、道徳に對する努力は止まつて了ふ。が、避ければ避け得られる阪道も、容易に人を引き落す。見すゝ危険は解つてゐても、ごく弱々しい誘惑にすら降服する人も多い。吾儕は知覺することなしに危い境地に陥る。事前には易々と逃れ得られることも、事後になつては、豪傑を僱つて來たところでも、手も附けられない。斯うして人は淵に溺れるのだ。そして徒らに神を仰いで、あゝ何ゆゑわれを斯かる弱き者には造り給へるぞ、と叫んでゐる。が、それには貪著もなく、神は吾儕の心に向つて、いかにも淵から出るには弱き者に造つた。それは最初淵に陥らぬやう、十分強き者に造つて置いたからだ。」と答へる。

1728(17)-1731(20)

私は加特力教徒にならうと判然決心した譯でもなかつた。併し時期がまだ大分先の事と思つて、ぼつ／＼其の方へ考を向けるやうにして行つた。その内にも何か好い機會が出来て、窮地から拯ひ出して貰へるだらうといふ風なことを思つて、静としてゐた。愚圖々々して時日を延べる積りて、出来るだけ巧く自分を守る工夫をした。けれど、いつとなく或る虚榮からこの決心を打忘れるやうになつて了つた。自分が折々教師達をやり込めることがあつたのを思つて、序に寧ろ彼等を頭の上からぬ程にして了つて遣らうといふ氣になつた。随分滑稽なくらゐ熱心になつた。——皆が私を改宗させようとしてゐる一方から、私が逆様に彼等を改宗させようといふ希望を持つた。愚かにも彼等と言ひ負かしさへすれば、新教の方へ改宗して来るものと考へた。

そこで私といふものは、知識の方でも、意志の方でも、皆の想像したほど與し易いものでなくなつた。元來新教徒の方が舊教徒より學問が深い。新教徒は理解を重んずるが、舊教信者は盲従するばかりだ。彼等とても、これを知らぬてはなかつたが、私の身分と言ひ、齡と言ひ、逆も經驗を積んだ其の人達の敵ではないと見透か

1728(17)-1731(20)

されてゐた。そのみならず、まだ初めての晚餐式もせず、それに伴ふ訓誨も受けなかつた。それも彼等に知られてゐた。併し、彼等の知らない事があつた。——ラッセルシエ氏の宅で、一通りこの方の教訓を受けたことと、ル・シ・ウルの教會と帝國の歴史から、この人達に取つて不利益となるやうな知識を蓄へてゐたこととがそれである。以前一度語記したのを忘れるともなく棄てゝゐたが、今また議論が始まつたについて、復た記憶の表へ浮び出た。

小軀な年寄りの重々しい僧が、皆の前で、第一の討論會をした。それは他の學友達に取つては、討論會といふよりは、宗教問答に近いものであつた。彼等の反對意見を壓へ附けるよりも、教へて聽かせる方が老僧には骨が折れた。併し、私だけは別もので、自分の順番が来ると、片端から彼を喰ひ止めた。向うの困りさうな問題は、一つでも容赦しなかつた。その爲に可怖しく會が長引いて、傍へ迷惑を掛けた。老僧は口達者に喋つた。逆上せあがつて横道へも逸れて行つた。俺は佛蘭西語がよく解らないから、なぞと言つては、際鋭い所を斬り抜けた。

翌日はまた餘り聒しくて外の者の妨害をするからと言つて、私一人だけ別の室

1728(17)-1731(20)

に入れた。其處へ來たのは、別な齡の若い、辯舌の爽かないかにもドクトル然と横柄に構へた傳道師であつた。廻りくどい陳腐漢を得意になつて喋る人であつた。だけれど、別に私は氣怯れもしなかつた。自分の地歩を失つたとも感じなかつた。ときばきした答も、此方からも種々な手で突つ込んで見た。彼は、聖アウグスチヌス Augustinus 聖グレゴリオ Gregorio——然ういふ呼び聲で、すぐ私を沈黙させ得るものと信じてゐた。が、そんな法王達の事なら、私の方でも彼に劣らず上手に振り廻すといふことを見て、少からず驚いてゐた。これは、私が然ういふ聖賢の本を讀んでゐたからではない。この若僧とても多分は然うであつたらう。唯私はルシ、ウルから抜いたいろ／＼の章句を覚えてゐた。向うが何か一句引用して來ると、それに就いては彼是と争はないで、同じ神父の言つた別の一句を引用して、彼を駁した。是には彼も一度ならず惱まされた。それでも到頭二つの理由から、勝利は彼の方へ行つた。一つは、私が彼を傷つけてはならぬと思つた程、強味が向うの方にあつたからだ。それは、那の老僧が、私の味方でないから、若僧を窘めるのは、却つて自分に不利益が來る本だらう、と齡には増せた分別をしたことである。もう一

つは有繫に若僧の學殖が、私のよりも豊かに豊かであつたことだ。彼の論には、私の追隨を許さぬやうな溝渠が一つ出來た。意外な反問が私の方から行つて困つた時には、問題外の事だと言ひ抜けて、翌日まで延ばした。時には私の引く句を皆嘘だと言ひ捲つて、取り合はぬこともあつた。その時には、經書の何處のところに出てるか、本を持つて來て出して見せろと言つて罵る。甚だことをしても、大した困難に出會すことはあるまい——然う彼は自分で思つて安心し切つてゐる。それに何と言つても私のは耳學問だから、書物といふものは親しみが薄からうし、縦し書物の何處かに出てゐる筈でも、大部なもの、中から唯一句だけ見つけ出すには、羅旬語の知識が私のやうでは役に立たないといふことも、熱く彼は知り抜いてゐた。私は彼について不審に思ふ事がある。よく私は新敎の敎師達の虚偽といふことを、聒しく攻撃したが、彼自身にも幾らかその氣味がなかつたであらうか。いや、自分に不利益な反問を喰つた時に引用句らしいものを、好い加減に製造して、急場逃れに使つたやうな事がなかつたであらうか。

下らない議論ばかり續いて、祈禱に苦情を翻したり、惡足搔をして暮して行く中

に面白くない氣持の悪い事件が起つた。もう少しして私の身に祟が來るところであつた。

それは自分達でモオル族だと言つてゐた二人の醜漢の中の一人が無暗に私に近づいて來たことであつた。初めは唯私の方では軽く釋つて此の哀むべき蠻人も私に向つて新らしい友情を解するやうになつたのであらう。一概に刎ね附けてはよくあるまい。といふ風に考へてゐるとだん／＼増長して狎戯けた眞似を爲出しさうな様子に見えて來た。それが癡狂といふやうな風であつた。私は身震ひする程可怕くなつて、すぐ年寄のロレンツァ Toranza といふ女幹事にこの事を言つて行つた。幹事は自分に激すると同時に私には黙つてゐた方がよいと口止めした。それを忘れて皆に喋つてゐると今度は管理者が聴き附けて、那樣事を大袈裟に言ひ立てる奴があるか。といつた様子が、あの蠻人を反つて辯護するのかと思はせた。羞恥を缺いた蠻人ならまだしもだが、斯ういふ位置に居る人間が怪しからぬ考だと思ふにつけて、その時からこの學林の生活が急に不愉快で堪らぬものに思はれて來た。この不愉快から遁れる途は一つしかなかつた。——今まで

いやて／＼爲方なかつた改宗の事を、もう一日も速く済まして了ふ量見になつた。人々は那の蠻人に何と言つたか知らない。ロレンツァ幹事はかりは前よりも尙險しい眼附をして彼を見張つた。彼はもう私に近づきもせず話しかけても來なくなつた。一週間後の彼は盛んな儀式の下に洗禮を受けてゐる人であつた。再生した彼の精靈のいつはりなきことを示すために頭から足の先まで純白に装はれた。翌朝は學林を出て行つた。それきりもう遇つたこともない。一月経つて私の番が巡つて來た。困難を極めた私の改宗——その名譽を監督の人達に負はせるには、これだけの時日が必要であつた。そして俄かに従順になつた私を前に置いて、彌が上に勝ち誇る爲に、舊教の信條を残らず復習させた。斯ういふ教育を遺漏なく受けて黙つて教師たちの言ふなりになつてゐた。到頭聖約翰の中央會堂に繰り込んで、背教の宣誓をして、洗禮をも受けることになつた。再度の洗禮までは實際受けなかつたのだが、それを受けると同様の儀式だつたので、一般の人からは新教徒といふものは基督信者ではないのかと思はせるやうにして了つた。私は斯うした儀式にお定りの灰色に白く縁飾の取つた衣を著

た。前と後に、人が一人づゝ銅盤を捧げ持つて、鍵でそれを敲いて行く。人々は信仰のために、又この新たな改宗者のために、心々の喜捨金を其の中に投げ入れた。其處に加特力らしい誇耀が遺憾なく現はれた。其の莊嚴は、凡俗の眼に敬仰の念を深めしめるとともに、私を屈辱の念に堪へられなくさせた。責めて白衣を著なかつたのが、未だしも助かりてあつた。それを著るのが本當なのだが生憎私がモオル族といふ名譽を持たなかつたために、私にだけ貸さなかつた。

まだこれだけでは濟まない。今度は異教徒審檢所に出て、今まで新教を信奉した罪の赦免を受け、それから顯理 Henri 第四世王が、大使に扈從されたやうな儀式で舊教會の懷に歸らなければならなかつた譯者云。顯理第四世王は、一五八九—一六一〇に至る間の佛蘭西王。審檢所に這入ると、心の底は、畏怖に封じられて見るから尊げな所長の姿も、この情を打ち消すに足らなかつた。初めには、私の信仰や身分や、家族などの事を訊いて、最後に、前前の母親は神の審判を受けたのだらうと言つて訊いた。簇々と忿怒が萌しかけたけれど、餘り可怖しさにそれも鎮まつて、甘んじて慙う答へた。願はくはわが母に、其の様な可忌しい事のなかつたこと

を。願はくは神がわが母の最後を照し給うたことを。然う言つた。僧は何とも言はなかつたが、ぎよろりと光らした眼の色から察して、決してよい心もちがしたものと、思へなかつた。

是て何も彼も濟んだ。これからが萬事思ひの儘になる時だ。然う思つてゐると、喜捨金で集まつた二十フラン(約計八圓)強を呉れた。もう出て行つて可いと言はれた。善き信者に生きよ。神の恩恵を、ろそかにすな。と言つて未來を祝福されたと思つたら、もう門が鎖まつて、何も見えなかつた。

て、一時いろ／＼の大望が、急に陰影の落ちたやうに暗くなつた。本來の信教に背き去つた者、他の毘に罹つた者といふやうな追憶の外には、今まで來た道筋に思ひ出とする程の事が何もなかつた。行く手の光明が悲惨と姿を改めたと思へば、——そして朝の中は甚麼殿堂に住居を定めようかと思ひ惱んでゐるかと思へば、晩にはもう餘儀なく路傍に假りの宿を捜すやうな場合になつたとすれば、心の中

第二卷
 の激變は思ひ遣られる。わが過誤から來た不遇、それを思へば追恨に身内の問も止めがたくて、拯ふべからざる絶望に落ちたらうと思ふ人もあらう。けれど、實際は然うてなかつた。生れて始めて二箇月以上も幽閉を喰つた迹の事とて、一度失つた自由を取り復した悦びが第一に私を襲つた。長いこと奴隸の状態でゐたのが、今また思ふまゝの振舞が出来るやうになつた。資力の裕かな、身分のよい、そして私の技倆を信用して呉れさうな人の多勢居る大都市の真中に、自分といふものを置いて考へて見た。此の幸運を待つには十分な時もあり、二十フランの衣兜の金は、費ひ切れぬ大金庫と思はれた。この金は、誰に氣兼ねなしに使つてよい金だ金を持つた人の安心、その味を初めて知つた。鬱憂と涙とは消えて、希望ばかりが目眩しく變り／＼した。その間には自重の念が、ちやんとして残つてゐた。這麼に自信と自安とを感じた事は曾てないことであつた。既う何かの希望が偲つたのかと思つた。そして、その爲に感謝すべき人は、外ならぬ自分といふものだけ、外に誰も無いのだと氣附くと尙嬉しくつて堪らなかつた。まづ最初に市中を駆け歩いて、稀らしい物見たさの心を満足させた。その時は

まさしく自分の許された自由を試して見るぐらゐの氣でゐた。兵營に出掛けて嬉しさうな顔でまじ／＼と軍人や兵器を眺めた。いろ／＼の行列に追隨して歩いた。僧侶の唱ふ頌歌にも聴き入つた。王宮を拜觀にも行つた。近寄るのが少し可憐いやうな氣がしたが、他の人も皆這入るから、迹から跟いて行くと、別に咎められもしない。小包を手に挈げてゐたからだらう。それはとにかく、王宮の中に這入つたといふ事は、急に豪い考に變つて行つた。もう其處の人になり濟ました。あまり歩いて足に性がなくなつて來た。腹は減るし、陽氣は暑くなつた。て牛乳屋へ飛び込んだ。ジョンカ Church (凝乳) に、何より好物の、ビエモンテ邊でグリッサン Brissin といふ旨い棒麪包を貰つて、たつた五六スウ(約計十錢)で、あと先のない結構な晚餐を濟ました。

さて何處か宿屋を見附けねばならぬ。ビエモンテ語が大分解り掛けてゐたから、餘り困りもしない。なるだけ儉約にと思つて、好みよりも財布の都合を考へて宿を擇ぶことにした。ポオロ町に行くと、軍人さんの細君で、一泊一スウ(約二錢)づつ取つて、奉公口の極まらない傭人などを泊めてゐるのがあると教はつた。早速

1728(17)-1731(20)

出掛けて見窄しい寢臺が一つ空いてゐるのがあつたから、それにした。細君といふ人には、子供が五六人もあるといふのに、未だごく若々しくて、結婚したのも此節のことださうだつた。夜は細君も、子供も、客も、一緒の部屋にごろ／＼寝た。毎晩然うだつた。熱く見ると、氣の良い女で、著物は何時も検束なく、頭もそのまゝ、まるで車力か何ぞのやうに嘔鳴つたりすることもあつたが、世話好きと見えて、いろい

ろ私の事など面倒見て呉れた。獨立ちになつたのと稀らしい物の見飽きが出来、嬉しさに浮々と毎日遊び歩いた。市街の内外を構はず、變つた物さへあれば、穿り出しては觀て廻つた。巢の中から出たての大都會を見たこともない若者に取つては、實際稀らしくないものといふのがなかつた。極まつて私は王宮に行つて、毎朝王の彌撒に出た。一つ會堂で、王や扈從の銘々と一緒にされるのが、名譽のやうに思へた。が、王宮は何時見ても同じ美しさで、段々刺撃が感じなくなるに件れて、ぼつ／＼萌しかけて來てゐた音樂の興味の方が強くなつた。當時サルチェニア王は、歐羅巴で最も卓れた音樂を持つてゐた。ソミイ Sonis デシッルダン Desjardins ベツ、チイ Bezzani などの諸星が、

1728(17)-1731(20)

入り替り立ち替り、其處へ出た。音律が正しくさへあれば、甚だ樂器を鳴らしても、少年の心は悦に入るのだから、そんな大樂匠は勿體な過ぎた。然うした大きな音樂に對しては、たゞ／＼愚かしく惚けたやうになつて、仲間入りをして見たいと思ふ程の執著もなかつた。

王宮の譽れと輝き、その中で一番心を動かしたものは、この中に一人の姫君が居ないだらうか。若し有れば、慰懃を通して、二人で小説の主人公になつて見たい。然ういふ考であつた。

丁度其の時に、それが實現されさうになつた。餘り見榮のよい舞臺ではなかつたが、若し成就しさえすれば、言ひ知れぬ歡樂に酔ふところであつた。

約しくはしては、日を送つたが、何時しか財布は輕くなつて來た。が、この儉約は、謹慎から來るのでなくて、自分の嗜好が淡泊なからだ。淡泊な生活を好む傾向は、今日費澤な食卓に著く身になつても、依然變らない。田舎料理ほど旨い物があらうとは、その時分は固より、今でも想像が出來ぬ。乳製品、鶏卵、野菜、乾酪、黒麩包、それと並の酒、それだけあれば、何時でも舌が鳴らせる。料理長や給仕が多勢かゝつて盛

1728(17)-1731(20)

り潰しに來なくても、食慾は堪能する。六スウか七スウて上等の食事が出來たのに、後には六フラン、七フラン出してそんなに結構と思つて喰つたことはない。贅澤に誘惑されなかつた。飲食には冷淡であつた。いや冷淡といつては語弊があるかも知れない。何爲なら物は粗末でも喰ふ時には出來得る限り味官を悦ばしたいと思つたからだ。梨子でも、ジョンカでも、乾酪でも、棒麪包でも、ナイフで切れさうなモンフェルラアト Montevato の酒でも、私を食道樂の大將にするに不足はなかつた。

如何に食ひ物には構はないと言つて、多寡が二十フランの最後、そればかり毎日苦に病んでゐた。齡から言つて無理もない輕はずみの間にも、未來を思ふ不安の念は、いつか恐怖の情に變じて行つた。數多の空想の中から、纔かに残つたのは衣食を求める方法だけであつた。それすら容易に實現されさうもなかつた。元稔古した彫刻の事も考へたが一人前の職人といふ處まではむづかしくもあり、備ひ主もトリノには澤山なかつた。て一時凌ぎに、方々の舗を廻つて歩いて、貨錢に望みはないから、ちよいとしたりした物に名前の頭字なり、紋章でも彫らして貰ひたいと頼

1728(17)-1731(20)

んで見たが、餘り香しい事もなかつた。行く先々で體よく斷られて了つた。偶に爲事はあつても、一食に有りつく程の代も得られなかつた。

或る朝、コントラノ、オヴ Contra Nova の町を通つて行くと、或る舗の店様に、若い女が一人坐つてゐるのが、玻璃戸越しに見えた。何となく懷愛しさうな牽き附けられるやうな女であつた。女の前では羞恥む癖の私も、例になくずつと這入つて、自分の手に少しばかり覺えのある事を話して見た。刎ね附けられるかと思ひの外、其處へ腰を卸させて、一通り身の上話を聽いて呉れた。憫むやうな眼附きをして、力をお落してない、善い基督の信者達は、決してお前を見棄てはしない、斯う言ひ聞かせた。それから、私がこれ／＼の道具が要ると言つたので、近所の金具屋へそれを取りに遣つた間に、自分で臺所から朝飯を持つて來て呉れた。この序開きはよい前兆に見えた。次の幕も果して然うだつた。

彼女は爲事を喜んで呉れた。少し私が落ち著いて、ぼつ／＼冗談でも言ひ始め

1728(17)-1731(20)

ると、またそれが氣に入られた。艶々しく濃厚粉飾した女であつた。顔附きは温
柔しさうだが、此の華美好きの所に、少々氣が置けた。併しなだけ溢れるやうな待
遇同情に満ちた聲音、やさしくしなやかな舉止、それで私の心もすぐまた和いだ。
これで既う占めたと思つた。然う思つたにつけて、一層氣が確かになつて來た。
ところが、他にも知る伊太利亞の女、況して媚婦でないとは言はされない程身綺麗な
女ではあつたが、不思議に身持の堅い人であつた。其處へ私が此の上ない臆病者
と來てゐるから、二人の間に或る物が成り立つといふことは見込がなかつた。こ
のアヴンチャウルを爲す途げる時間は私達に無かつた。私はしばしば彼女と膝を
突き合せて過ごした刹那々々を憶ひ出すたびに、言ひ知らぬ魅力を感じないこと
がない。そして其の際に、何とも言ひ様のない軟かな清しい、未だ初生の戀の果實
を味つたことも思ひ出される。

彼女は強く人を刺すやうなブリッヌで、その美しい顔に彩られた深切の色は、そ
の氣爽な氣分と相待つて、他を動かすやうにした。家の苗字は、バジリオ Basilio と
言つた。夫は主婦とは大分齡が老ひ加旃に嫉妬やきて、自分の留守中は番頭に見

1728(17)-1731(20)

張りをさせて置いた。番頭といふのは、女に縁の無さうな、ひよつとこであつた。
併し、幾ら匿しても、ぶり／＼と八つ當りを私に言つたところから見ると、確かに己
惚れがあつて、この主婦を張つてゐたといふことは争はれなかつた。でも彼は笛
は上手で、私はよく面白く聴いたものだ。この新エギストス Agisthos は、私が主婦
の室に這入るたびに必と何かぐづ／＼言つた(譯者云。エギストスは希臘傳説に
ミッケエネエ Mykenai 王、アガメムノン Agamemnon の従兄弟。王がトロヤ Troia に對し
て遠征の不在中、王妃クリッテムネストラ Clytemnestra を口説き落して、不義の淫樂
を縱にした。王が凱旋の後、その罪を懼れたのと、王がトロヤから伴れて來たプリ
アモス Priamos 王の息女、カサンドラ Cassandra に對する王妃の嫉妬との爲に、其謀し
て王を浴場で弑した。不義の二人もまた、妃の子オレステエス Orestes に殺された。
ひどく私を蔑視んだかはりに、主婦からまたあべこべに蔑視された。そればかり
でない。主婦は彼の居る前では、紙るばかりにして私を可愛がつて、それを熱
らせて慰まうとしてゐるらしく思はれた。斯うした復讐も嬉しくなくはないが、
それより主婦と二人きりの處で、然うして可愛がられるのだつたら、甚麼によから

1728(17)-1731(20)

うにと思つた。が、彼女はそこまで深入しなかつた。少くも、那樣機には異つた素振を見せた。或は私が未だ若過ぎると思つたのか、思ひ切つて自分から言ひ出せなかつたのか、それとも眞面目に濟まして居る氣でもあつたか、一種のつつましい心を持つてゐたから、私は悲觀はしないが、何爲だか妙に氣が怯けるやうに覺えた。ワレンス夫人に向つた時のやうな溫和しい、眞味な尊敬心は彼女から感ずること出来なかつた。可惱しい、打ち解けにくいやうな感じがした。氣分が紛れ絡まつて、うち顫へるやうであつた。眼と眼を見合はせるのが極りが悪く、傍に居ると息喘しくなつた。でも離れてゐると、胸が押し迫つて死ぬ程苦しい。衣物に染めてある花瓣綺麗な足の先、手套と袖の間から洩れて見える、白い肥えた腕、頸と襟巻の隙から出た生え際——向うに氣取られずに、私は眺め得るだけの部分を、慾深い眼で鑿かず眺めくした。一つの印象は、多くの他の印象と結び附いた。眼で見える處は勿論、隠れた部分まで注意してゐると、眼は昏々となつて、胸は押し挫かれるやう、一瞬は一瞬より呼吸がますます苦しくなつて、元へ復るのが容易でなかつた。唯音を立てずに、細く悲しげな嗟嘆を洩らすことだけより出来なかつた。そ

1728(17)-1731(20)

れすら二人が沈黙の裡に居る時の事だから、術なさは大抵でない。仕合せと主婚は一心に爲事をしてゐて、那樣事とも氣が附かず、附いても故と知らぬ振をしたらしい。でも、向うにも、幾らか思ひ遣りの有りさうな様子で、奈何かすると折々深い溜息の所爲で、襟巻が膨らんで見えることなどがあつた。然ういふ切迫詰つた光景に、われを忘れて手出してもしようとする、彼女は取り濟ました語調で、一言二言何か言ひ出して、それで私を元の我に立ち歸らせた。

「彼女唯一人、斯うした風に物も言はず、身振りも見せず、表情の豊かな眼の色さへ失せて、殆ど互ひの情意を通じ合ふ手が、りもなく、なくては居る處を幾度か見せ附けられた。斯ういふ状態は、私に取つて心懐惱の限りであつた。が、また秘されぬ樂しさも感じられる心の裡で、この可惱しさの原因を探ることは出来なかつた。さゝやかなこの密會も、彼女は不快に思つてゐなかつた。割合によくその機會を彼女は作つた。その時の彼女の素振、私への爲向け、それから考へても彼女の方に深い意味はなかつた。

或る時、彼女は番頭の馬鹿話に飽きて自分の室に退つた。私は次の室で大急ぎ

1728(17)-1731(20)

に爲事を済まして、その迹に跟いて行つた。室の扉が半分開け放してあつたので、窃と這入つた。彼女はずつと向うの窓の傍で、扉口に背を向けて刺繍をしてゐた。表の方で馬車の音が騒々しかつたから、私の這入つたことは少しも氣附かなかつた。常もは著附がきちんとしてゐるのに、今日は何となく婀娜つぽい。ぞく／＼するやうな容態だ。心もち俯首になつた領足の眞白いところが開け放しになつてゐる。品良く結げた頭髮に花が挿さつてゐる。その姿の全面に満ち溢つてゐるのは一種の魅力である。少時凝と視詰めて居ると、氣が斯うぼうつとなつて了ふ。

私は室の口の處で、坦然膝を突いて、如何にも情に堪へぬと言つた形で、兩腕を女の方へ突き伸ばした。向うには全く氣附かれぬ積りてゐたところが、煖爐の處に大姿見が懸つてゐて、私の所作が悉皆裏切された。自分の思ひ入つた心地を、向うで奈何汲んだか知らないが、這箇を見ようともせず、一言も物を言はない。が半分首を振り向けて、ちよつと指先で足元にあるマットを指した。總身が揺蕩と震へると、呀と言ふのと、マットの處へ飛んで出るのが同時であつた。さういふ場合に

1728(17)-1731(20)

ありながら、それ以上に進んで奈何しようといふ考もなく、口は利かず眞面に女を瞻上げもせず、成るだけ情を壓へる氣で、傍へ摺り寄つて膝に凭り掛るなどの事もなかつたのは、不思議とも見えよう。黙つたまゝで動かなかつた。併し實際私が靜穩だつたのではない。亢奮や歡喜や感激や、異體の知れぬ熱情や、それが皆ありありと素振の上に露れてゐた。彼女を不快がらせることはあるまいかと、はらはらする心から、引き締め／＼してゐたけれど、效はなかつた。

其の時の彼女は、決して私よりも平氣でゐたとは思へなかつた。私よりも大膽でゐたとも思へなかつた。私の様子を見て胸を病ました。斯ういふ目に私を遭したことを當惑した。結果をも思はないで、無分別に見せた自分の態度を、今更に後悔するらしかつた。て、私を喜ばすでもなく、然ればとて突き出して、了ひもしなかつた。凝と眼を爲事の上に注いで、傍に私が躊躇んでゐるのが見えなと言つた風をして、精々と針を運ばせた。私の可憐しい心、熬々する情、その半分は彼女の方にも必とあることはあるのだ。併し、彼女にも私と同じ羞恥の念があつて、それで外へは現さないのだ。また私の方から進んで來いとも言ひ得ないのだ。斯う

私のぼんやりした心にも推し測る事が出来た。五つなり六つなり、齡が向うが上であるだけ、思ひ切つた事も向うから爲出して來れば來る筈であつた。だから、私を促すやうにし掛けて來ない限りは、向うは那樣事を好まぬものと見做さなければならぬ、といふことに氣附いた。今になつて考へると、奈何も此の考が正しかつたらしい。確かに彼女は考深い質で、私のやうな世間見ずは、激勵のみでなく、教訓の必要もあるといふことを知つてゐた。

氣は上釣つてゐるが、それでごく寂やかな舞臺、また傍から觀れば滑稽だが、主人公に取つては酣醉の光景——此處へ若し邪魔が這入つて來なかつたら、奈何終局が結べたか、何時まで私が凝固つてゐたか、分らない處であつた。逆上が頂邊まで込み上つた頃に、隣の臺所の扉がざいと開いた。女は吃驚して口疾に、手眞似も交ぜて、

「さあ速く！ ロジイナ Rosina だよ。」

狼狽へて私が起ち上る途端に、彼女が差し出した片方の腕を緊乎握つて、燃えるやうな吻を二度まで接けた。二度目の時は、その震へ附くやうな、美しい手に、柔かな

力が這入つて、自分の吻に押つ附けられたやうな感じがした。併し斯うして失つた機會は復た歸つて來なかつた。私達の若い戀はもう其處まで行き止まつた。この婦人の繪姿が今も尙、心の底に輝かしい色のまゝ、彫り附けたやうになつて残つたのは、然うした次第からであつた。段々世の中が解つて來て、種々な婦人をも知るやうになる程、この繪姿にます／＼鮮明の度が増すばかりである。若し彼女が、少しでも經驗のある女だつたら、這處小僧を勵ますのにも、つと別な方法を選んだに違ひない。併し彼女の感情は、弱かつたかも知らぬが、決してみだりがはしくはなかつた。強い力で牽かれる儘に、知らず識らず動かされて行く傾きだけはあつた。それが最初の不貞であつたと思はれる點である。私が鐵面皮になる時はあつても、彼女を然うさせることは逆も望めぬことであつた。が、それ程までには、せすとも言ひ知らぬ悦樂を彼女から味はふことが出来た。たつた二分間——足元に躊躇んだ儘着物の端に觸れることも爲得なかつた、たつたそれだけの時間の味は、到底その外の女からは得られぬやうなものであつた。貞操な婦人を吾儕が愛する時に、それから來る情味ほど快いものはないと見える。斯ういふ婦人に向へ